長野県埋蔵文化財センター年報 1

1982~1984

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報１　　正誤表

頁	行	誤	正
7	14	Ⅵb	Ⅳb
8		ＳＫ黒曜石ブロック	ＳＸ黒曜石ブロック
10	12	(27～31)	(28～31)
16	10	(第12図中右)	(第12図中左)
20	13	与えるものは,	考えることは,
24	14	(第12図上)	(第19図上)
34	10	状地上の谷部	台地上の谷部
	14	第28図１～29・30	第28図１～28・30
46	図上		調査終了
			継続調査
			トレンチ部分
〃	図下		５号住居址
52	6	第44図	第46図
53	1	発掘調査概関係	発掘調査概要関係
60	7	牧田哲夫	牧内哲夫

長野県埋蔵文化財センター年報

1984

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

目　　次

口　絵

序……1

調査遺跡分布図……2

Ⅰ．発掘調査概要

1．大久保Ｂ遺跡……4
2．大洞遺跡……7
3．下り林遺跡……10
4．西林Ａ遺跡……12
5．膳棚Ｂ遺跡……14
6．膳棚Ｂ(白山)遺跡……16
7．中島Ａ遺跡……18
8．中島Ｂ遺跡……21
9．柳海途遺跡……24
10．膳棚Ａ遺跡……25
11．青木沢東遺跡……28
12．青木沢遺跡……29
13．八窪遺跡……30
14．北山遺跡……33
15．大原遺跡……34
16．御堂垣外遺跡……36
17．ヨケ遺跡……39
18．栗木沢遺跡……40
19．高山(城跡)遺跡……43
20．樋口遺跡……44
21．吉田川西遺跡……46
22．神戸遺跡……50
23．上二子遺跡……52
岡谷市内遺跡周辺の地形と地質……26

Ⅱ．普及・研究活動の概要

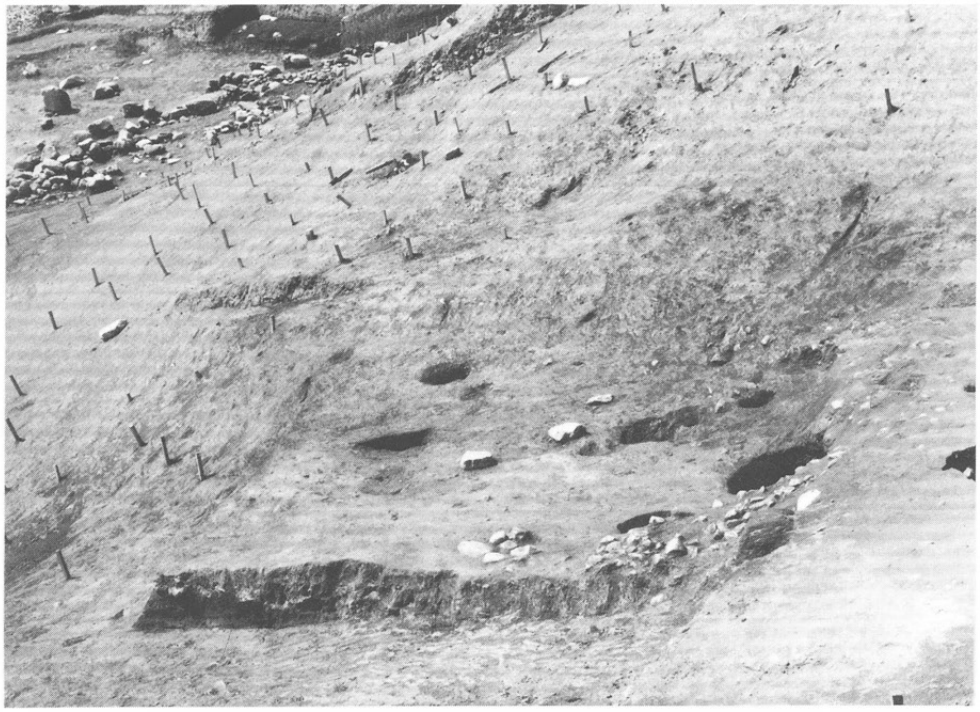
1．説明会……54
2．展示会……54
3．研究会……54
4．調査技術指導……56
5．遺跡研究発表会……56
6．刊行物……56

Ⅲ．事業概要

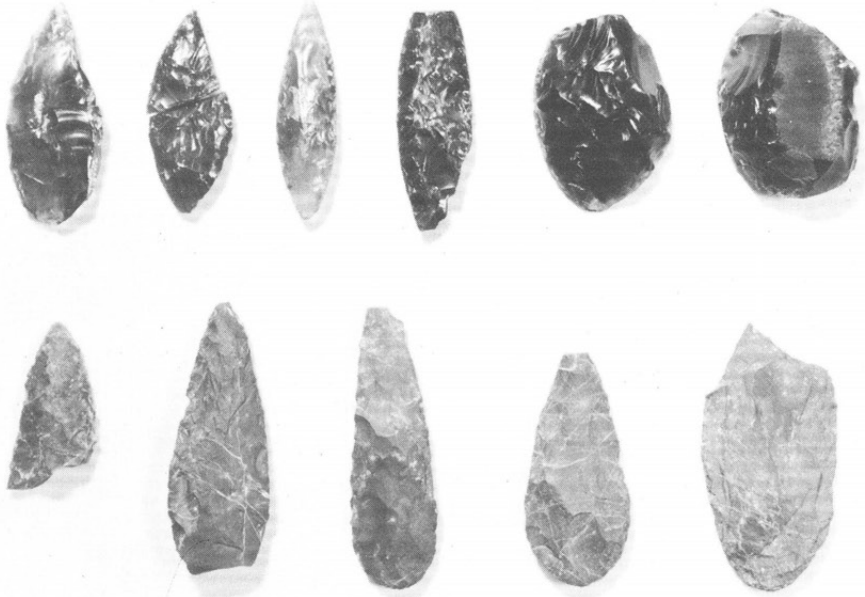
1．機構……57
(1) 組　織　(2) 事務所
2．事業概要……57
(1) 理事会及び会計監査
(2) 職員研修　(3) 普及活動
(4) 調査事業　(5) 事業費

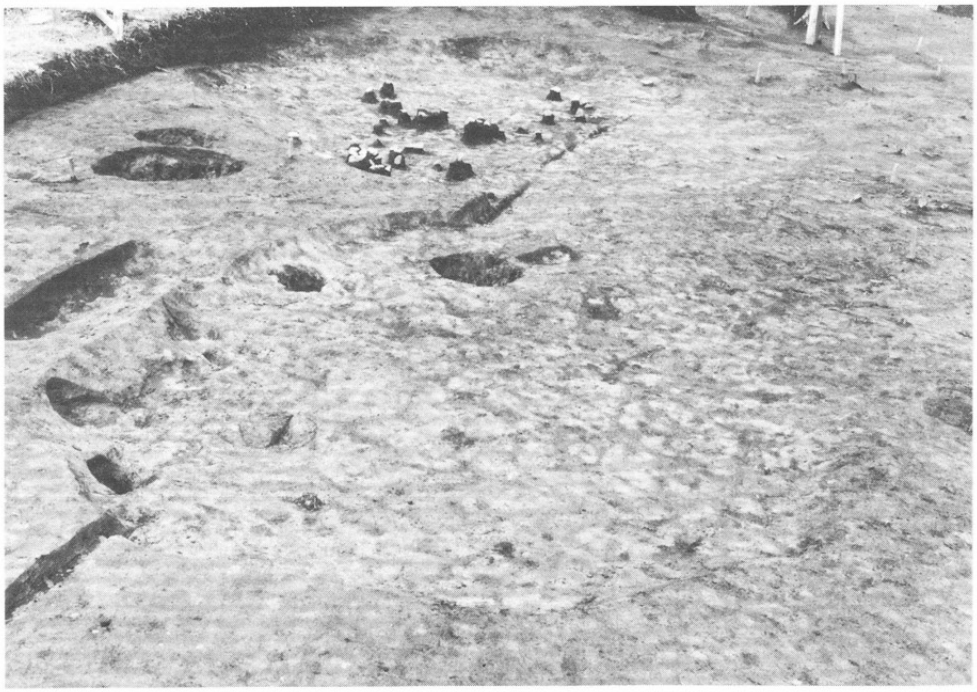
役員及び職員……60

大久保Ｂ遺跡２号墓(上)と出土した瑞雲双鸞八花鏡(下)

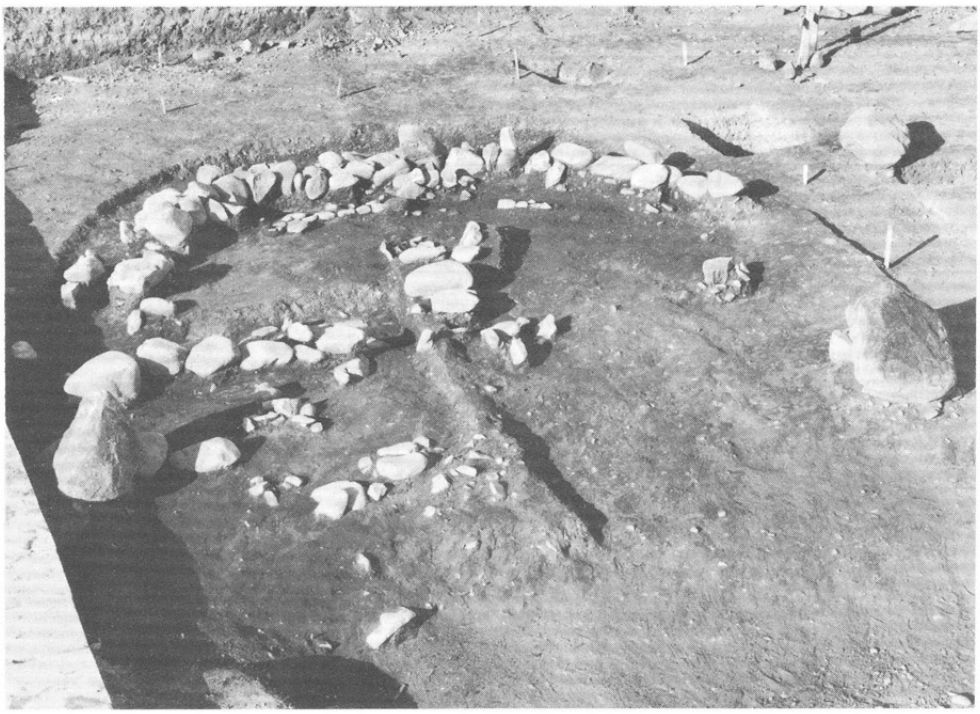


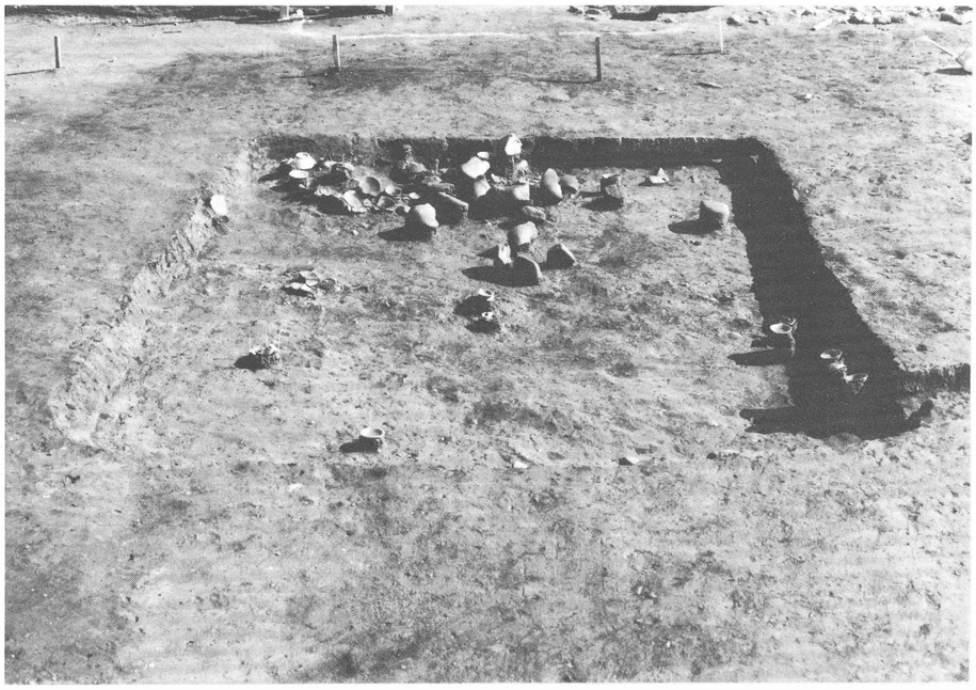
大洞遺跡３号住居址(上)と中島Ａ遺跡の遺物出土状況(下)





中島Ｂ遺跡出土石器(上)と八窪遺跡２・３号住居址(下)





御堂垣外遺跡３号住居址(上)と吉田川西遺跡５号住居址(下)

序

財団法人長野県埋蔵文化財センターは，昭和57年４月の発足から満３年を迎えようとしています。

日頃は，当センターの諸活動に御理解御協力をいただき感謝しております。

本法人は，主な事業を県内における埋蔵文化財の調査及び研究，調査技術の指導及び研修，保護思想の普及，啓蒙等を目的とし，当面は中央自動車道長野線，更には関越自動車道上越線，北陸新幹線等の大規模開発事業に対応して埋蔵文化財保護対策を適切に実施すること並びに保護思想の普及，啓蒙等を大きな柱としています。

中央自動車道長野線に係る発掘調査は，岡谷市地籍内では昭和57年５月に開始し，昭和59年10月に完了しました。また，塩尻市地籍内では昭和58年10月から，松本市地籍内では，昭和59年10月から開始し継続中であります。

調査の結果，大久保Ｂ遺跡（岡谷市）からは，全国で十数面の発見例を見るのみの青銅製「瑞雲双鸞八花鏡」（奈良時代）の出土，中島Ｂ遺跡（岡谷市）の旧石器製作址と考えられる遺構，御堂垣外遺跡（塩尻市）の敷石住居址，吉田川西遺跡（塩尻市）の平安時代の住居址多数の検出等多大な成果を収めることができました。

埋蔵文化財の保護思想の普及，啓蒙等の活動としては，「長野県埋蔵文化財ニュース」及び「図書目録Ｉ」の発行，各遺跡での現地説明会及び展示会等を行ってまいりました。

これらの事業内容を中心に「長野県埋蔵文化財センター年報1982～1984」を発行することになりました。

本書の創刊に当たり，御協力をいただいた関係各位に対し深く感謝を申し上げ今後とも倍旧の御支援と御協力をお願いいたします。

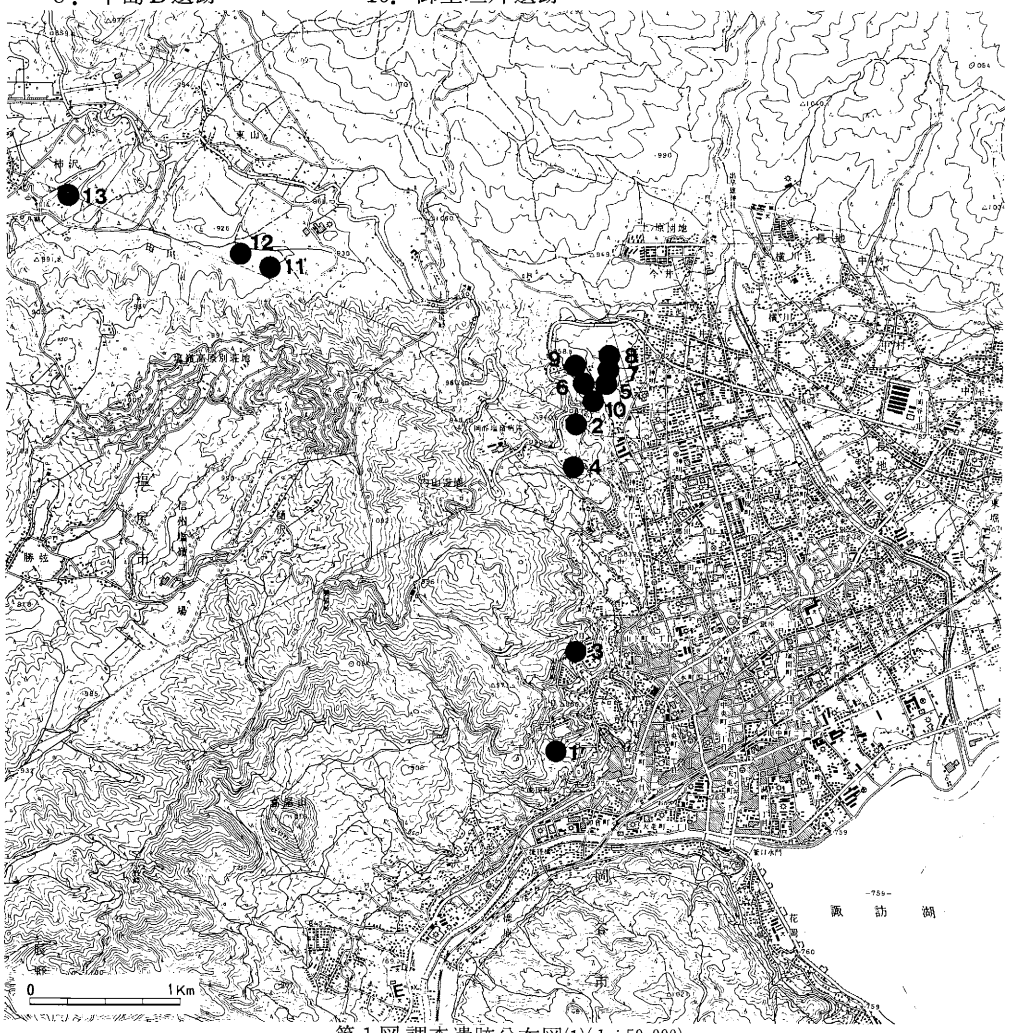
昭和60年３月

財団法人　長野県埋蔵文化財センター

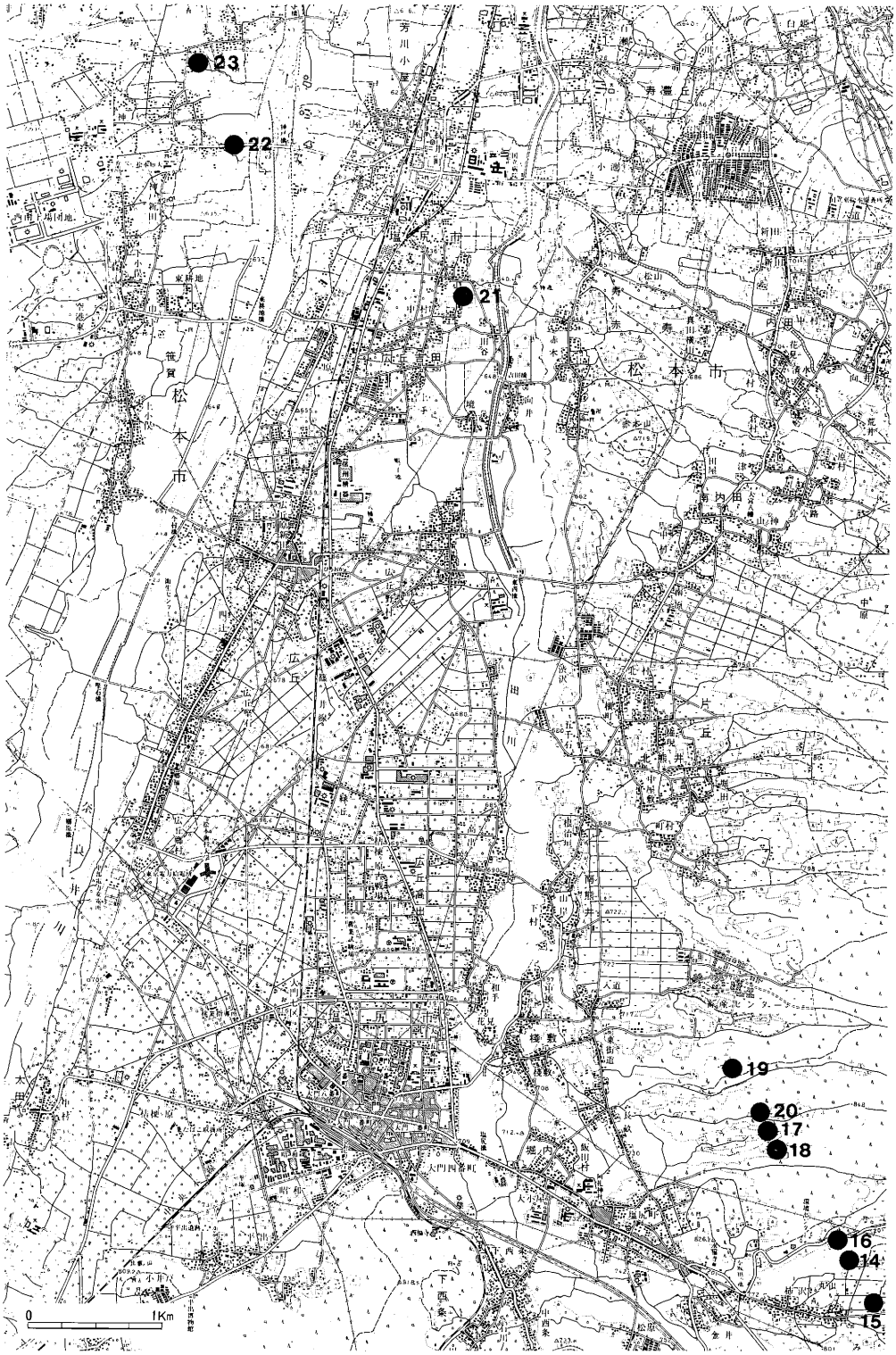
理事長　市　村　　勲

調査遺跡分布図

1．大久保Ｂ遺跡
2．大洞遺跡
3．下り林遺跡
4．西林Ａ遺跡
5．膳棚Ｂ遺跡
6．膳棚Ｂ(白山)遺跡
7．中島Ａ遺跡
8．中島Ｂ遺跡
9．柳海途遺跡
10．膳棚Ａ遺跡
11．青木沢東遺跡
12．青木沢遺跡
13．八窪遺跡
14．北山遺跡
15．大原遺跡
16．御堂垣外遺跡
17．ヨケ遺跡
18．栗木沢遺跡
19．高山(城跡)遺跡
20．樋口遺跡
21．吉田川西遺跡
22．神戸遺跡
23．上二子遺跡



第１図 調査遺跡分布図(1)(１：50,000)



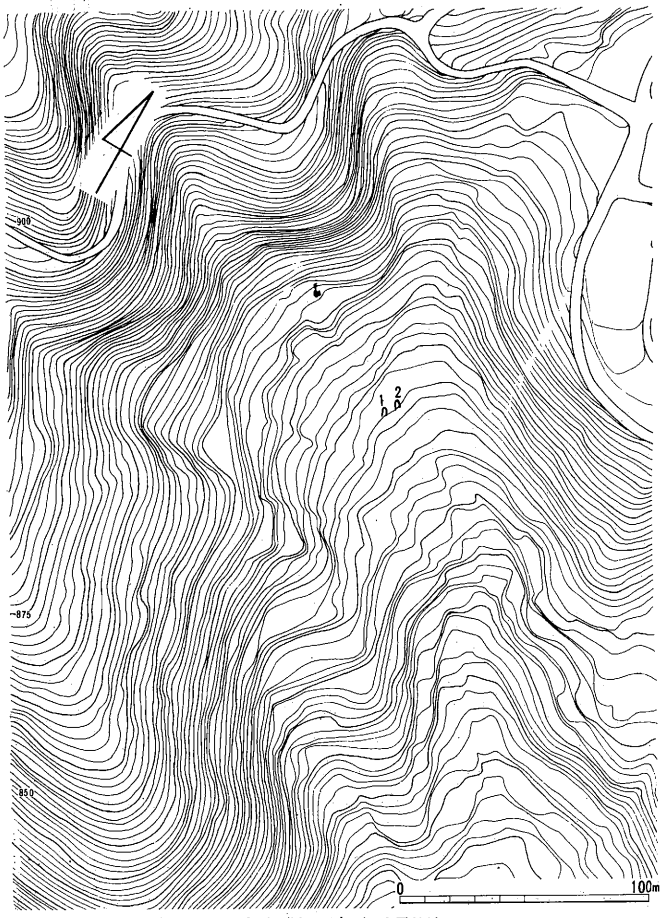
第２図 調査遺跡分布図(2)(１：50,000)

Ⅰ．発掘調査概要

１．大久保（おおくぼ）Ｂ遺跡

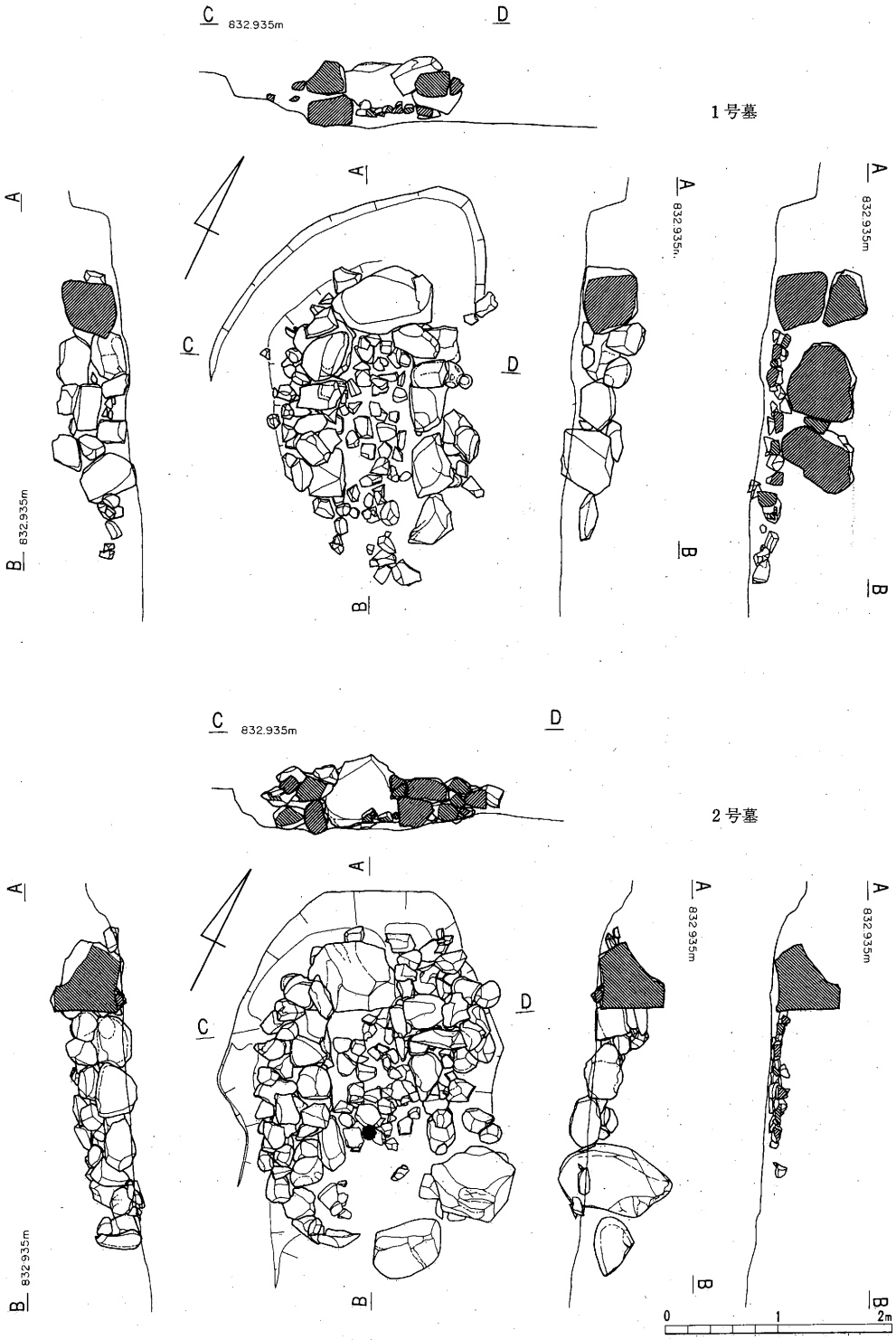
本遺跡は岡谷市成田町にあり，塩嶺山地の東斜面で山麓より派生した２つの小さな尾根に挟まれた谷の奥まった場所に立地する（第３図）。この谷はほぼ南方へ開き，足下に諏訪湖より発したばかりの天竜川が西流する。調査対象面積は約4,700m² で，昭和57年９月から12月にかけて調査を実施した。本遺跡は，調査前には周知の遺跡ではなく，中央道長野線の用地内で遺物が散布しているとの情報に基づき，昭和57年７月県教育委員会の指導で試掘調査が実施され，縄文時代中期後半の土器片や石器等の出土により遺跡と認定された。

調査によって確認された層序は，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層黒色土，Ⅲ層暗褐色土，Ⅳ層黒褐色土，Ⅴ層漸移層，Ⅵ層明黄褐色土（波田ローム），Ⅶ層赤褐色土（塩嶺累層またはその崩れ）であった。このうちⅡ・Ⅲ・Ⅳ層から縄文時代の土器片や石器が出土したが，量的にはわずかである。遺構は，縄文時代の土壙７基がⅣ層下位ないしⅤ層上位で検出され，奈良時代の墓２基がⅡ層中で検出された。土壙からは遺物の出土はなかったが，検出層位からみて縄文時代前期ころの所産と考えられる。



第３図　大久保Ｂ遺跡地形図（1：3,000）

奈良時代の墓２基のうち，１号墓（第４図）は墓の存在を示す盛土はなく，Ⅰ層中より石室構造をもつ石組みの上部が発見され，北西部にⅡ層中から切り込む掘り方が認められた。石室は天井石をもち，奥壁・東西側壁・床よりなる。主軸方向はN25°Wである。石室の内法は，193cm×60cm，高さ50cm

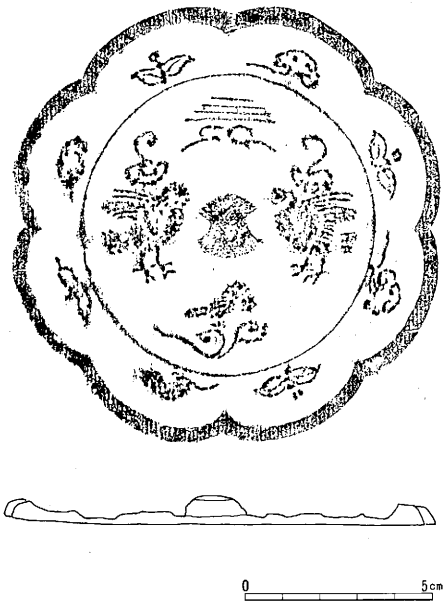


第４図　大久保Ｂ遺跡１号墓(上)と２号墓(下)（1：60）

で，長方形の平面をなす。天井石には大きな自然石３個が用いられ，北側の１個は，奥壁上に載っている。中と南側の天井石は一段と大型で，下部が床面に着くほど落ち込んでいる。側壁の１段目は横手積み，２段目は小口積みを基本としているが，西壁では積み方に乱れの認められる部分もある。側壁の裏籠めはあまりない。床には15cm内外の角礫が敷かれ粗雑な石敷きをなす。石室南側が開口しており，閉塞石は認められなかった。１号墓の石室は２号墓に比較して，側壁，裏籠め，床等に雑な様相が認められる。

２号墓（第４図）は，１号墓の北東約４mのところに位置し，これにも盛土は認められなかった。北西部にII層から切り込む掘り方が認められた。石室内法は193cm×75cm，高さ47cmで開口部がやや開く長方形である。石室は奥壁，東西側壁，床よりなる。検出時には天井石は認められなかったが，付近に大小の石が多数散らばっていることからみると畑の造成などではずされてしまったのであろう。側壁は１号墓と同様で，１段目横手積み，２段目以上小口積みされるが，全体的に側壁上部の石は耕作によって除かれているようで，元来は奥壁頂部のレベル程度まで積まれていたと考えられる。床面には，15cm内外の角礫が敷かれているが石敷きは概して雑で，南側では攪乱が床まで及び多少抜かれていたらしい。開口部前面には閉塞に用いられたと考えられる石が１個，外側へ倒れるような状態であった。主軸方向はN30°W，１号墓とほぼ同様である。

遺物は，１号墓からは微量の骨片のみが，２号墓からは鏡一面と人骨の細片が発見された。２号墓の鏡は，瑞雲双鸞八花鏡とよばれる唐式鏡で，石室内の残存する床石の南際から，鏡面を上に向け，その上下に人骨片が貼り付くような状態で出土した。この鏡は，蒲鉾式膨側高縁を呈し，素円紐で紐座はなく，鏡面はわずかに凸面をなしている。奈良時代に国内で踏み返し鋳造されたもので，同型鏡は舶載鏡と考えられる１面を含めて全国で11面が知られているが，鏡面径が舶載鏡に近いこと，文様や縁の線が比較的明瞭なことなどから踏み返しでも古い方に属するものである。また，２号墓の人骨は，信州大学の西沢寿晃氏によれば，火葬骨で，頭蓋骨・大腿骨等が認められるとのことである。



第５図　大久保Ｂ遺跡出土瑞雲双鸞八花鏡（１：20）

本遺跡で確められた２基の墓が，古墳時代的な要素を残す横穴石室状の構造をもち，火葬骨を埋納していたこと，さらに２号墓では唐式鏡を伴っていたことは，当地における奈良時代の墓制のあり方，被葬者の性格を考究する上で貴重な資料を提供したといえよう。（百瀬久雄）

2．大洞（おおぼら）遺跡

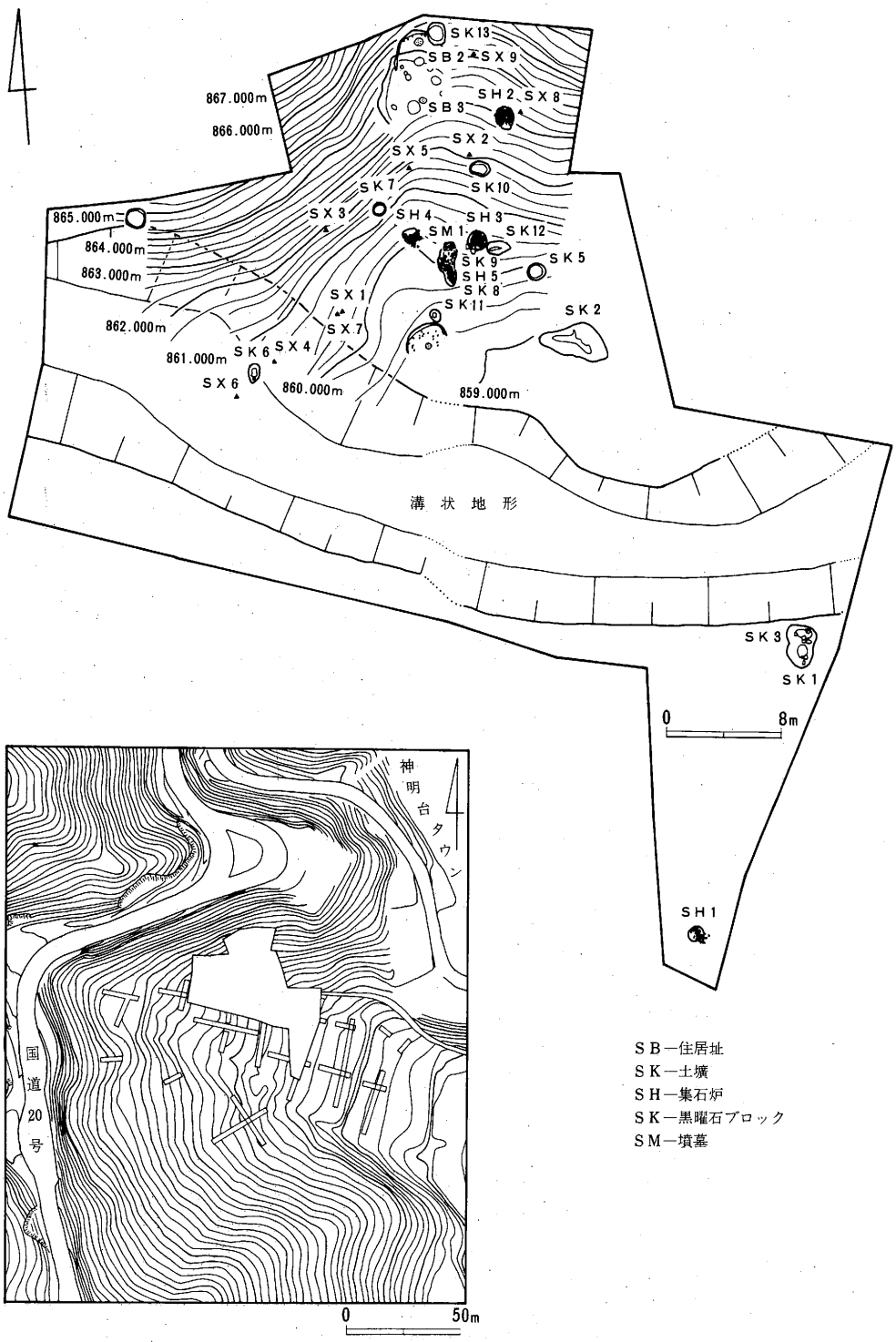
本遺跡は岡谷市神明町にあり，岡谷市立神明小学校の西300m，塩嶺山地の山麓部に位置している。遺跡は大きく開析された谷状地形の底部から斜面部に立地し（第6図下），畑地及び山林であった。調査対象面積は2,910m² で，昭和59年4月下旬から9月中旬にかけて調査した。

調査は層序・遺物包含層とその分布状況・微地形等の概要を把握するため，トレンチ調査から行った。その結果，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層明黄褐色土，Ⅲ層黒色土，Ⅳ層褐色土，Ⅴ層黒褐色土，Ⅵ層礫まじり明褐色粘質土と続き，褐色土と黒色土が互層になっている状況が確認された。中でもⅣ層の褐色土は厚く，その上半部は赤色味が強いことからⅣa層とⅣb層に細分した。遺物はⅣb層を中心に，北側斜面及びその基部のトレンチから多量に出土し，南側斜面・谷底部のトレンチからはほとんど出土しなかった。そこで，北側斜面とその基部一帯を拡張し，グリッドを設定して調査を行った。

調査の結果，斜面一帯を中心に縄文時代前期末から中期初頭の住居址3軒，同早期及び前期末から中期初頭の土壙13基，前期末から中期初頭ととらえられる集石炉5基・黒曜石ブロック9か所・焼土3か所，平安時代と考えられる石組墓状遺構1基を発見した。また，斜面基部から巾13～15mある溝状地形も検出した（第6図上）。遺物はこれらの遺構に伴うもののほか，Ⅵb層中から完形土器をはじめ，土器片，石器，黒曜石が多量に出土している。その主体となるものは3軒の住居址の時期のもので，他時期の遺物はごくわずかである。

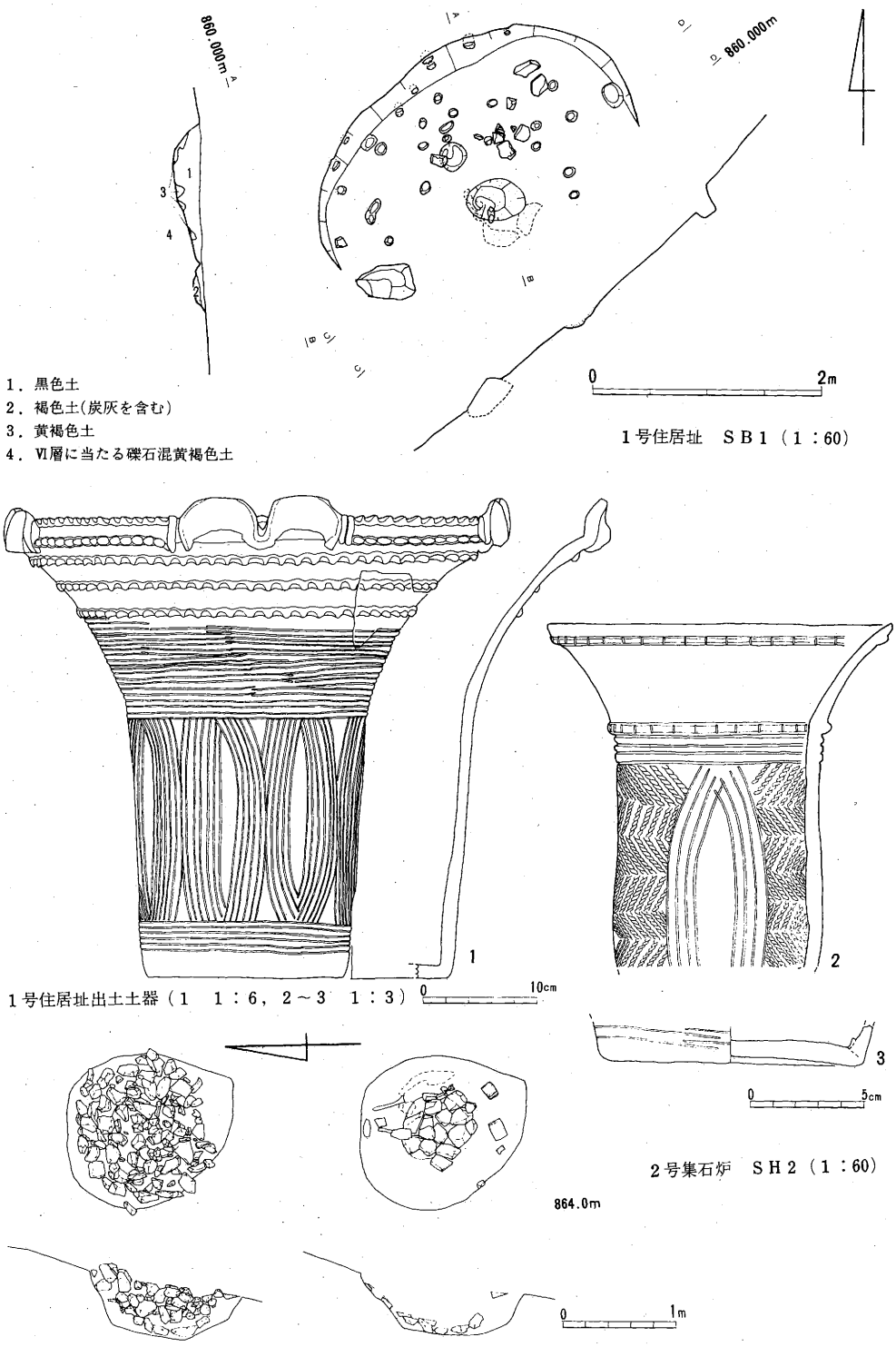
3軒の住居址は斜面上に構築され，うち2号住（SB2）と3号住（SB3）が重なり，3号住の上に2号住が構築されていた。1号住（第7図上）は南壁を確認できなかったが，隅丸方形状のプランを示す。中央に地床炉があり，焼土・炭が見られた。床面及び壁には径10cmほどのピットが多数発見され，上屋構造を考える上で興味ある事実である。また，床面密着の状態で発見された土器群（第7図中）は前期末～中期初頭の様相を示す好資料といえる。3号住は斜面に厚さ30～40cmに及ぶ埋土して住居を構築しており，斜面での住居構築法の手がかりを得た。5基の集石炉のうち4基は斜面中央に位置し，人頭大から拳大の礫がぎっしりとつまりいずれも焼けていた。石を取り除くと壁に沿って焼土・炭が多量に認められ（第7図下），用途を考える上で示唆を与えてくれると考える。9か所の黒曜石ブロックはいずれも屋外にあり，原石が集中する従来のデポ，1m範囲位に原石が点在するもの，チップが集中するものの3種類を含む。この他，黒曜石原石の出土量が多く，峠の麓の遺跡として興味深い。

本遺跡の遺構・遺物の大半は予想に反して，谷状地形の底部ではなく北側急斜面で検出した。今後こうした斜面に立地する遺跡に注意していく必要がある。また，近接する白山・西林遺跡からも，縄文時代前期末から中期初頭の遺構・遺物が発見されており，この期の塩嶺山地山麓部一帯の遺跡群としての把握と検討を要しているといえる。（市沢英利）



ＳＢ－住居址
ＳＫ－土壙
ＳＨ－集石炉
ＳＫ－黒曜石ブロック
ＳＭ－墳墓

第６図　大洞遺跡全体図(上)(１：480)及び地形図(下)(１：3,000)



第７図　大洞遺跡１号住居址(上)と出土土器(中)及び２号集石炉(下)

3．下り林遺跡

本遺跡は岡谷市山手町二丁目に所在する。林道をはさんで岡谷小学校がある。遺跡は塩嶺山地よりのびた舌状尾根の東南よりの頂上から斜面にかけて，南北約100m，東西約70mの範囲にわたる（海抜860～880m前後）。戸沢充則氏の報告〔戸沢1950・1952・1973〕によって古くより注目されており，近年また茅山下層式並行としての仮称「下り林」の提案〔長崎1984〕がなされるなど著名な遺跡である。

調査地点は遺跡の東南端の急斜面にあたり，林道を工事用の道路として一部拡幅するため昭和57年12月上旬立合い調査をし，58年７月中旬から８月中旬の間に350m² を対象に発掘調査を行った。層序はＩ層表土（腐植土），II暗褐色土，III層黒褐色土，IV層極暗赤褐色土，Ｖ層黒色土，VI層褐色土，VII層礫まじり明褐色粘質土となっている。

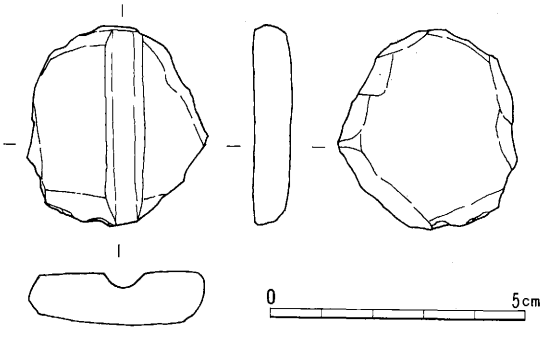
遺物はIIおよびIII層より土師器・灰釉陶器が，IV層からは縄文時代晩期から水神平式の影響を受けたと思われる弥生時代中期初頭の遺物（第９図32）が出土している。Ｖ層からは縄文時代中期の藤内期（27～31）や前期末～中期初頭の遺物，さらに早期の遺物も出土している。VI層からは早期の遺物が中心となって出土している。

遺構は住居址１軒と土壙１基を検出した。住居址は用地外に主体をもつため一部を確認できたにすぎないが，ロクロ調整の土師器杯（33）を伴う平安時代のものである。土壙はＶ層下部で検出されており，出土遺物から縄文時代早期のものと思われる。

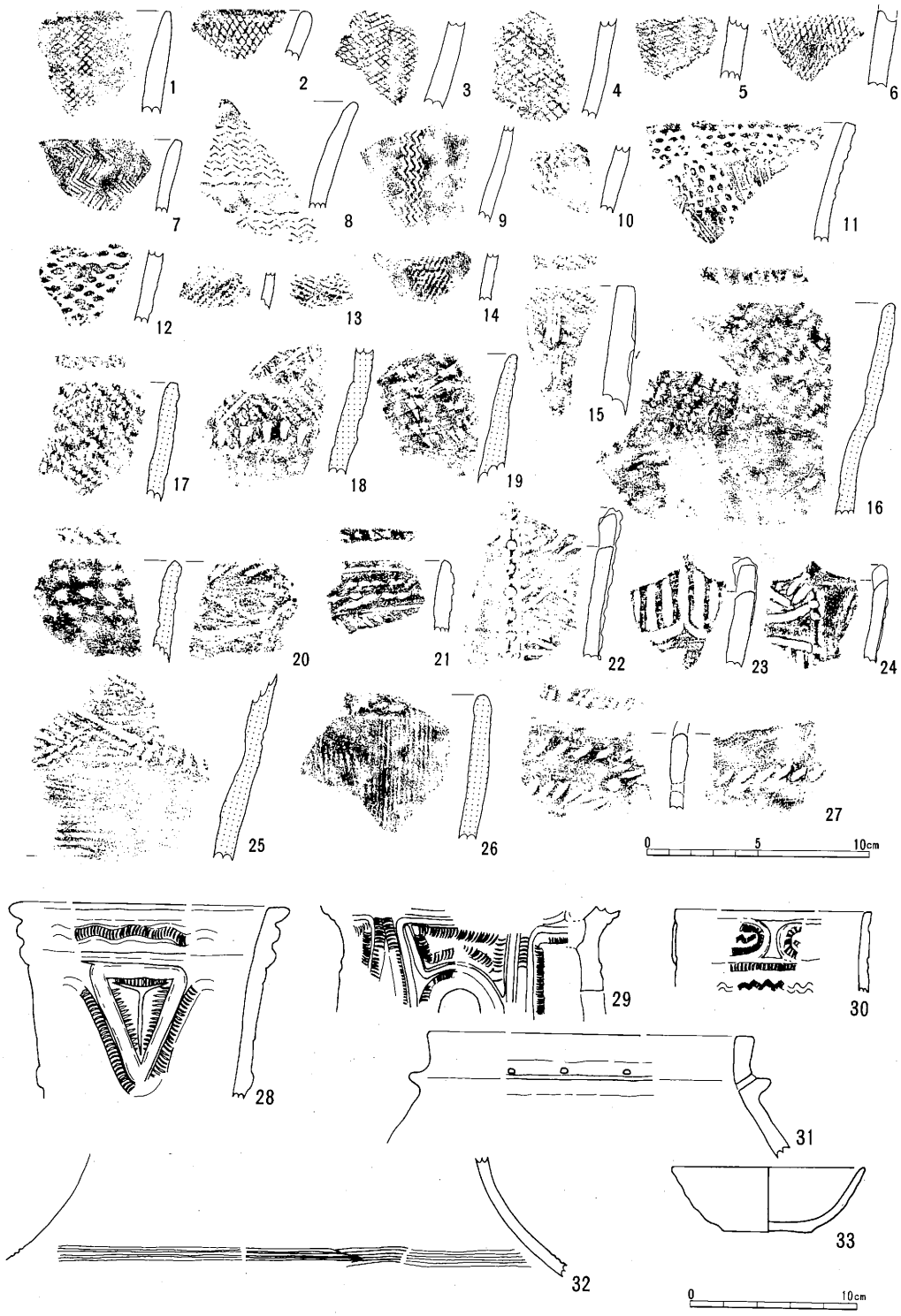
遺物の量がもっとも多いのは早期の土器である。押型文土器には格子目，山形，楕円文がみられる。格子目文（１～６）には施文後，帯状にすりけしたかのような無文部をもつもの（３・５）もみられる。山形文（７～10）は帯状施文のものが多い。楕円文（11，12）は４点出土したにすぎないが，帯状に施文した間に沈線を施す土器（11）が注目される。縄文を地文とする土器（13～18）には，表裏縄文（13）もみられるほか，茅山下層式とみられる土器（16）もある。14は縄文を帯状に施文する。刺突を文様構成の主体にする土器（19～21）の存在も注目される。無文土器や条痕を地文とする土器（25・26）の出土も多い。また野島式（22～24）や鵜ケ島台式，粕畑式（27）などもある。

石器は剥片等（3,500点）を含めると4,000点ほどになる。石鏃（130点）が多い反面，スクレイパー（3点），石匙（4点）の出土は少ない。またVI層最下部で有溝砥石が出土している（第8図）。

（小柳義男）



第８図　下り林遺跡出土有溝砥石（２：３）



第９図　下り林遺跡出土土器（１～27は１：３，28～33は１：４）

４．西林（にしばやし）Ａ遺跡

本遺跡は岡谷市神明町一丁目に所在する。南東150mには岡谷市営球場がある。付近一帯は塩嶺山地よりのびた東斜面の侵食平担面にあたり，海抜は870m前後である。諏訪湖とは110mほどの比高があり一帯は山林であった。遺跡は南方にのびた尾根の南西斜面中腹に位置する第１地点と，尾根をはさんだ東斜面の緩傾斜部に位置する第２地点がある。西林Ａ遺跡を含む一帯は『岡谷市史上』〔戸沢1973〕では，「西林遺跡」として紹介されており，「（市営）球場の工事中かなり多数の黒耀石片が散布していた」ことを記している。

第１地点は昭和57年10月初旬より12月中旬までの間，4,000m² を調査対象として発掘調査を行った。層序はＩ層表土（腐植土），II層黄褐色砂質土，III層黒色土，IV層茶褐色土，Ｖ層黒褐色土，VI層礫まじり黄色粘質土となっている。これらの広がりは斜面のへりなどで部分的にII～Ｖ層が流出しているなど必ずしも一様ではなかった。

遺物でもっとも多いのはIV層及びＶ層から出土している諸磯ｂ，同ｃ式土器である。この他には楕円押型文土器，五領ケ台式土器，須恵器，灰釉陶器，土師器及び石鏃，打製石斧などの石器類が出土している。

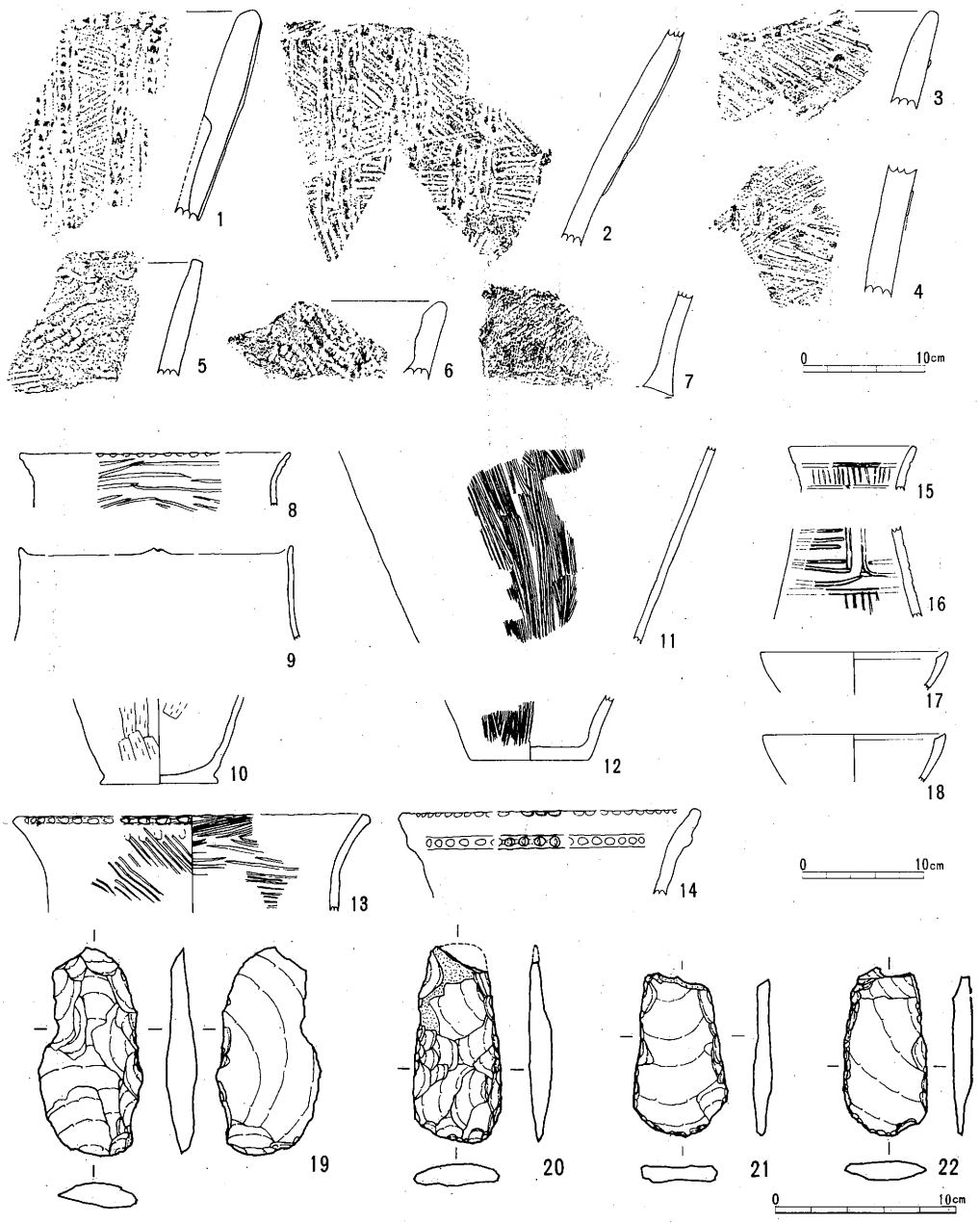
遺構は住居址１軒と土壙11基を検出した。住居址はほぼ円形（480cm×530cm）である。傾斜地に構築されているため，VI層を掘り込んでいる北東側の検出は容易であったが南西側では不明瞭であった。壁高は北東側で80cmある。南西側では一部確認できたのみであるが10cmほどである。床面は炉の周辺及び北東側では堅く明確に検出できた。柱穴と思われるピットは９か所あるが，小さなものが多い。炉は地床炉でほぼ中軸線にそい，住居址の南寄りに位置している。なお床面にあった炭化材の放射性炭素年代測定を学習院大学木越研究室に依頼したところB.P.5,040±140という結果を得ている。住居址から出土した土器片は39点あり，諸磯ｃ式新段階に属する（第10図１～７）。石器は石鏃３，スクレイパー１，石錐１，凹石２，石皿１などが出土している。このうち石皿と凹石１点は主柱穴と思われるピット内より検出された。

11基の土壙は検出層位から縄文時代前期のものが多いと思われる。これらは形態や規模などからいくつかのグループに分かれそうである。正確な時期を決定する資料は少ないが，４・５号土壙より出土した土器片は諸磯ｂ式新段階のものである。

第２地点は昭和58年９月初旬～10月中旬までの間，1,720m² を対象に発掘調査を行った。層序は第１地点と共通している。遺物は総数2,000点ほどである。III層およびIV層上面から出土している弥生時代中期初頭の土器が小片ながら600点ほどありもっとも多い（第10図８～18）。県内ではこの時期の遺跡が少ないので貴重な資料となるものと思われる。また，同層からは石鏃，打製石斧などの石器類も出土している。このほか諸磯ｂ，同ｃ式土器，五領ケ台式土器，称名寺式土器などがある。

遺構は9基の土壙を検出した。検出層位などから5基は弥生時代中期初頭に，他は縄文時代前期に属するものと思われる。このほかIII層中に90cm×60cmほどに広がる焼土がみられた。この広がりの南端には，径20cmほどの上面が平らな焼石が存在し，これらを囲むように遺物の分布がみられ，周辺から検出された打製石斧(第10図19～22)や，その接合関係などから製作址の可能性もある。

(小柳義男)



第10図　西林A遺跡出土遺物（1～7　1号住居址，8～18 第2地点，19～22 第2地点）

５．膳棚（ぜんだな）Ｂ遺跡

本遺跡は岡谷市今井地籍にあり，十五社神社の北西約250mに位置している。塚間川によって形成された扇状地上に立地し，北東側の中島Ａ遺跡との間には低地がある。標高は825m～829mで調査以前は水田であった。調査対象面積は7,250m² で，昭和58年４月下旬より10月下旬にかけて発掘調査を行った。

調査範囲全体に５本のトレンチを入れ，層序・遺物包含層とその分布状況を把握した。遺跡内は砂礫の堆積が多く，湧水があったため調査は難行したが，基本層序は，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層砂礫層，Ⅲ層黒色土，Ⅳ層砂層，Ⅴ層黒色土，Ⅵ層砂礫層，Ⅶ層粘土層，Ⅷ層砂礫層ととらえられた。遺物包含層はⅢ層とⅤ層で，南東に分布する状況が確認されたため，この一帯を拡張し精査した。

その結果検出された遺構は，縄文時代早期末の住居址１軒・土壙９基・集石遺構１基・同晩期の土壙２基で，このほか旧河川４本，最近のものと考えられる暗渠・旧水田を検出している。

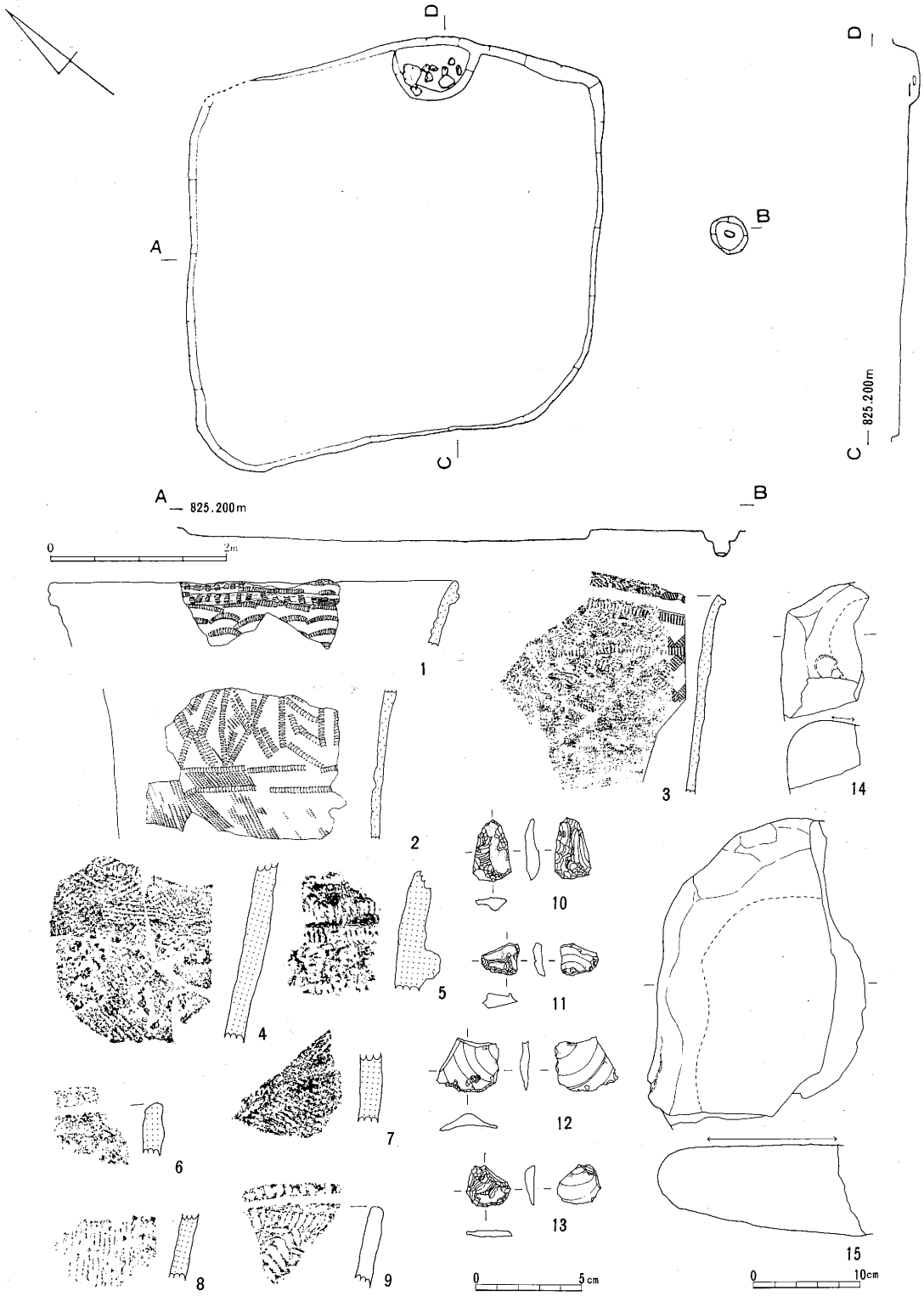
１号住居址（第11図上）はⅣ層上面で検出され，Ⅳ層を掘り込み，Ⅲ層を覆土としていた。プランは4.7m×4.6mのほぼ方形を呈し，壁高は10cm～16cmと浅いものである。床は軟弱であり炉らしきものは確認されなかった。柱穴は住居外に１本検出されたのみである。そのほか住居の施設としては，住居内北東壁中央に１m×0.6mの楕円形ピットがあり，深さ10cm程で中から拳大の礫と，土器（第11図３），石皿（14・15）が出土した。住居内から出土している遺物は，絡条体圧痕文が顕著な土器（１・２・４・５・６），条痕文が施された土器（８），撚糸文のある土器（７），東海系の土器（９）と黒曜石製の小型石器（10・11・12・13）等である。

遺物包含層であるⅢ層・Ⅴ層は砂層（Ⅳ層）を間層としているが，両層から出土している土器は，共に絡条体圧痕文を有する土器片，無文土器，条痕文土器等と，薄手の東海系土器も混在している。これらの土器群と共伴して縄文時代早期と思われる集石遺構から出土した２個の玦状耳飾りも注目される。

そのほか，出土した遺物の中に木札がある。大きさは140mm×31mm×3mmで縦に長く，墨で「一三二」と書かれていた。両側辺は削られ，上部は切断されているが，下部は折れている。奈良国立文化財研究所の鬼頭清明氏の御教示によると，平安時代から鎌倉時代，あるいはそれより若干新しいものではないかとのことである。

本遺跡の１号住居址は，数少ない縄文時代早期末の貴重なものである。また包含層から出土した土器群も，絡条体圧痕文を施すものが多く，縄文時代早期末の土器様相を知る上で好資料となるものである。今後他遺跡の出土資料と比較しながら，検討していく必要がある。

（鈴木道穂）



第11図　膳棚Ｂ遺跡１号住居址(上)(１：80)と出土遺物(下)(１～３・14・15　１：６，４～13　１：３)

6．膳棚（ぜんだな）B（白山）遺跡

本遺跡は，岡谷市今井地籍にある。神明町十五社神社の北西約300m，塩嶺山地より東側へ張り出したやせ尾根の一つに立地し，尾根上の小丘には秋葉社がまつられていた。調査対象面積は1,280m² で，昭和59年8月下旬から10月上旬にかけて発掘調査を行った（第12図上）。

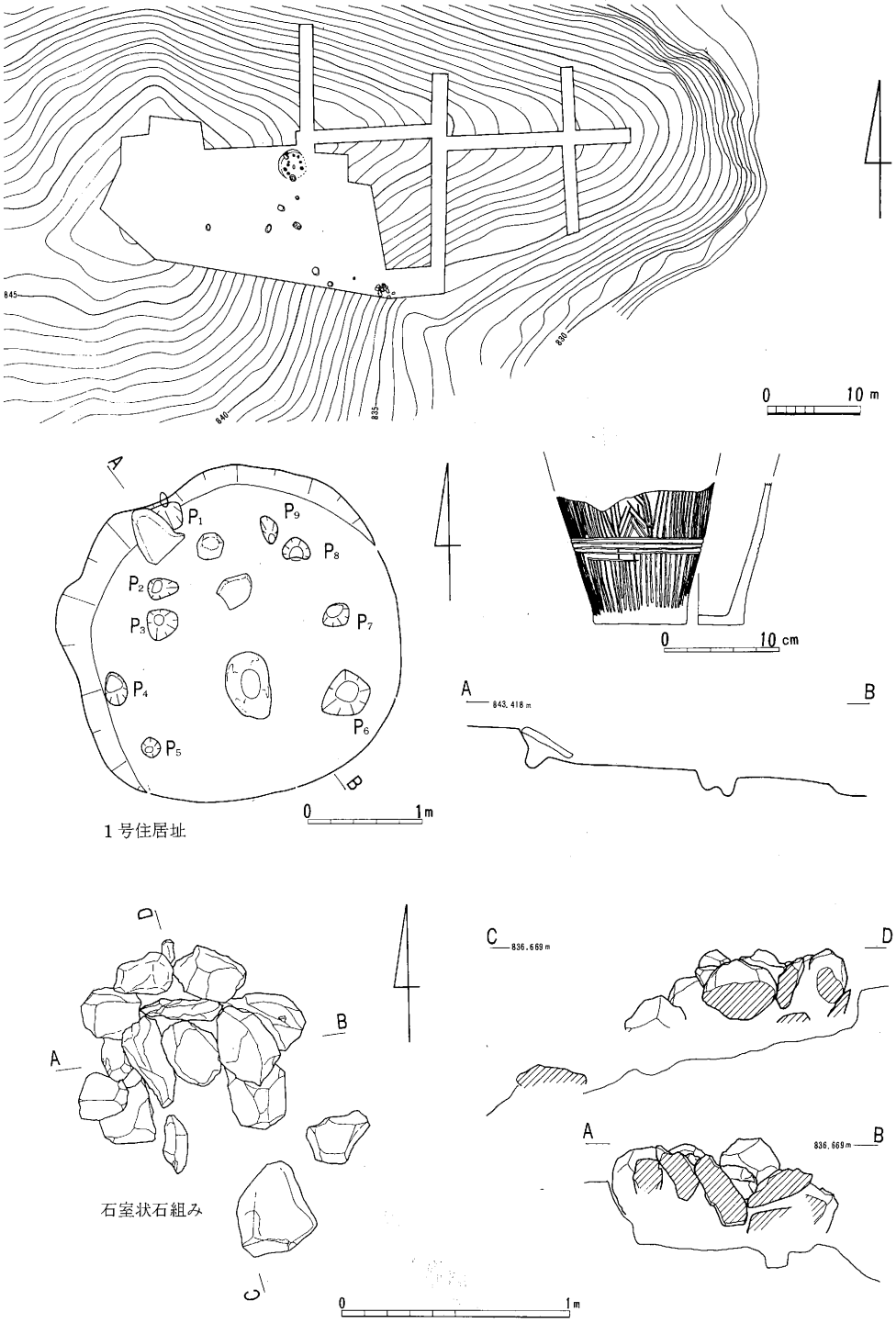
基本的な層序は，上位よりⅠ層表土，Ⅱ層暗褐色土，Ⅲ層黒色土，Ⅳ層灰褐色土，Ⅴ層明褐色土，Ⅵ層黒褐色土，Ⅶ層ローム層である。尾根の頂部付近では，Ⅰ層下がすぐにⅦ層となってⅡ～Ⅵ層を欠除するが，南斜面底部付近ではⅡ～Ⅵ層が発達し，特にⅡ層から縄文中期を主に早期・晩期の土器片が出土した。検出された遺構は，縄文中期初頭の住居址1軒，土壙9基，奈良・平安時代の石組み墓1基である。

住居址は，尾根の南斜面の頂部付近に位置し，径3m弱のほぼ円形を呈する小型のものである（第12図中右）。壁は斜面頂部側で高く，底部側では確認できない。柱穴は9か所確認でき，P_4，P_7，P_8 が主柱穴と考えられる。なおP_1 は住居址中央に向かって斜方向に穿たれていた。炉は中央よりやや南側に位置し，長軸が南北方向を向く楕円形を呈する。周囲に抜石痕が見られ，焼土は南半に集中する。炉内より縄文中期初頭の小型深鉢が炉面に密着した状態で検出された。住居址内の内部施設として，板状で二等辺三角形をした輝石安山岩が，北西壁際に立てかけられた状態で検出され，その形状，検出状況から，立石と考えられる。立石を伴う住居としては最古の部類に属すると思われ，立石祭祀の初源的な形態を考える上で貴重な資料といえる。他に住居址内から黒曜石の剝片・屑片が多量に検出されている。

石組み墓は，南斜面の底部付近，南方へ開放した小規模な谷口に位置する（第12図下）。内寸60×40cmほどで，人頭大の輝石安山岩の亜円礫を組み合わせており，床石，天井石も確認された。石組みは，ほぼ正確に南に向けて開口しており，その南方には諏訪湖を臨むことができる。東，北，西を尾根に囲まれ，南に水景を有することから風水思想による占地〔斉藤1976・水野1984〕がなされたと考えられ，造営年代を奈良時代と限定できるかも知れない。また，それぞれの石には赤～暗褐色の水酸化鉄の付着が確認でき，特に開口部，奥壁，床石，天井石は水酸化鉄がかなり強く付着していた。遺跡近辺には同様の石は存在せず，尾根端部を迂回して約400m北方の水酸化鉄が豊富に湧出する塚間川河岸から搬入したものと思われる。なお，石組み内部から火葬にふされた人骨片（信州大学医学部　西沢寿晃氏の御教示による）が検出されたが，副葬品および遺構に伴う遺物は全く見られなかった。

その他，縄文早期・中期・晩期の土器片が南斜面上の谷部に集中して検出されており，接合関係より，斜面上方からの流れ込みと考えられる。

本遺跡のように，従来ほとんど省みられることのなかった小規模なやせ尾根上での存在は，遺跡の立地を考える上で重要な資料を提供したといえる。　（小口　徹）



第12図　膳棚B(白山)遺跡全体図(上)(1：250)・1号住居址(中左)(1：60)と出土遺物(中右)(1：6)・石室状石組み(下)(1：30)

7．中島（なかじま）A遺跡

岡谷市今井地籍に所在する。塩嶺山地の一河川である塚間川によって南東方向に広く開析された扇状地に立地する。標高は825m前後で，諏訪湖との比高差60m，諏訪湖及び八ケ岳の山並が一望できる。塚間川の右岸が遺跡で調査対象面積は約10,000m² であった。この遺跡地形をより微視的にみると，塚間川寄りの地域はやや高く，その南西側は低くなっていた。当初からこうした地形のできた要因と地形の高低が影響する遺跡のあり方に注目したが，結果的には（後述する）断層によってできた低地と，残った小丘であった。仮りに，その高燥地をa・b地点，低地部をc地点としておきたい（第13図上）。なお調査以前，付近一帯は水田及び畑地として利用されていた。調査は昭和57年から59年にかけての3か年にわたって行われた。層序に関しては面積が広いため必ずしも各地点一様とはいえないが，今回は中でも最も遺物量の豊富であったc地点に代表させることにし後述したい。

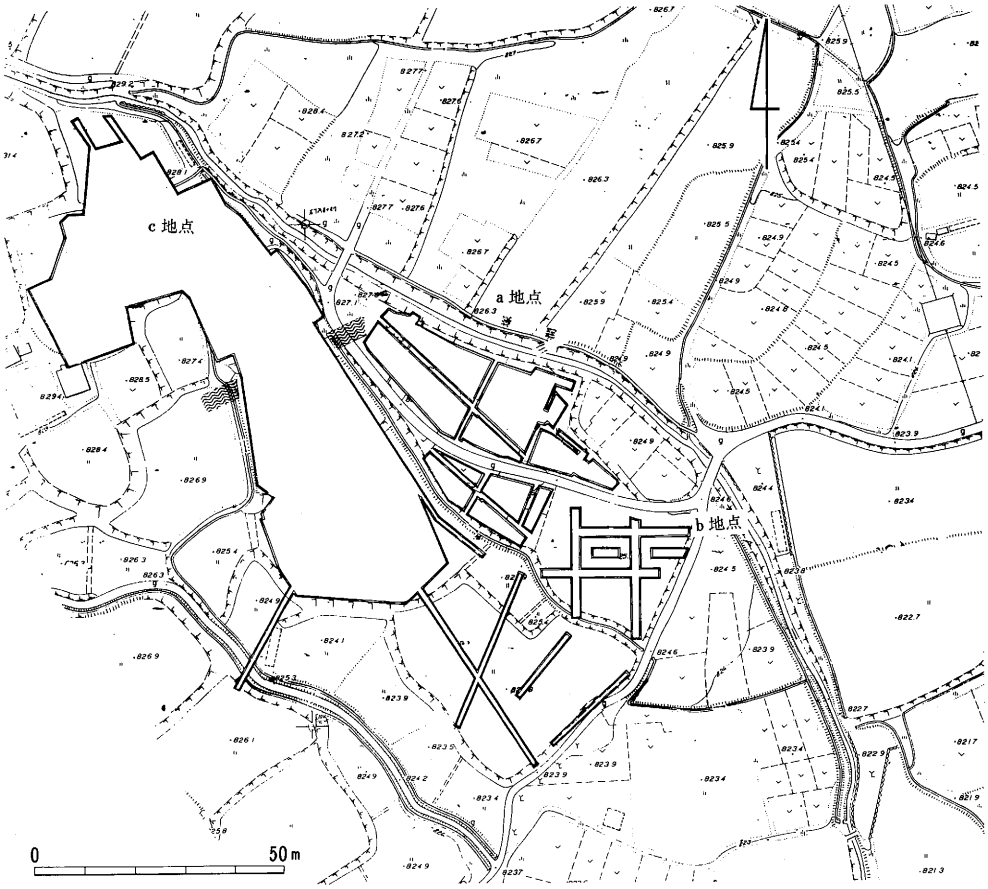
調査は，高燥地であるa地点より開始した。a地点は，ごく上層に性格不明の段状遺構2基と，その下層に土壙11基が検出されている。いずれも遺構内に包含された遺物は皆無に等しく，時期の詳細については不明である。全体として遺物は中近世のものをはじめとして縄文時代晩期氷式土器片を中心に，黒曜石フレイク，打製石斧，石鏃，平安時代の土器片等が発見された。しかし，その出土量は少ない。当初の予想では，この部分に生活跡の存在が期待されたが，それを積極的に裏付ける痕跡は得られなかった。b地点では南北，東西にトレンチを入れてみたが遺物の出土はほとんどなく，遺跡の東側の限界を想定することができた。

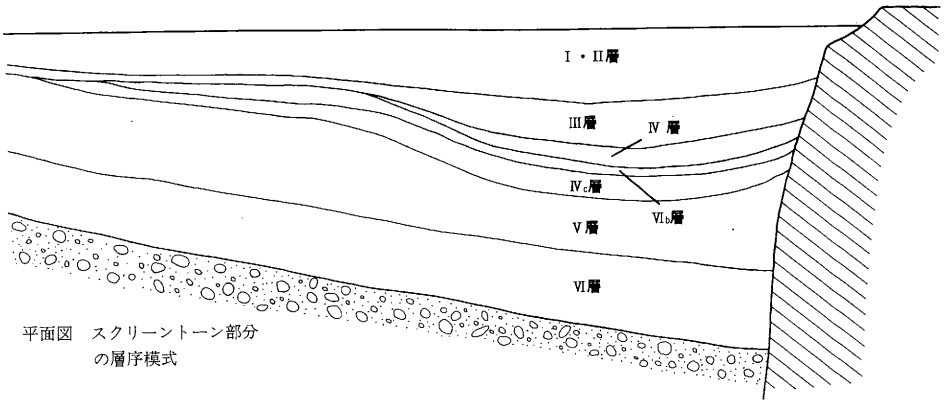
低地部であるc地点は東縁に南々東から北々西に伸びる断層が認められた。この断層は地震予知連絡会〔東郷他1984〕の調査によって，15,000年～3,000年前の間に大小数回の地震のあったことが確認され，これに起因するものであった。こうして約15m×60mの範囲で地盤沈下が起り，ここに塚間川の伏流がたまったものであろうか，湿地性の土壌が形成されることになった。したがって多くの植物遺体も残り易い環境を生んだのである。層序は，Ⅰ・Ⅱ層現耕作土層，旧表土層，Ⅲ層黒色土層，Ⅳ層泥炭質粘性土層，Ⅴ層粘土質層，Ⅵ層砂礫層となる（第13図下）。さらにⅣ層は植物遺体の含有量等により3層に分層され，それぞれをⅣa，Ⅳb，Ⅳc層とした。このうち，Ⅳ層及びⅤ層が主たる遺物包含層である。

Ⅴ層は縄文時代前期末，中期後半，後期前半期の層である。遺物量は非常に少なく，点的に散布する形で出土した。各期とも1点ぐらいずつ完形に近い土器が単独で出土する現象が認められ注目される。

Ⅳc層は植物遺体と砂の混じる層である。縄文時代晩期氷Ⅰ式，弥生時代中期初頭庄ノ畑式期に相当する（第14図4～5）。遺物は該期の多量の土器をはじめ打製石斧，石鏃も多く，数点の土偶(8)・装身具もみられた。これらの遺物は東側の断層線に沿うように大きく4か所に集中して

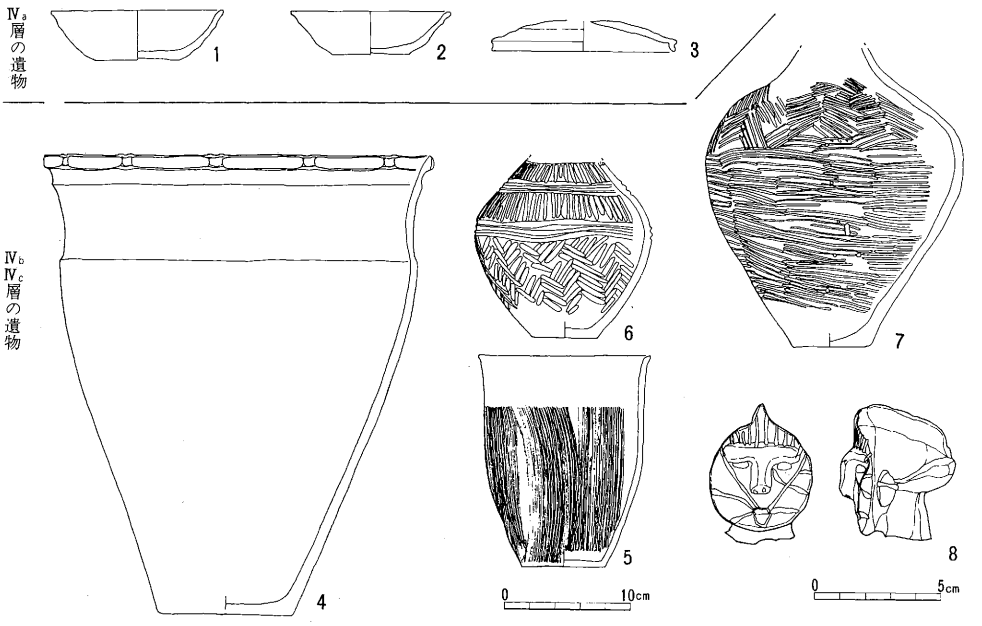
おり，それぞれをブロックとして認識した。なおこうした湿地において唯一本層中より庄ノ畑式土器を埋設した石組み遺構が検出された。長方形の平石を2方に囲い，中に土器を埋設し，そこに焼土が存在する上，石ぶたをしてあるといった状態であった。





平面図　スクリーントーン部分の層序模式

第13図　中島A遺跡発掘区域図(上)(1：1,500)と層序模式図(下)



第14図　中島Ａ遺跡出土遺物(1～7　1：4，8　1：2)

Ⅳb 層はほとんど泥砂を含まない植物遺体のみによって構成されている。15～20cmと薄い層であり，かなり短期的に形成されたものと思われる。

Ⅳa 層は植物遺体を含む湿性黒色土層である。遺物は奈良・平安時代及びそれ以後のものであったが，集中せず散在していた。

当遺跡の特徴の一つともなった植物遺体の検出は，当地方では非常に珍しく，その検出と取り上げには多くの注意を払った。特に加工痕のある植物遺体に期待をかけたが皆無に等しかった。わずかに，鋭利な刃物で切りおとされたと考えられる枝等が確認されたにとどまる。こうした状況があるいは遺跡の性格を考える上での一つの示唆を与えるものともいえようか。

本遺跡は高燥陸地部であるａ地点と湿性低地部であるｃ地点という２つの対象的な「場」によって構成されていることが確認された。しかし，各々の場が果していかなる働きをもっていたのか不明な点は多い。低地部に残された大量の遺物を使っていた人々の居住区域を，土壙の検出しかみられなかったａ地点と結びつけにくいことも確かである。いずれにしろ活動の痕跡を残した当遺跡の性格を与えるものは，その地形的要因とも合わせ重要な課題であると考える。同時に，縄文時代晩期末～弥生時代中期の大量かつ良好な土器は好資料となろう。

（三上徹也）

8．中島（なかじま）B遺跡

岡谷市今井地籍にある。塩嶺山地から流れる塚間川が形成した扇状地上の島状微高地に立地している。この付近一帯は国道20号線下に広がる水田で，微高地上の水田からは今までに縄文時代と弥生時代の土器片が採集されており，その頃の遺跡であると考えられていた〔戸沢1973〕。調査は昭和57年度と59年度に行い，57年度は3,690m² を対象に５月下旬～12月中旬まで微高地上を，59年度は1,590m² を対象に４月下旬～８月上旬まで微高地に続く南側隣接区域と東側隣接区域をそれぞれ調査した。

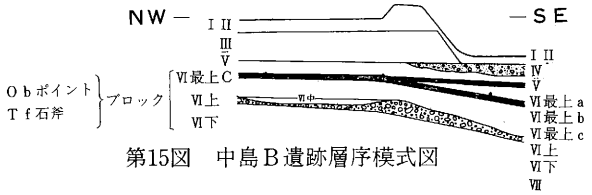
微高地上では，トレンチにより層序をⅠ～Ⅶ層とした。Ⅰ層耕作土，Ⅱ層水田造成時の盛土，Ⅲ層黒色土，Ⅳ層旧流路の礫，Ⅴ層砂質灰褐色土，Ⅵ層軟らかい火山灰質河成層，Ⅶ層鉄分を多く含み硬い火山灰質河成層である。また，東側隣接区域では微高地上のⅡ，Ⅲ層を欠き，Ⅰ層，Ⅳ～Ⅶ層となっている。これらのうち，Ⅵ層は地質学的所見（信州大学酒井潤一氏御教示）によれば，塩嶺累層と火山灰からなる再堆積層であり，時間差をもちつつも一連の洪水又は泥流，土石流によって形成されている。具体的には，Ⅵ層の中でも旧地表面の部分と礫をほとんど含まない部分，礫をほとんど含まず砂質の部分，礫を多量に含み酸化鉄の沈澱が顕著な部分に分かれる。そこで，Ⅵ層はさらに最上位，上位，中位，下位に細分した（第15図）。

Ⅰ～Ⅶ層のうち，Ⅲ層では縄文時代晩期土器片を主体として，同前期及び後期土器片，石鏃，古墳時代土師器片，施釉陶器片等が出土した。しかし，これらは混在した出土状況であった。また，Ⅴ層上面では土壙が30基余り検出されたが伴出遺物はみられず，時期は不明である。さらに，Ⅵ層上位下半～Ⅶ層にかけては亜角（円）礫を多量に含み，その礫間でポイントやスクレイパー，石斧，ポイント・フレイク，チップなどからなるブロック（遺物集中地点）が２か所検出された（第16図）。

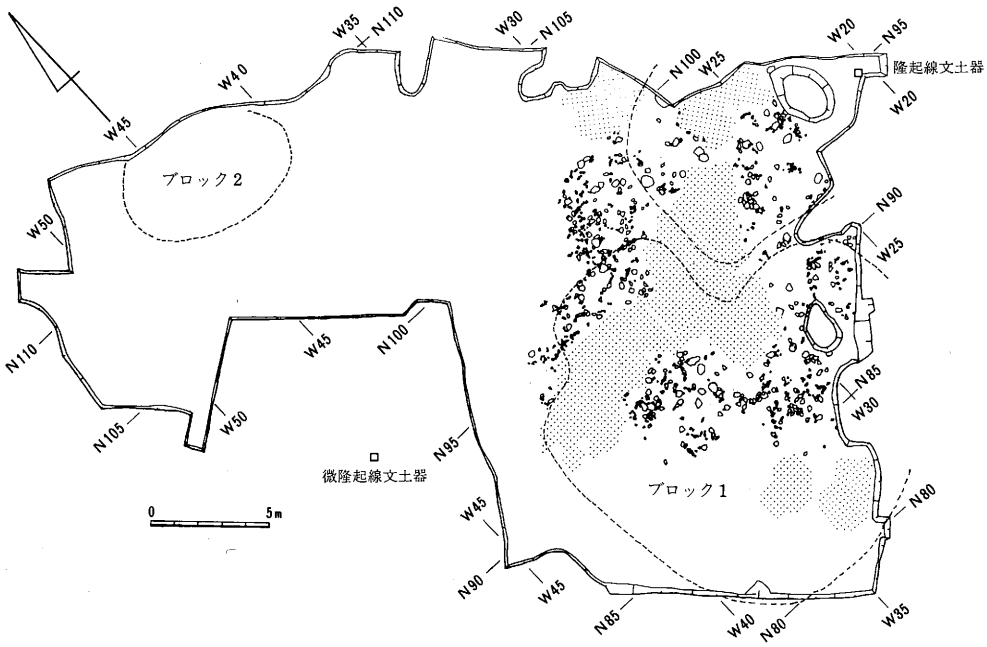
ブロック１は昭和57年度発掘区域南端で検出され，約15m×12mの広がりをもつ。これはⅥ層のうち，上位下半の礫密集か所とかなり重複する。出土遺物は5,000点以上あるが，石器は黒曜石のポイント，スクレイパー，凝灰岩の石斧など20点余り（第18図１～６）で，大半はポイント・フレイクやチップである。また石器にしても未成品や破損品が多く，完形品は数点にすぎない。一方，石材は黒曜石が最も多く，次いで凝灰岩，頁岩，チャートである。このうち，凝灰岩の場合は，Ⅵ層上位下半の礫上面から礫間にかけて，直径４m程の範囲に長さ５cm前後のフレイクが30点余り出土しており，幼児頭大の同一母岩に復元できる。

以上から，このブロックは石器製作の場であった可能性が強い。

なお，ブロック１に東接してもう１つのブロックを独立させることも考えられ



第15図　中島B遺跡層序模式図



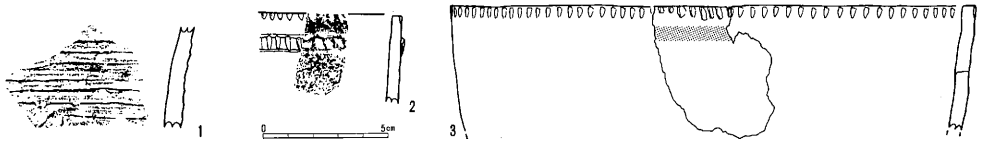
第16図　中島Ｂ遺跡Ⅵ層下位礫分布状況，Ⅵ層上位～下位ブロック範囲（57年度発掘区域）

る（第16図）。この場所はちょうどⅥ層以下が微高地から緩やかな斜面へと続く傾斜変換点に当たる。遺物が集中的に出土するのはやはりⅥ層上位～下位にかけてであるが，広がりや内容については今後明らかにしていきたい。ただ，この場所のⅥ層最上位では隆起線文土器片が出土している（第17図２・３）。これは30片程が約60cm四方の範囲に散在していた。口縁部破片が２点あり，口唇部に刻み目をもち，一条の隆起線にも同様な刻み目をもつ。出土層位の放射性炭素年代測定値（テレダイン社）は12,460±310年であった。仮りに同層位出土の石器類がブロック１の石器類と時間的に同じもの，あるいはごく近いものであるとすれば，ブロック１のポイント，スクレイパー等の石器類の時間的位置を考える上で大きな手がかりとなるだろう。

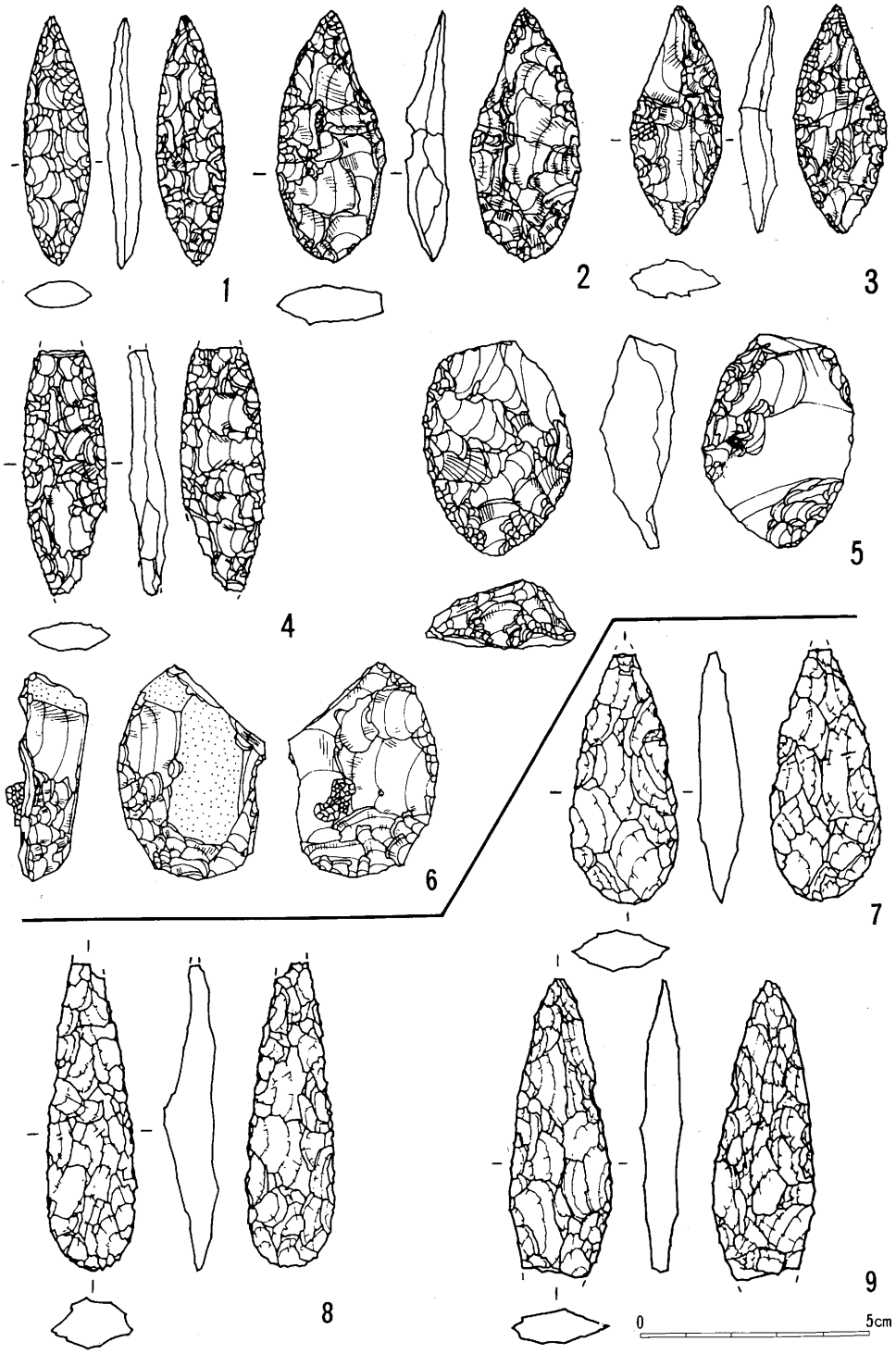
ブロック２は昭和57年度発掘区域北端のⅥ層下位で検出され，約３m×５mの広がりをもつ。ブロック１とは約15m離れている。遺物は50点余りで，頁岩のポイント（第18図７～９）が５点あり，フレイク，チップは少ない。性格については今のところ不明である。

このほか，ブロック１のやや北側のⅤ層とⅥ層最上位との間で微隆起線文土器片（第17図１）が出土しているが，ブロックや隆起線文土器片と合わせ，今後考察していきたい。

以上，２つのブロックを中心に述べたが，各ブロックの細かな内容やブロック相互の関係，石器製作技術なども，細分した層序の検討を通して今後の課題としたい。　　（関　賢司）



第17図　中島Ｂ遺跡出土土器（アミ部分は剝落痕）（１：３）



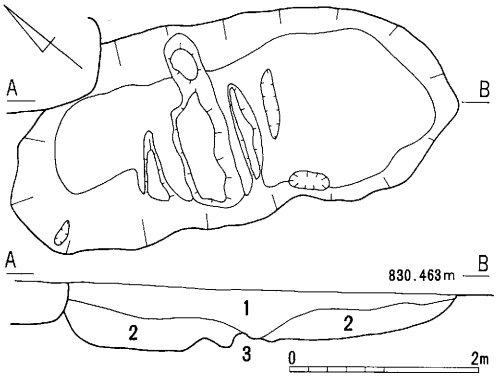
第18図　中島Ｂ遺跡出土石器（1～6 Ⅵ層上位，7～9 Ⅵ層下位）（1：1.5）

９．柳海途（やながいと）遺跡

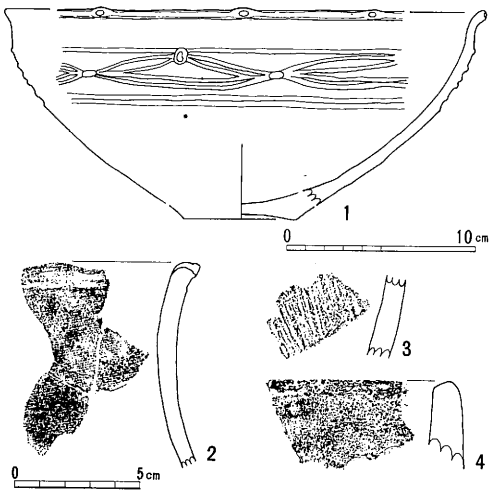
本遺跡は岡谷市今井地籍にあって，塩嶺山地の麓に形成された崖錐性の東向き急斜面から塚間川扇状地にかけて占地している。今回の調査は，遺跡の大部分にあたる国道20号線から下の宅地，畑，水田，荒地など15,030m²を対象に，昭和58年５月上旬から11月中旬まで行った。

東向き急斜面では，基本的な層序はトレンチ発掘によってⅠ層耕作土及び盛土，Ⅱ層黒色土，Ⅲ層礫混り褐色土，Ⅳ層礫混り黄褐色土，Ⅴ層砂礫（塩嶺累層）ととらえられた。このうちⅡ・Ⅲ層は，田畑や宅地の造成に伴って削平され，欠けるところが多い。遺物は，縄文・古墳・奈良・平安時代の土器・石器がⅠ～Ⅲ層より出土している。しかし，時期的に混在がみられること，磨耗していることから流れ込み遺物と考えられる。遺構は検出されていない。

扇状地面の基本的層序は，Ⅰ層耕作土及び盛土，Ⅱ層砂礫（旧河道），Ⅲ層黒色土，Ⅳ層漸移層，Ⅴ層黄褐色土（再堆積ローム），Ⅵ層砂礫（塩嶺累層）である。このうちⅢ～Ⅴ層は，西側では旧河道に侵食されて欠落し，東側にのみ残存した。遺物包含層はⅢ層で，縄文時代早期及び晩期の土器が出土している。遺構は，Ⅲ～Ⅴ層の残る東側部分で土壙が１基（第12図上）Ⅴ層上面に検出された。平面形が4.2×２mの長楕円形を呈する。壁はなだらかに立ち上がり，底部は凹凸が激しくて軟らかい。深さは最大でも0.6mと浅いが，水田造成によって上部を削平されているので本来の深さではない。検出面で焼土が認められ，覆土上層からは縄文時代晩期の土器片（第19図下）が，また板状の炭化材（10×６×0.5cm）が出土している。



１．黒褐色土　２．ローム混り黒褐色土　３．ローム



第19図　柳海途遺跡土壙(上)(１：80)と土壙出土土器(下)(１：４，１：３)

調査前には集落遺跡と予想されていたが，調査の結果は土壙が１基検出されただけであり住居址は発見されなかった。崖錐性あるいは旧河道といった地形的要因からみて，集落を営むには適さなかったようである。なお，土壙は，同時期の遺物が多数出土している中島Ａ遺跡を眼下に臨む位置にあり，中島Ａ遺跡につながりをもつものであろう。（唐木孝雄）

10. 膳棚（ぜんだな）A遺跡

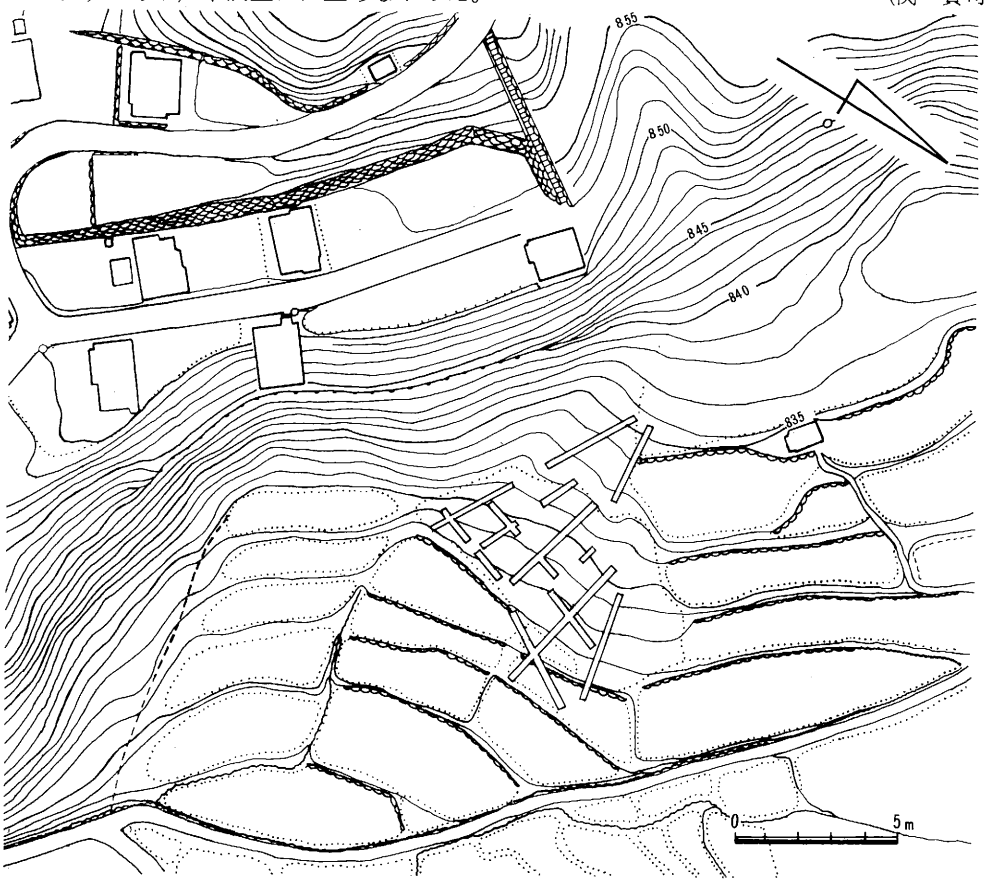
岡谷市今井地籍にある。中央自動車道本線にかかる県の宅地部分の代替地にあり，昭和57年7月中旬に300m² を対象に発掘調査を行った。これは，本調査に先立ち，遺跡の内容を把握するための確認調査である。塩嶺山地から張り出した小尾根末端の急斜面で，調査前はりんご畑であった。今までに縄文時代土器片が採集されている〔戸沢1973〕。

地形に沿って幅1mのトレンチを計11か所入れ，層序をⅠ層表土，Ⅱ層軟らかい黒色土，Ⅲ層堅くしまった黄褐色土とした。しかし，これらはいずれも遺物包含層とは認められず，北西部の沢からの押し出しによって形成されたものである。

遺物として縄文時代中期土器片，同後期土器片，土師器片など計10点が出土したが，すべてⅠ層のものである。

この場所は度重なる土砂の押し出しがあることからみて，生活の場所としてはあまり適さなかったようであり，本調査には至らなかった。

（関　賢司）



第20図　膳棚A遺跡トレンチ配置図（1：1,500）

岡谷市内遺跡周辺の地形と地質

本調査は，中央自動車道長野線建設に伴う岡谷地区埋蔵文化財緊急発掘調査の一環として，岡谷市の地形，地質と遺跡との関連を明らかにする目的で行われたものである。調査は昭和58年４月から11月までに約35日間行った。

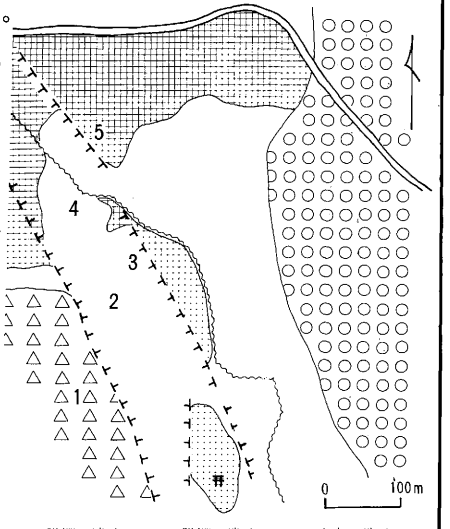
岡谷市は諏訪盆地の西北に位置し，横河川，塚間川などのつくる複合扇状地の上に発達する。北方と西方は山地で限られるが，特に西方は，糸魚川―静岡構造線の一部と考えられる明瞭な断層地形によって境される。これらの山地は，洪積世前期の塩嶺累層よりなる。

市街地及び山麓に発達する扇状地は，ローム層の被覆状態や各地形間の高度差によって古い方から，上の原，今井，長地，沖積の４つの地形面に区分される。各地形面の分布等は，第22図に示した。

中央自動車道にかかって，大久保Ｂ，下り林，西林Ａ，大洞，白山，膳棚Ａ・Ｂ，中島Ａ・Ｂ，柳海途の10遺跡が存在する。これらは，周辺の地形，地質によって２つのグループに分けられる。１つは，大久保Ｂから，膳棚Ａまでの遺跡である。このグループは，急斜面や尾根上にあり，土層も下位より，塩嶺累層，ローム層，有機質土壌（ローム層を母材とする），表土の順となっている。

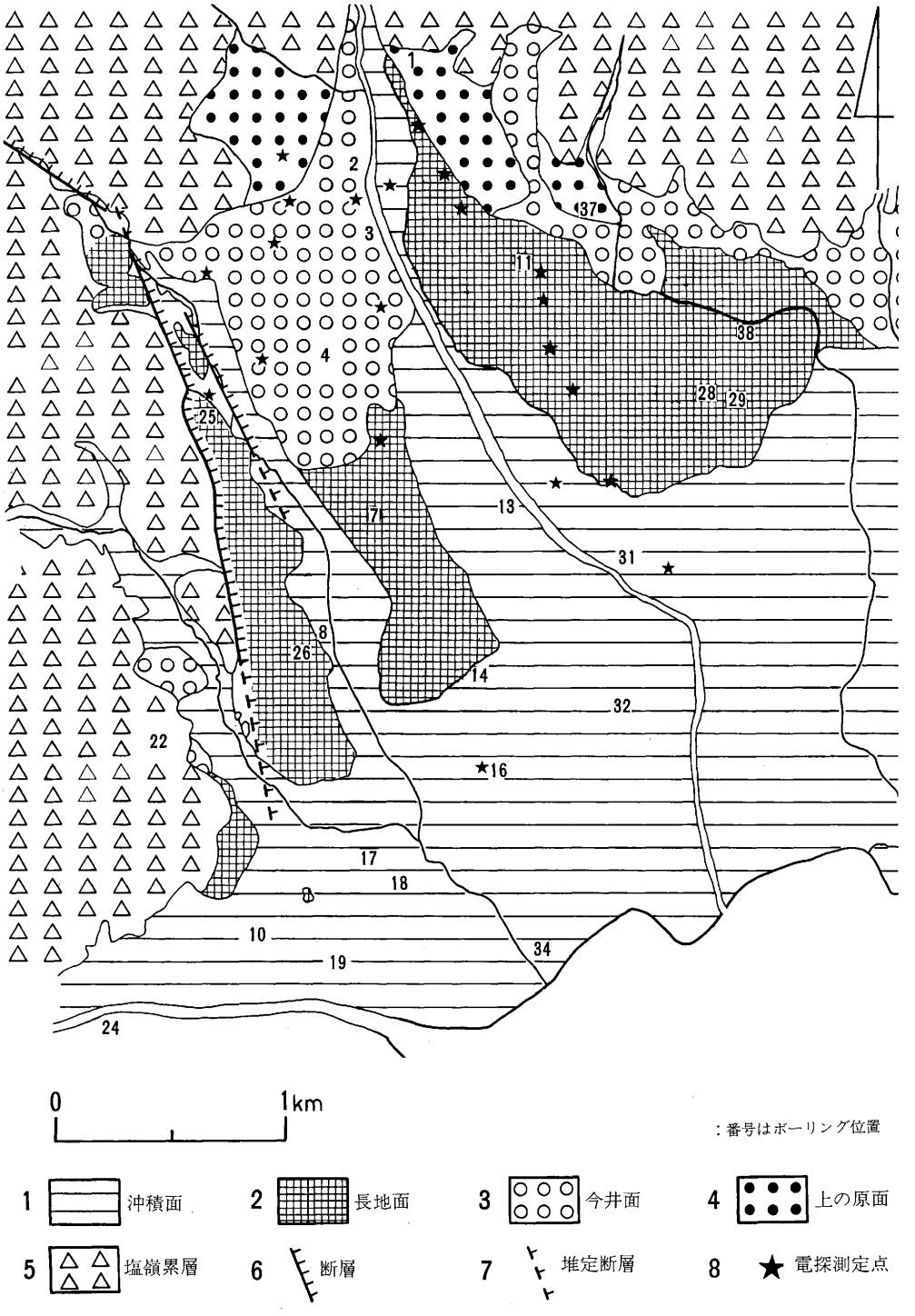
もう１つのグループは，膳棚Ｂから柳海途までの遺跡である。これらは，塚間川のつくる扇状地とその周辺に分布する（第21図）。このうち，最も古い中島Ｂ遺跡は，約18,000年前に山麓より押しだした崖錐性堆積物のつくる小丘上にある。これは，ロームと砂礫がまじりあったもので，長地面の形成期と同時期である。中島Ａ，膳棚Ｂ遺跡は，断層によってできたくぼ地に堆積した砂礫層及び泥炭層の上に立地している。この断層は，上記の崖錐性堆積物を切って発生しており，法政大学の東郷正美助教授らにより，約15,000年前から，2,000年前にかけて，５回活動したことが明らかにされている。柳海途遺跡は，中島Ａ，膳棚Ｂ遺跡より連続する扇状地と，再堆積ロームと，砂礫のまじった崖錐性堆積物におおわれる西側の山麓斜面上にある。

以上，各遺跡周辺の地形，地質を概観したが，今後は，工事によってできる新しい露頭の観察などを交え，資料の蓄積をはかりたいと思っている。



１．膳棚Ａ遺跡　２．膳棚Ｂ遺跡　３．中島Ａ遺跡
４．柳海途遺跡　５．中島Ｂ遺跡

（小松宏昭）　第21図　遺跡周辺の地形区分図（１：10,000）



第22図　岡谷市周辺の地形区分図（1：30,000）

11. 青木沢東（あおきざわひがし）遺跡

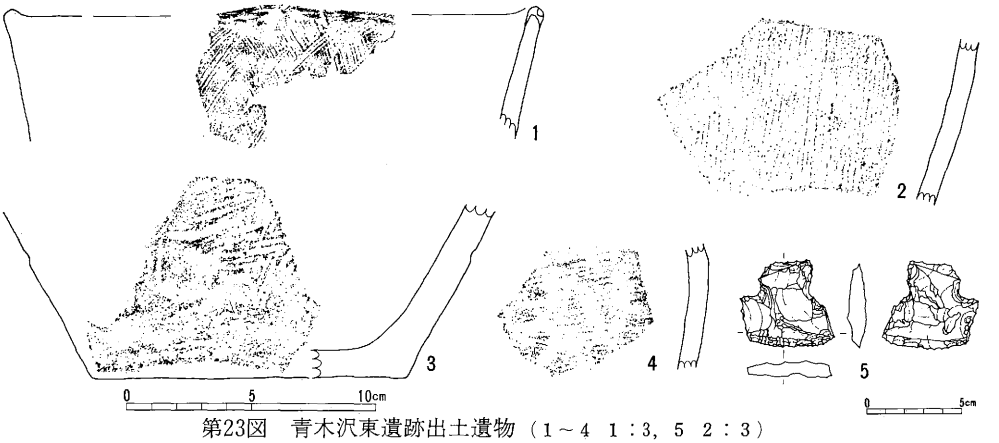
本遺跡は塩尻市東山地籍に所在する。塩嶺山地に源を発し西流する田川の左岸より押し出した砂礫が形成する扇状地状西向斜面の中腹に立地し，南側には小さな沢が田川に向かって流れこんでいる。標高はおよそ885mである。工事開始直後の昭和59年８月，表土削平後に遺物が発見され，新たに調査対象に加えられた遺跡である。調査対象面積は84m²。10月上旬から下旬まで２週間にわたって全面発掘調査を行ったが，調査時には，工事の進行により周辺は原地形の復原が不可能なほどに削りとられていた。

基本的な層序は，Ⅰ層表土(すでに削平され，ない)，Ⅱ層暗褐色土，Ⅲ層黒褐色土，Ⅳ層礫を多量に含む黒褐色土，Ⅴ層暗黄褐色砂礫，Ⅵ層黄褐色砂礫である。

検出された遺構は，方形竪穴状遺構と土壙各１基であった。方形竪穴状遺構は，３m×3.5mの方形を呈し平らに整地された床面をもつものの，柱穴も炉あるいはカマドもみとめられない遺構である。Ⅲ層上面に検出され，Ⅲ・Ⅳ層を掘りこみ床面はⅤ層である。壁の高さは最大で0.4m，北壁と東壁のみ残存する。覆土は，床面上にボロボロした灰黒褐色土（炭混り）が東に厚く西に薄く堆積しており，その上にわずかにⅡ層（炭混り）がのっている。遺構内の遺物は，磨滅した土器小片２点と黒曜石チップ３点である。土壙はⅣ層上面に検出され，Ⅳ層を掘り込んでいる。0.6m×0.8mの不整楕円形を呈し，深さは0.3mである。覆土は，底に接してボロボロした黒褐色土が入り，その上に暗黒褐色砂質土がのっている。遺物はなかった。いずれもその時期や性格については決め手となる資料を欠き，不明である。

遺物は，Ⅱ層から縄文時代晩期の土器片（第23図２）などが数点出土している。調査前（重機による表土剝ぎ後）の採集遺物とともに流れこみによるものと思われる。

なお，沢をはさんだ南側の斜面の水田造成時に土器の出土が知られることから，本遺跡は，更に南側に広がりをもつ遺跡の一部であると考えられよう。　（金原　正）



第23図　青木沢東遺跡出土遺物（１～４　１：3，５　２：３）

12. 青木沢遺跡（あおきざわ）

本遺跡は塩尻市東山地籍に所在する。塩嶺山地より西流する田川によって開析された谷地形の日当たりの良い南斜面に位置し，標高約880mで水田，畑地として利用されていた。調査対象面積は380m² で昭和59年５月および７月の２か月間発掘調査を行った。

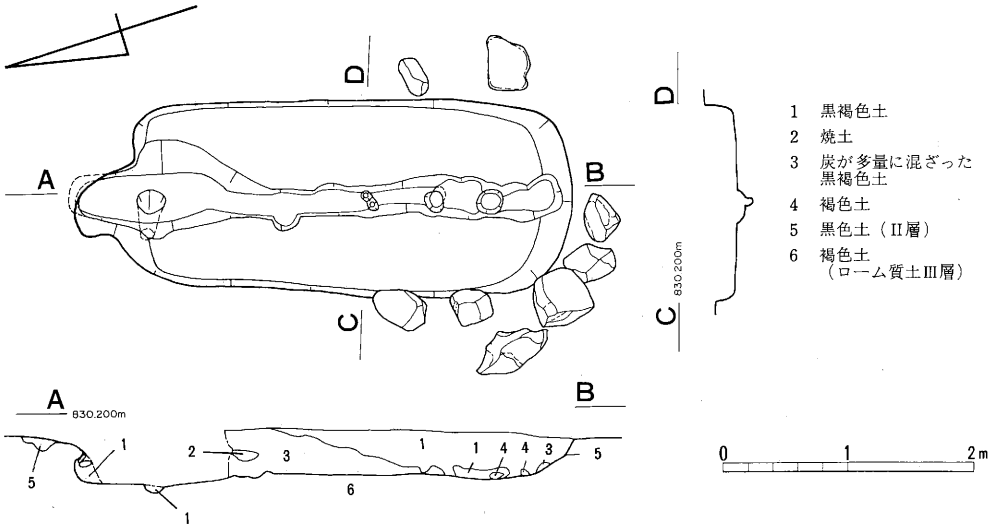
基本的な層序はⅠ層水田耕土・盛土（Ⅰa），水田造成以前の旧表土（Ⅰb），Ⅱ層黒色土，Ⅲ層黄褐色土（ローム質砂礫土）である。またⅡ層中には帯状に多量の細～巨礫が包含されている部分があり，遺跡背景後の尾根から押し出しがあったと推測される。

遺物はⅠa層，Ⅱ層より出土したが，両層の識別が困難であった。縄文時代早期の繊維を含有する土器片，同前期の半截竹管文を有する土器片が少量のほか，石器や黒曜石片が多数出土した。なお石器はポイント，石鏃，打製石斧等である。

検出された遺構は，長方形の竪穴遺構１基のみである（第24図）。Ⅱ層上面で検出され，Ⅱ層からⅢ層にかけて掘り込まれていた。長さ3.5m，幅1.6m，深さ0.2mの東西方向に長い隅丸長方形で，北側に張り出し部をもっている。床面には長軸にそって幅30cmの浅い掘り込みがあり，東端部では幅と深さを増し，東壁外の張り出し部に続いている。また，床面には径20cm，深さ10～30cmのピットが間隔をおいて設けられ，斜めに掘り込まれているものもある。床および壁についてみると，その東半分では焼けて固くなっているところがあり，主として床の掘り込みにそって認められた。また多量の木炭が含まれており，そのほとんどが東半分に存在した。

なお遺物は木炭以外には何も検出されず，遺構の時期，性格等を明らかにすることはできなかった。

（遠山芳彦）



第24図　青木沢遺跡竪穴遺構１（1：60）

13. 八窪（はちくぼ）遺跡

本遺跡は，塩尻市柿沢地籍にあり，塩嶺山地の西斜面で，みどり湖の東250m，西流する田川と田川に注ぐ小河川によって開析された尾根の先端近くの平担部に立地する。調査対象面積は5,060m² で，昭和59年６月及び８月から11月下旬にかけて発掘調査を行った。

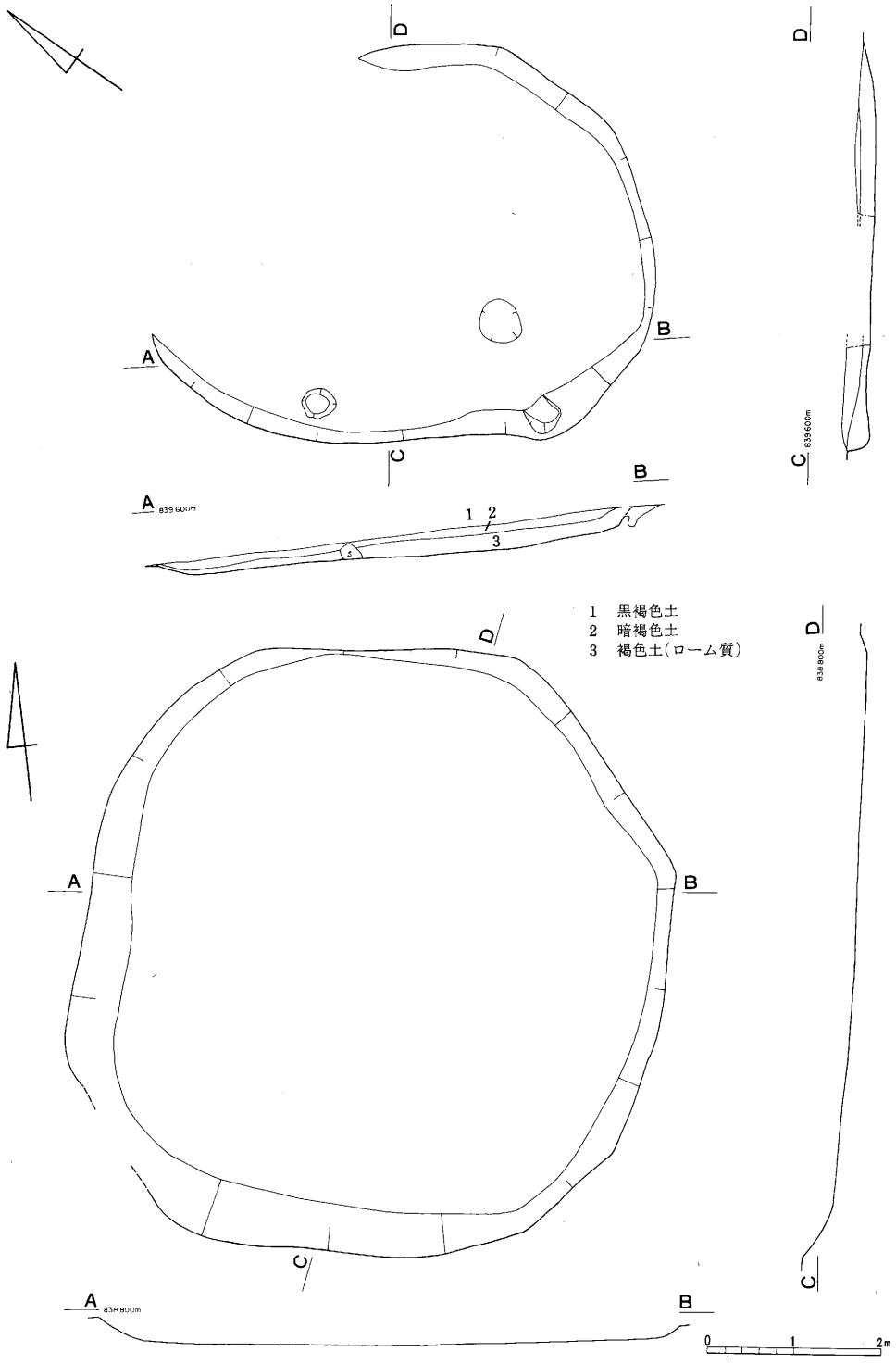
土層はⅠ層表土・耕土，Ⅱ層黒色土，Ⅲ層黒褐色土，Ⅳ層黒色土，Ⅴ層黒褐色土，Ⅵ層褐色土（ローム質土）で，Ⅱ層からは平安時代，Ⅲ層は縄文時代中期･後期と古墳時代，Ⅳ層は縄文時代中期・後期，Ⅴ層は同早期・前期の遺物が主に出土した。

検出された遺構は，竪穴住居址３軒（縄文時代早期２軒，平安時代１軒），土壙16基，古墳時代の焼土を伴う土壙状遺構１基，時期不明で木炭が多量に含まれる竪穴遺構２基等がある。

縄文時代早期押型文期の住居址は，第２号住居址と第３号住居址の２軒検出され，いずれも尾根上に高まった部分の北斜面上部に位置し，Ⅴ層中からⅥ層に掘り込んでいた。第２号住居址は5.5×4.5mの不整円形を呈し，そのプランは斜面下位の北側で不明瞭であった。屋内施設として南から西の壁及び壁際にピットが２基，南壁近くに浅いピットが１基確認できた。遺物は土器片や黒曜石片が主に出土した。土器片は小破片がほとんどで，中には床面直上で出土したものもあった。出土した土器は，山が大きく陽部の狭い縦位施文された山形文（第26図１・２）や市松文（３・４），楕円文（５），底部近くの破片で平行線文（６）等の押型文土器がある。また撚糸文土器の口縁部片（７）もあり，口唇部に刻みが，口縁部外面に網目状撚糸文が縦位に施文されている。

第３号住居址は，２号住居址の北西側斜面下位に近接して位置する。７m×７mのほぼ円形を呈すプランで，屋内施設は認められなかった。壁はすり鉢状になだらかに立ち上がり，壁高は山側で30cm，谷側で10cmを測る。遺物は土器片や黒曜石片が主に出土し，２号住居址と同様に土器片はほとんど小破片である。出土した押型文土器片には，帯状施文の山形文（９～12），格子目文（13・14），帯状施文の楕円文（15），ネガティブな楕円文（16・17）等がある。９の口唇部には山形文が施されている。撚糸文土器片（８）も出土している。

木炭が多量に含まれた竪穴遺構のSX１・３はⅡ層中より掘り込まれていた。SX１は尾根上の平担部，SX３は北斜面中腹に構築されていた。SX１は主体部と煙道部からなり，主体部は4.3m×1.7m，深さ0.45mの長方形である。主体部底面では長軸に沿って浅い掘り込みがあり，南端近くでは幅と深さを増す。煙道は南壁外に掘り抜かれていたが検出時には崩落していた。主体部底面及び煙道部内面に焼土が形成されていた。遺構に直接伴う遺物は木炭以外何も検出されなかった。主体部底面及び側壁に貼り付くように，長軸に平行ないし直交する木炭が検出された。SX３はSX１より小規模で，底面の長軸に沿う掘り込みはないものの，SX１と同様な形態，堆積状況を示していた。

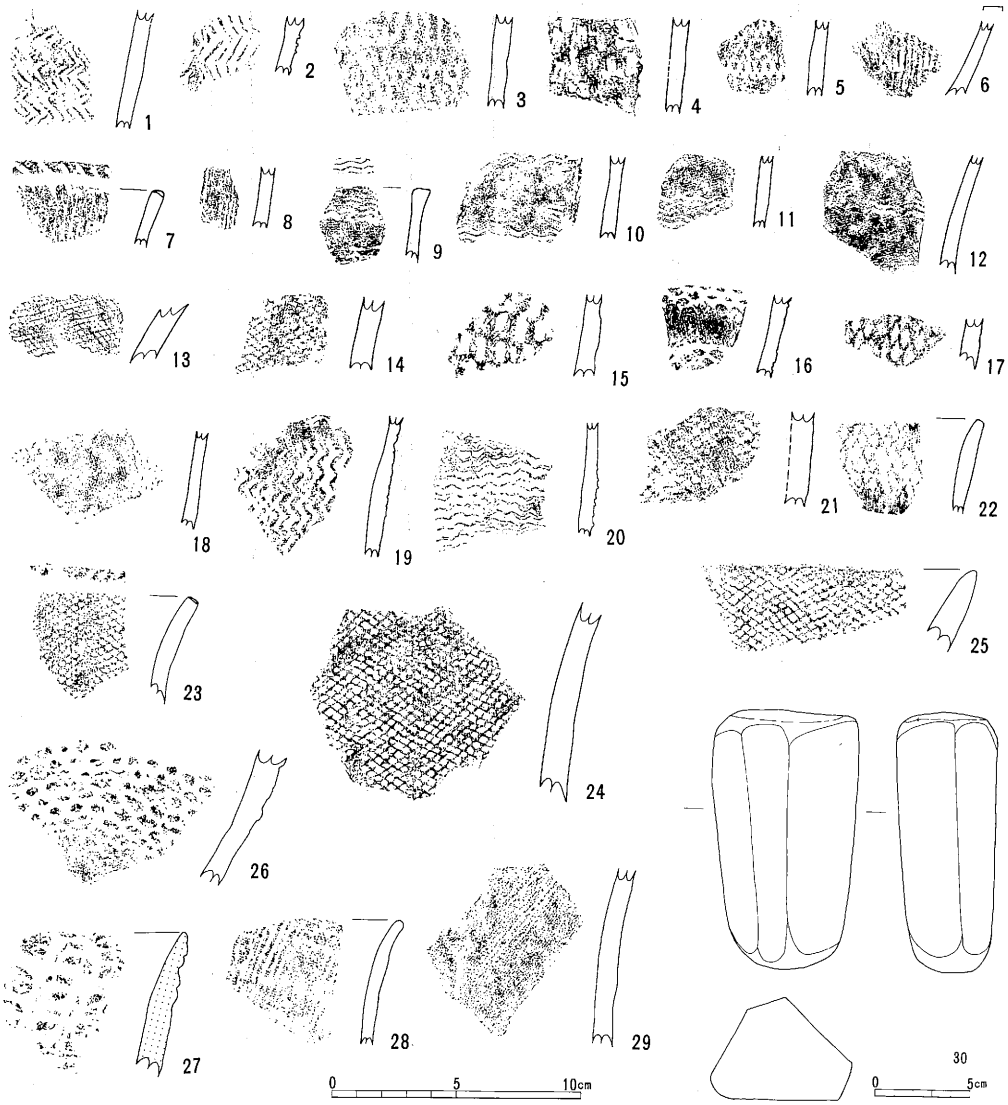


第25図　八窪遺跡2号(上), 3号(下)住居址(1：80)

縄文時代早期の遺物の中で，押型文土器は大きな割合を占めている。住居址から出土した土器以外に，黒鉛を含む帯状施文の山形文（18），縦位密接施文と横位施文の併用された山形文（19），低い山の山形文（20），市松文（21），格子目文（22～25），楕円文（26・27）等がある。他に早期の土器には撚糸文土器（28）や沈線文土器（29），条痕文土器等がある。同期の石器は断面三角形の磨石（30）や石鏃等がある。

本遺跡ではネガティブな楕円文をもつ押型文土器片が得られ注目される。またSX１，３は青木沢遺跡で同様な遺構が検出されたほかに類例が乏しいので，その年代と性格の解明が今後の課題である。

（百瀬久雄）



第24図　八窪遺跡出土遺物（１～７　２号住，８～17　３号住，18～30　Ⅴ層）（１：３，30のみ１：５）

14. 北山遺跡（きたやま）

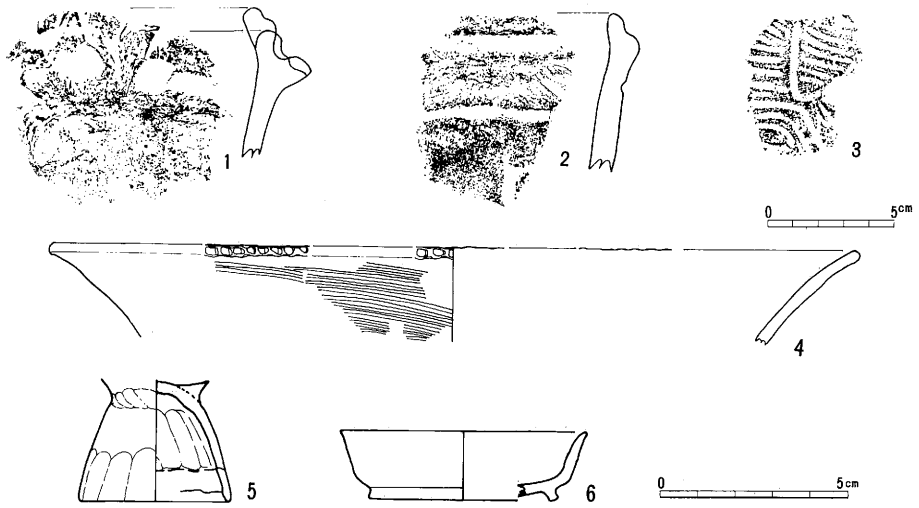
北山遺跡は，塩尻市東北部の柿沢地区に所在する。塩尻峠の尾根に沿った四沢川によって形成された扇状地上に立地し，調査区域は水田となっていた。発掘調査は，昭和58年11月初旬から11月下旬までの期間にわたって実施された。調査対象面積は520m² である。

層序はⅠ層耕作土，Ⅱ層粘質黒褐色土，Ⅲ層礫混り粘質灰褐色土である。水田造成のために削られた部分が多く，Ⅱ層は部分的にしか残っていなかった。遺物の多くは，このⅡ層からの出土である。Ⅲ層からの出土は皆無で，遺構は確認されなかった。

出土遺物は，縄文時代後期及び弥生時代中期土器がほとんどである。第27図１は，器面は調整粗雑であり，口縁部に刺突文が見られ，弧状に沈線が描かれており，口縁部で内折している。２も器面はあれており，口縁部で内折し棒状沈線文がみられる。ともに堀之内式と思われる。３は器厚も薄く，沈線文が施されている。庄ノ畑式と思われる。４は全面に条痕文が施され，口端部を指で押している。弥生時代中期に属するであろう。

この他，土師器台付甕台部（５）と須恵器杯（６）が出土している。また図に示さなかったが，石鏃，石匙などの石器類や，近世の陶器片，寛永通宝，文久永宝などの古銭も出土している。これらは，いずれも耕作土中の出土である。

今回の調査では，遺物は極めて少なかったが，弥生時代中期初頭の土器が90点ほど出土しており注目される。この時期の遺跡は，中央自動車道長野線に関連する発掘で，岡谷市西林Ａ遺跡・下り林遺跡，塩尻市ヨケ遺跡・青木沢東遺跡などが調査されている。いずれも，山麓地に位置しており，この時期の遺跡の立地を考える上でも，良い資料となろう。　　（小菅敏男）



第27図　北山遺跡出土土器（１～３　１：３，４～６　１：４）

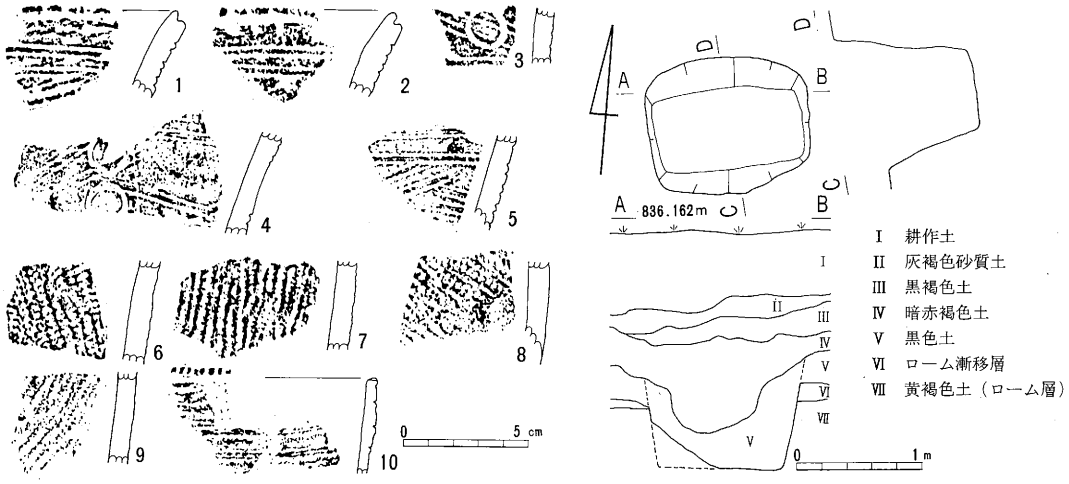
15. 大原（おおはら）遺跡

本遺跡は塩尻市柿沢地籍に所在する。遺跡は，柿沢の集落の東側，塩嶺山地より流れ下る四沢川によって形成された扇状地の扇央部に広がっており，中央自動車道はその中央やや西寄りを南北に横断する。調査対象面積は25,800m²。発掘調査は昭和59年５月上旬から11月末まで行われた。

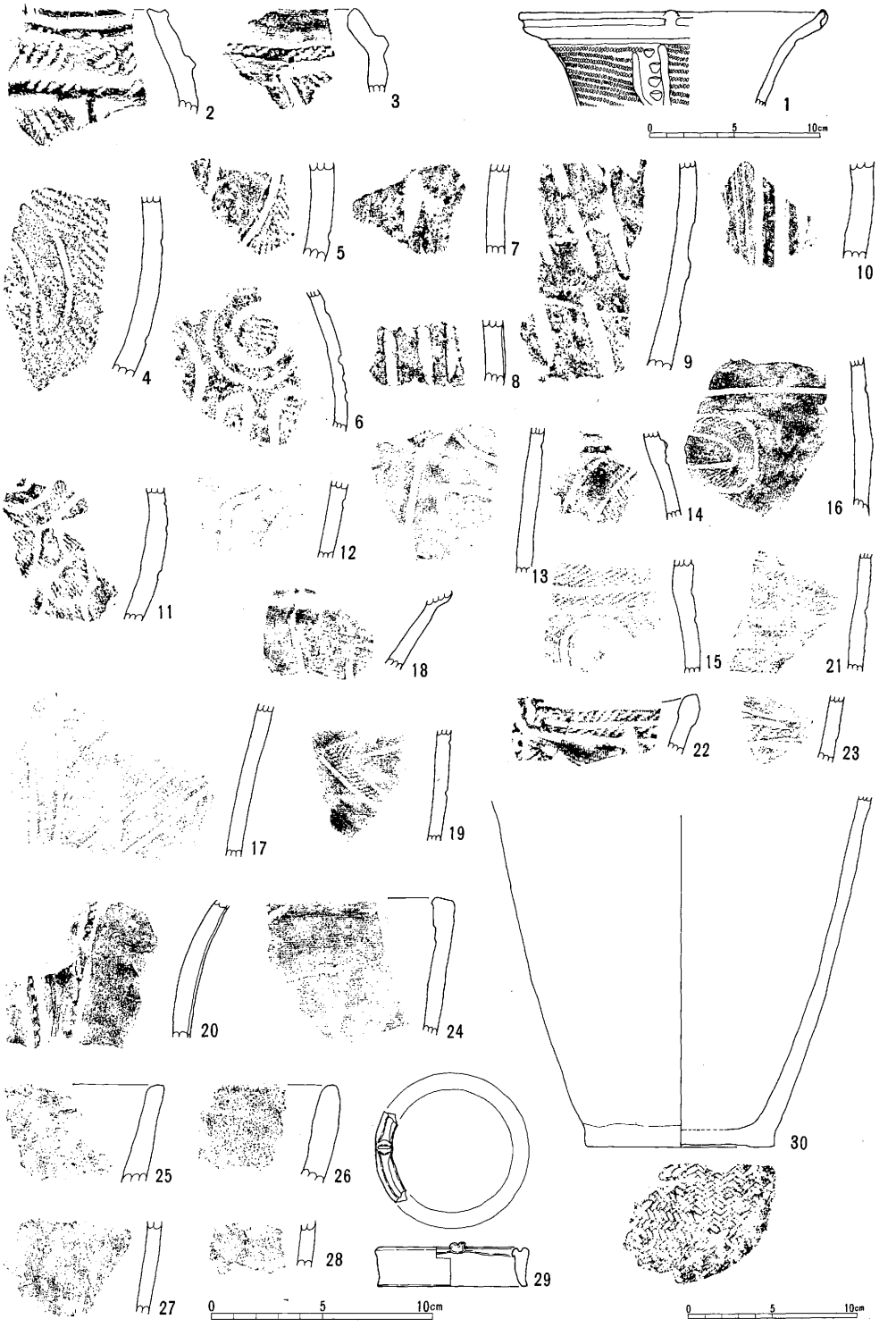
西に傾く扇状地は緩く起伏し，谷状に窪んだ部分には腐植土が厚く堆積するが，尾根状の台地部では耕土下即ローム層となる。谷状に窪んだ部分の層序は第28図（右下）に示してある。遺構は，土壙８基，近世以降の民間信仰にかかわると考えられる塚１基であった。土壙のうち１・２・４号は，長方形のプランで深さは１m以上，垂直な壁と平担な堅い底部に仕上げるという共通性をもち（第28図右），関東などで陥穴〔今村1978〕とされているものに類似している。これらの状地上の谷部，尾根部両方に散在する。このうち１号土壙の覆土から縄文時代中期初頭の土器片（第28図１）が出土しており，所属時期を考える手がかりとなる。また，７・８号土壙は不整円形・擂鉢形であるが，覆土から縄文時代後期前半の土器片が出土している。

遺構に伴う遺物のほかに，谷状の窪地の包含層（Ⅳ層）からまとまった遺物が出土している。第28図２～10は北側調査区，第29図１～29・30は南側調査区，29は調査区北端のⅥ層出土遺物である。これらの遺物は，谷状の窪地に流れ込んだような出土状況を示していた。その他，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層からは，縄文時代の土器・石器，土師器，須恵器，陶磁器片等が出土した。

長方形の土壙を関東地方で考えられているように陥穴とすれば，今回調査した大原遺跡のある高燥な扇状地扇央部は，縄文時代中期から後期にかけて居住の空間としてよりはむしろ，狩場などとして位置づけられていたといえるのではなかろうか。　（小平和夫）



第28図　大原遺跡包含層出土土器(左)(1：3)，１号土壙(右)(1：60)



第29図　大原遺跡包含層出土遺物（1·30 1：4，2～29 1：3）

16. 御堂垣外遺跡

本遺跡は塩尻市柿沢地籍にあり，塩尻市環境センターの約200m東に位置している。国道20号線と四沢川にはさまれた日当たりの良い南斜面に立地し，畑地であった。調査対象面積は860m²で，昭和58年10月下旬から12月中旬にかけて調査した。

確認された層序は，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層褐色土，Ⅲ層黒褐色土，Ⅳ層赤褐色土，Ⅴ層黄褐色土で，いずれも親指大から拳大の礫を含んでいた。遺物包含層はⅢ層，遺構検出面はⅤ層上面であった。検出された遺構は，縄文時代中期後半の４号住（SB４），同後期前半の１号住（SB１），２号住（SB２）・３号住（SB３）・５号住（SB５），時期不確定の６号住（SB６）の６軒の住居址と縄文時代後期前半の１号土壙（SK１），古墳時代の６号土壙（SK６），時期不詳の２号土壙（SK２），３号土壙（SK３），４号土壙（SK４），５号土壙（SK５）の６基の土壙である（第30図上）。遺物はこれらの遺構に伴う土器・石器のほか，土師器・須恵器・灰釉陶器片がわずかに出土している。遺物の全体量は多くない。

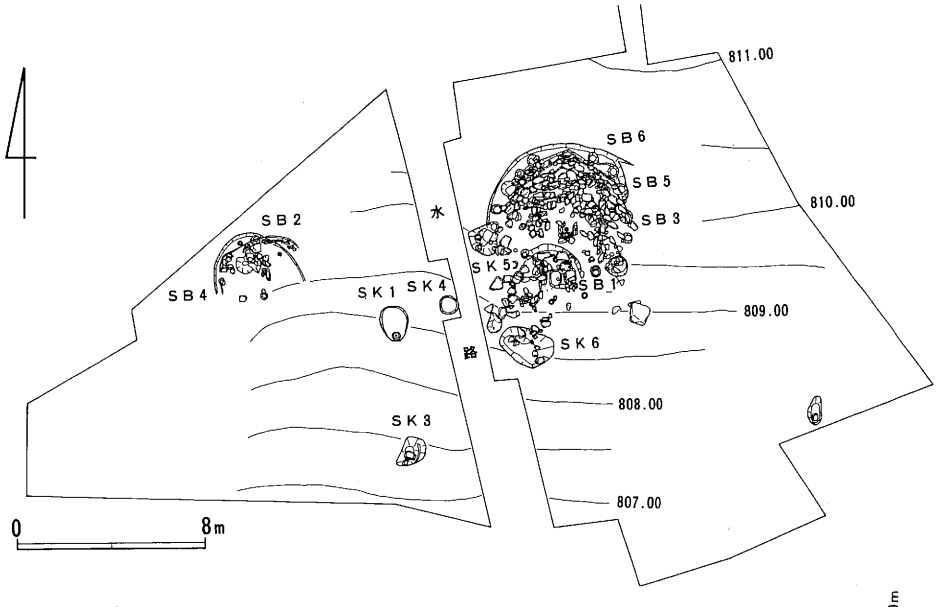
６軒の住居址は東西の２か所にまとまって存在した。西側では２号住と４号住が切り合い，４号住→２号住の順になり，東側では１号住，３号住，５号住，６号住が切り合い，６号住→１号住→５号住→３号住の順になる。特に６号住・５号住・３号住は同一地点で切り合い，新しくなるにつれてプランは南ずれするが，炉はほぼ同一地点という特異なあり方をしている。

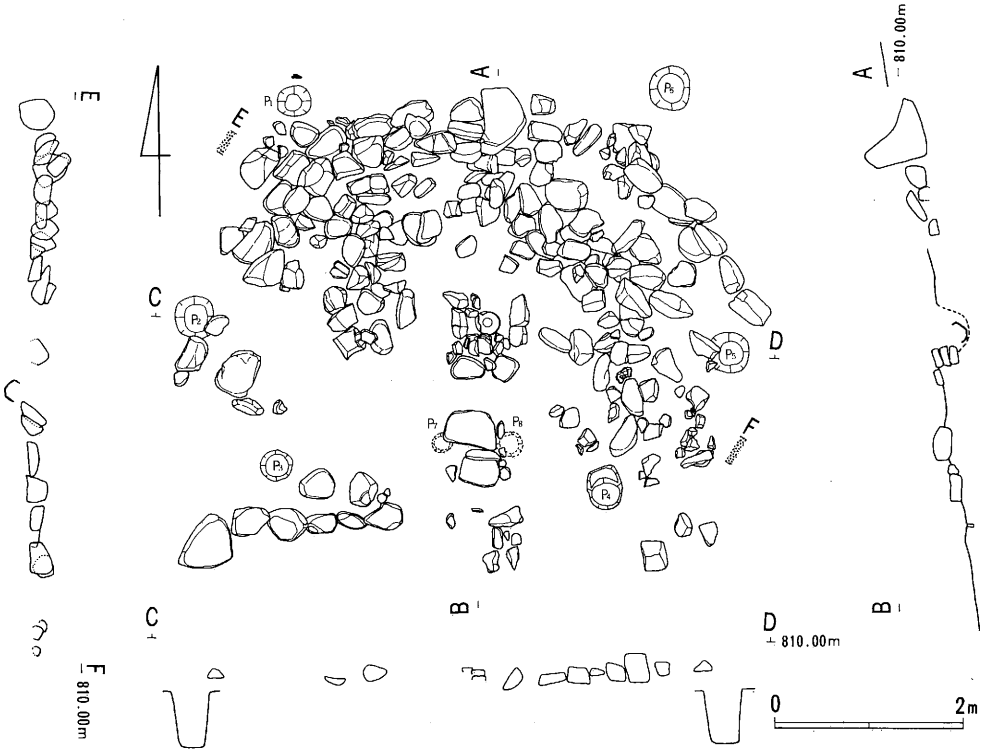
４軒の敷石住居のうち，１号住，２号住，５号住は堀之内式期で鉄平石等の平石を炉の周辺・奥壁下に部分敷石している。３号住（第30図下）も堀之内式期である。本住居は当初より多量の石とそのあり方からどうとらえるか理解に苦しんだが，検出された石は区画をなす石とその内部にある石とに分類でき，敷石住居の範ちゅうに入るものととらえた。区画をなす石は北東から北西にかけて弧状に，南西隅に直線状にあり，住居址のプランは半円形になる。これらの石は埋め込んで立てたり，斜めに立てかけたり，長軸を横にして置いたりしながら礫堤状をなし，北壁中央部には立石と思われる巨石がある。内部にある石の大多数は雑然としているが，炉石とその南の平石は計画的に置かれたものである。本住居では床面を明確にできなかったが，炉石とその南の平石の面が床面になると考えられ，雑然と存在する大多数の石は廃絶期の所産ととらえられる。炉は中央にコ字状に石囲いし，その中に土器（第31図２）を埋めている。第31図１は炉内に倒れ込んでいた土器の一つである。柱穴はP_1～P_6の６本があり，P_7・P_8も入り口部で対をなすピットである。南東部の石の間から注口土器（第31図３）が出土しているほか，土器片・打製石器・磨製石器が出土している。

第31図４の鉢は１号土壙から逆位の状態（第31図右下）で出土した堀之内式期の優品である。

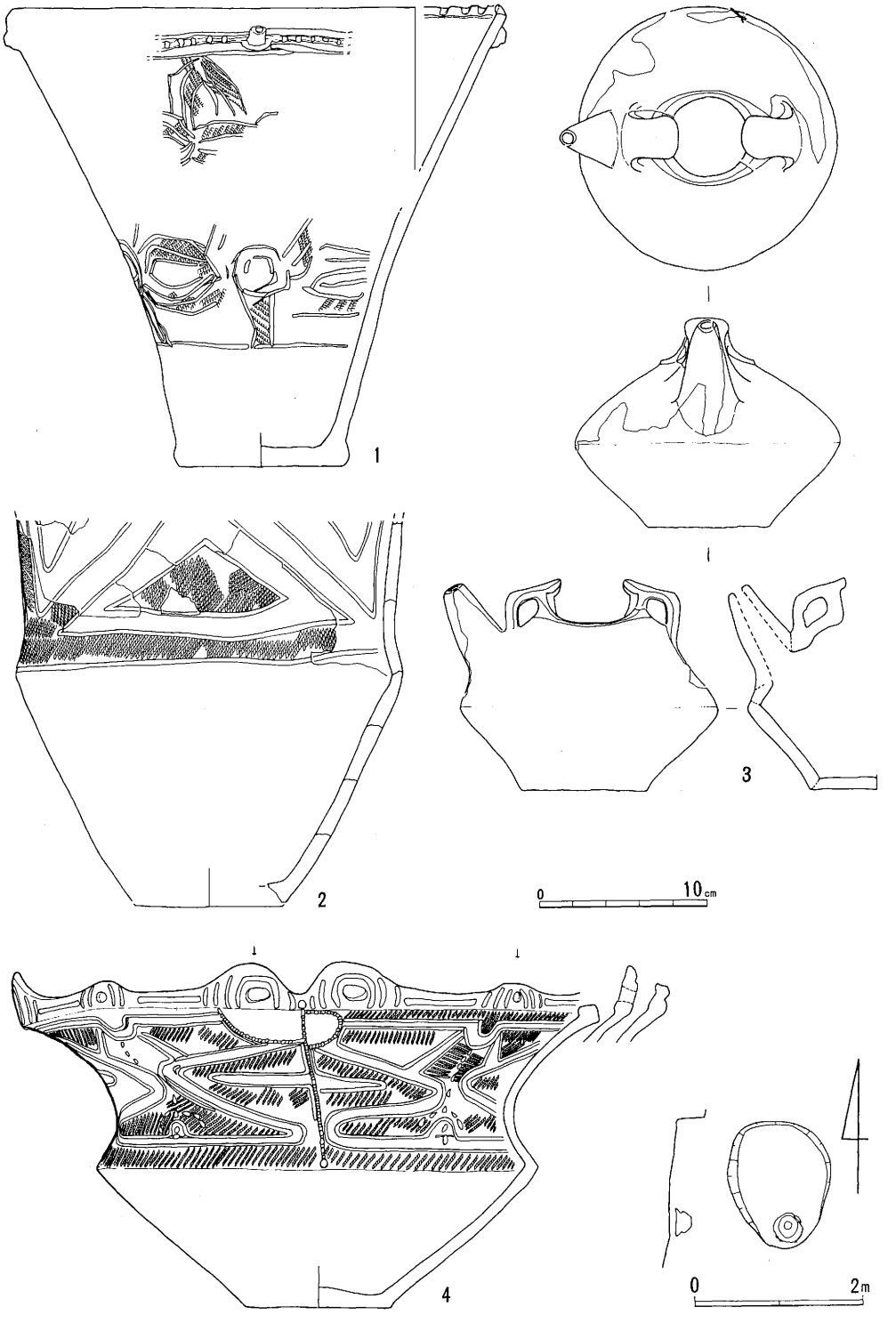
本遺跡は斜面に立地しているが，６軒の住居址の発見から居住の場として利用されたことが判明した。中でも，４軒の敷石住居の発見はこの期の集落を考える上で好資料となるものであ

ろう。また，６号住→５号住→３号住の同一地点での切り合い関係は，その連続性をどうとらえていくか課題である。更に，３号住のような礫堤を持つ住居址についても，類例の集成を行いながら，存在時期・分布等を明らかにする必要がある。（市沢英利）





第30図　御堂垣外遺跡全体図(上)(１：320)，３号住居址(下)(１：80)



第31図　御堂垣外遺跡３号住居址出土土器（1～3）（上），1号土壙（右下）（1：80）と出土土器（4　1：4）

17. ヨケ遺跡

本遺跡は塩尻市長畝地籍に所在し，塩尻市斎場の北東800m，高ボッチ山系西麓の西へ向けて大きく開放する谷頭部に立地する。標高780mから777mの日当たりの良い，ゆるやかな斜面は，発掘前畑地として利用されていた。その開墾の際，南側部分は削平されてしまっている。発掘面積は1,490m² で，昭和59年５月上旬から６月上旬にかけて調査を行った。

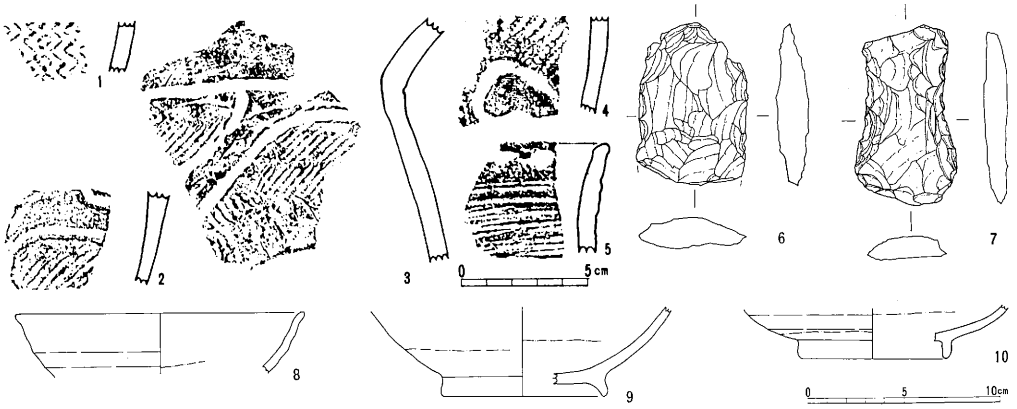
基本的層序は，上層からⅠ層耕作土，Ⅱ層黒褐色土，Ⅲ層茶褐色土，Ⅳ層黒褐色土，Ⅴ層茶褐色土，Ⅵ層ローム層である。本遺跡は浅い谷に位置するため，中央部でⅠ～Ⅴの各層が確認されるが，縁辺部では削平により，すでにⅡ層からⅤ層が失われ，Ⅰ層下がすぐにⅥ層となっている。

遺物はⅠ・Ⅱ層より平安時代，Ⅲ層・Ⅳ層より縄文時代と弥生時代の遺物が主として出土した。平安時代の遺物は，灰釉陶器の椀・皿・壺（第32図８～10），土師器の杯などであるが，いずれも破片である。縄文時代の遺物は土器と石器がみられる。土器では早期の押型文，前期，中期，後期がわずかに出土している（１～４）。石器は打製石斧・石鏃等である。その中では打製石斧が最も多く，破損品・未成品を含めると80点余りを数える（６・７）。このほか，弥生時代の土器（5）も数片出土している。

遺構は縄文前期のものと思われる土壙１基のみである。覆土より縄文の施された土器片２点が検出された。なお，平安時代の遺物の量からすると，何らかの遺構の存在が推測できるが，耕作の際に失われた可能性もある。

本遺跡の打製石斧の多量の出土は，遺跡の性格を考えるうえで重要な示唆を与えてくれるものと思われる。また周辺には，樋口・栗木沢遺跡がある。共に平安時代の遺物が出土しており，遺構も検出されている。これらの遺跡との関連を考えることが今後の課題である。

（青柳英利）



第32図　ヨケ出土遺物（１～５　１：３，６～10　１：４）

18. 栗木沢（くりきざわ）遺跡

本遺跡は塩尻市長畝地籍に所在する。塩尻市斎場の北東約500m，高ボッチ山系西麓のひだ状に伸びた尾根の間の谷部に立地し，水田，畑地及び山林として利用されていた。調査対象面積は3,710m² で，昭和59年５月上旬から７月上旬にかけて発掘調査を行った。

トレンチ発掘によって確認された層位は，上層からⅠ層耕作土，Ⅱ層黒褐色土，Ⅲ層小礫を含む砂礫質の漸移層，Ⅳ層角礫を含むローム質基盤を基準とするが，尾根の北側ではかなりの部分でⅠ・Ⅱ層が調査前に削平されていた。

検出された遺構は，尾根の南側では平安時代の竪穴住居址３軒，焼土を伴う集石１基，縄文時代の集石土壙４基が，尾根北側では平安時代竪穴住居址１軒が主なものである（第33図上）。これらの遺構の多くは，尾根の南側では耕作の際に削平されたためか地表直下に存在しており，また，尾根の北側でも削平を受けていたため，遺存状態は良好ではなかった。４軒の住居址はいずれも尾根部から谷部への地形変換点付近に構築されており，１号住居址と２号住居址は重複し，３号住居址及び尾根の北側で検出された４号住居址は単独で検出された。１号住居址・４号住居址は尾根側の壁の中央に石組みカマドを持つが，２号住居址・３号住居址では，はっきりしなかった。プランを明確に検出し得たのは，４号住居址のみである。

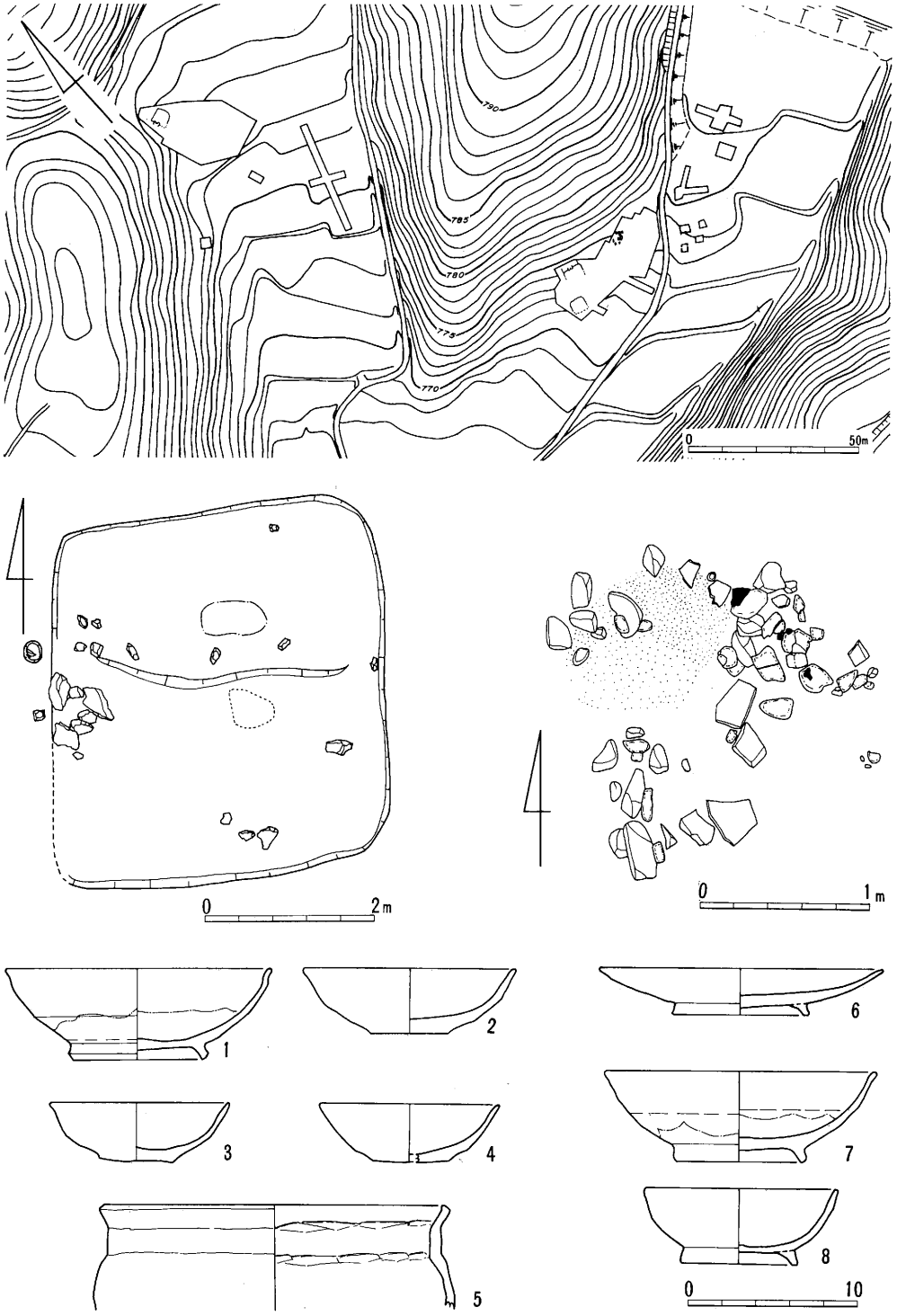
４号住居址は，一辺約４mの正方形に近い形を呈し，西壁のほぼ中央にカマドを設けている（第33図中左）。床面の北側半分はやや高まっており，部分的に粘土の貼床も認められた。遺物はさほど多くないが，東濃産と思われる灰釉陶器の椀（第33図１）・皿のほか，土師器の杯・甕（２～５）・鉄滓等が出土している。

１号集石は，焼土のブロックを中心に，拳大から人頭大の礫を平面的に敷いたもの（第33図中右）で，緑釉陶器の皿（６）が礫の間にはさまった状態で出土した。この遺構の周辺からは，灰釉陶器の椀（７）や土師器の椀（８）も出土しており，その性格については，これからの課題としたい。

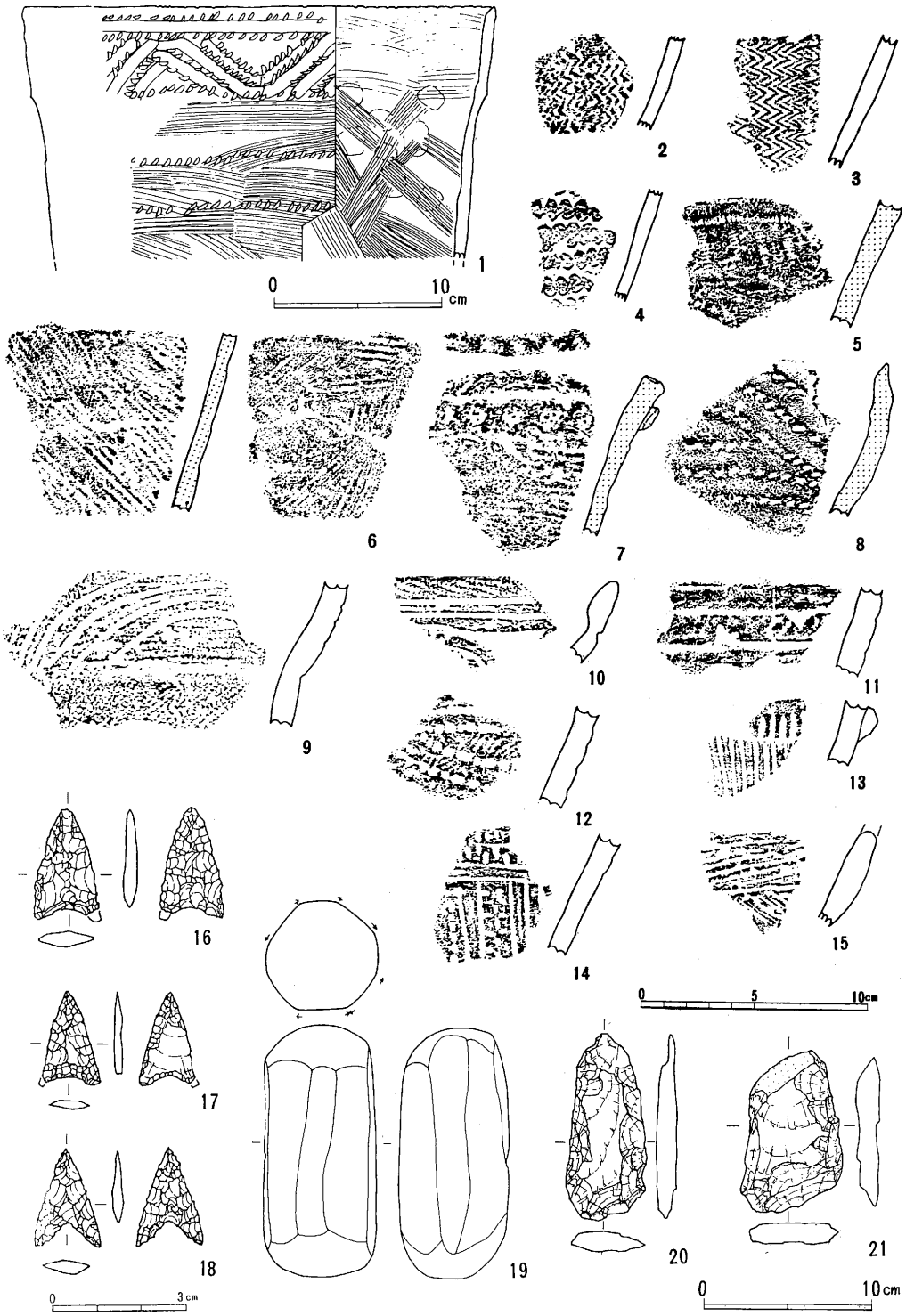
遺構はとらえられなかったが，Ⅱ層，Ⅲ層及びⅣ層最上面より，縄文時代早期から中期の土器・特殊磨石・打製石斧・石鏃（第34図１～21）等も比較的多量に出土した。中でも縄文時代早期後半の資料については，押型文土器・茅山下層式土器・粕畑式土器・絡条体圧痕文土器などに好資料がみられる。また，これらの土器群とともに，口唇部及び口縁部下の隆帯に指頭圧痕を施した，胎土に繊維を含む条痕文土器（７）が出土しているが，この種の土器は類例が少なく，その編年的位置についても今後の課題である。

本遺跡では，平安時代後半の小集落の存在が明らかとなったが，ヨケ遺跡・樋口遺跡もほぼ同様な遺跡である。灰釉陶器を多量に伴う時期の山麓部への開発の進展を示す好適な資料となろう。

（井口慶久）



第33図　栗木沢遺跡地形図(上)(1：2,000)，1号住居址(中左)(1：80)及び出土遺物(1～5)(1：4)，1号集石(中央)(1：40)及び出土遺物(6～8)(1：4)



第34図　栗木沢遺跡出土遺物(1・19~21 1：4，2~15 1：3，16~18 1：1.5)

19. 高山(城跡)遺跡

本遺跡は，高ボッチ山系の西山麓が，松本盆地南東縁に接する，塩尻市長畝の地籍にある。

この一帯では，高ボッチ山麓から盆地に向って扇状地状に広がった丘陵が，幾筋かの沢に切られ，比高30～40m程の尾根や谷をなす。それらの尾根や谷は，小規模ながら，縄文や平安時代の遺跡を残していることが多い。

本遺跡もそれらの尾根の一つにあり，遺跡名が示すように，北西部の急斜面，土階や塹濠らしきものの存在から，小砦か出丸等の可能性が指摘され〔塩尻町誌，1937〕，城跡として登録されていた(第35図上)。

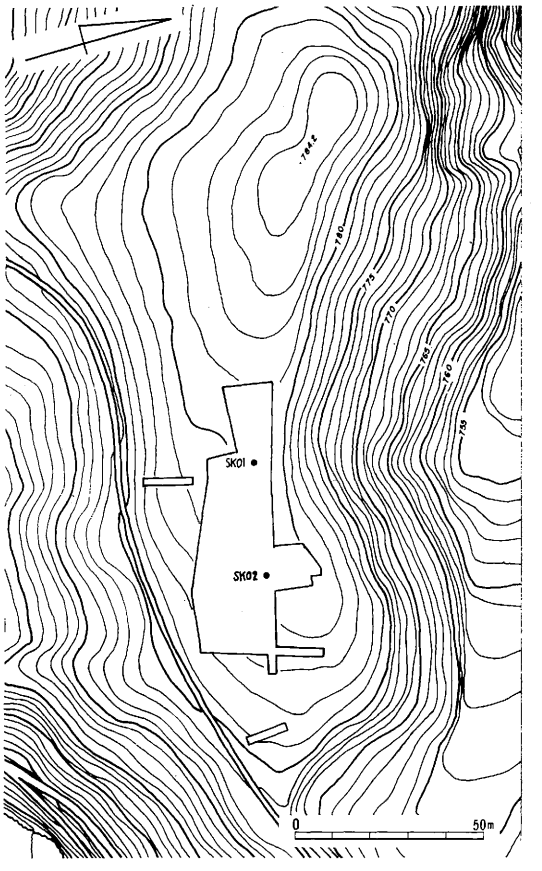
調査開始に当たっての識者を交えての現地踏査では，その存在はほぼ否定されたが，集落遺跡としての可能性もあったため，城跡の有無の確認も含め，対象面積4,180m² を９月中旬より20日余り調査した。調査区は，一部畑を含む山林地であったが，表土即ロームの地山で，遺物はすべて表土より採集された。

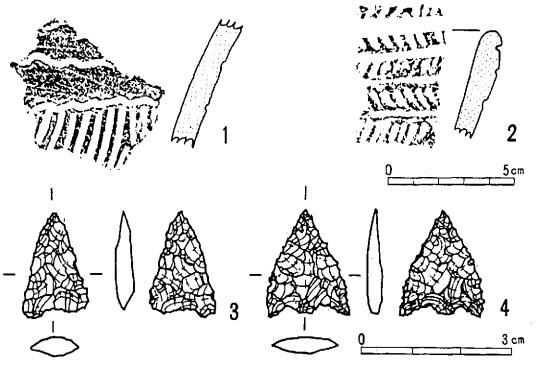
採集遺物は，縄文早期末の土器片（１・２）約30点，石鏃（３・４）５点，打製石斧・乳棒状磨製石斧・石匙・石核各一点，黒曜石片数十点，及び須恵器片（平安期）２点である。

遺構としては土壙(SK) ２基のみで，SK02にはわずかに炭化物を含むものの，いずれも時期，性格ともに不明である。

当初予想されたとおり，城跡に関する遺構，遺物は，調査区域内では皆無であった。また集落の存在を予想させるような遺構の発見もできなかった。

しかし，少数とはいえ，尾根上でのこれらの遺構，遺物が，どのような性格を持つものであるか一考を要する。　　(小松　望)





第35図　高山遺跡地形図(上)(１：2000)及び出土遺物(下)(１・２　１：３，３・４　１：1.5)

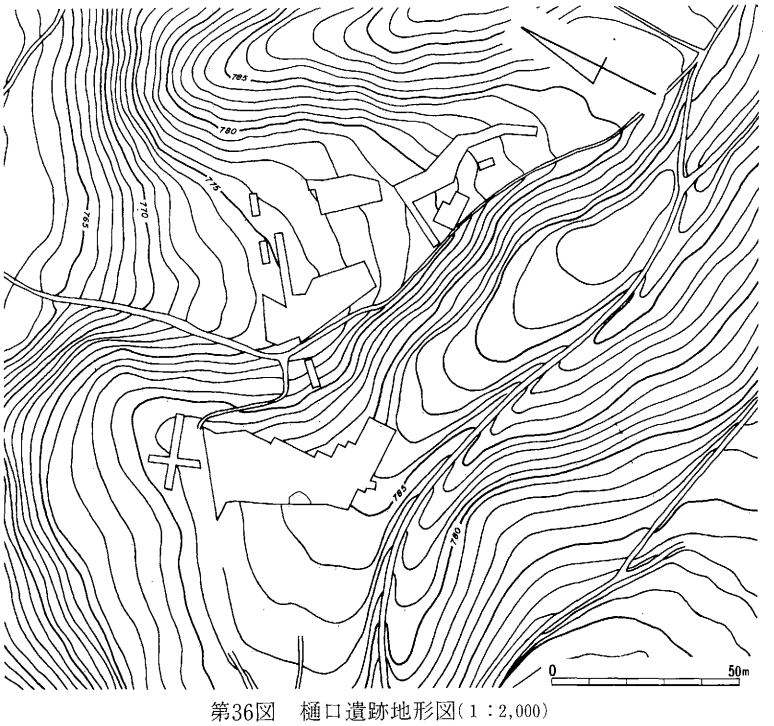
20. 樋口（とよぐち）遺跡

樋口遺跡は塩尻市長畝地籍に所在する。栗木沢遺跡，ヨケ遺跡等と同様，高ボッチ山系西麓に展開する標高750m～850mの放射状の丘陵地内にあり，小規模な尾根と谷底部に立地している。隣接する高山(城跡)遺跡とは谷一つ隔てた位置である(第36図)。尾根上の狭い平坦地は畑地として，谷底部の緩斜面は畑地及び植林地として利用されていた。発掘調査は昭和59年６月中旬から８月下旬にかけて行われ，調査対象面積は2,900m² であった。

トレンチ発掘によって確認された層序は尾根部でⅠ層耕土，Ⅳ層ローム層，谷底部でⅠ層耕土，Ⅱ層黒色土，Ⅲ層漸移層，Ⅳ層ローム層である。

検出された遺構は平安時代後期の竪穴住居址１軒，時期不明の土壙３基である。住居址は尾根部で検出されたが，耕土直下がローム層となっているため，全面的に削平されており，一部がトレンチャーによって破壊された上，西側約⅓が用地外にかかっているため全体を把握することはできなかった。一辺約５mの隅丸方形プランが想定され(第37図)，カマドは東壁中央やや南寄りに石組みで設置され，両脇に直径約0.6m及び1.2mのピットを伴っていた。住居址内にはこのほかいくつかのピットが検出されたが，柱穴と断定できるものはなかった。遺物としては土師器の杯・小型甕，灰釉陶器の椀・皿(第38図１～13) 刀子，紡錘車等が出土した。

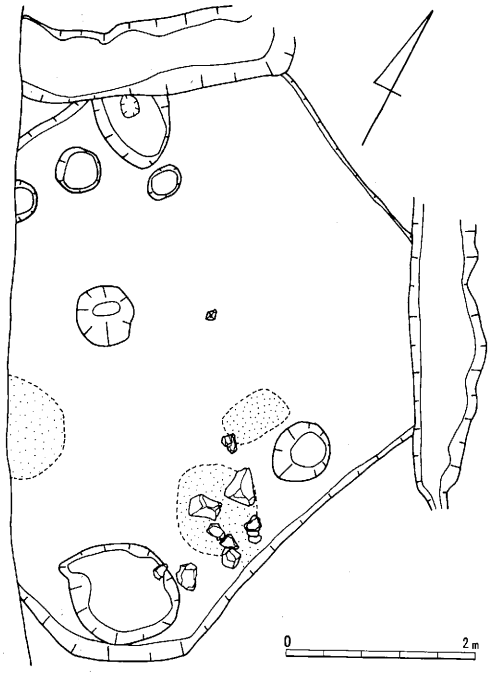
土壙は尾根部で１基，谷底部で２基確認され，尾根部のものは平坦面の先端付近で検出された。開口部0.8m×1.5m，底部1.5m×1.2mの断面長靴状を呈しており，底部は硬くしまっていた。内部には黒色土がつまっていたが遺物の出土はなく，性格は不明である。谷底部のものは調査区南西寄りに２基並んで検出され，ローム質の基盤に掘り込まれていた。両方とも直径約0.5m，深さ約0.3mで，遺物の出土はなく，時期，性格とも不明である。



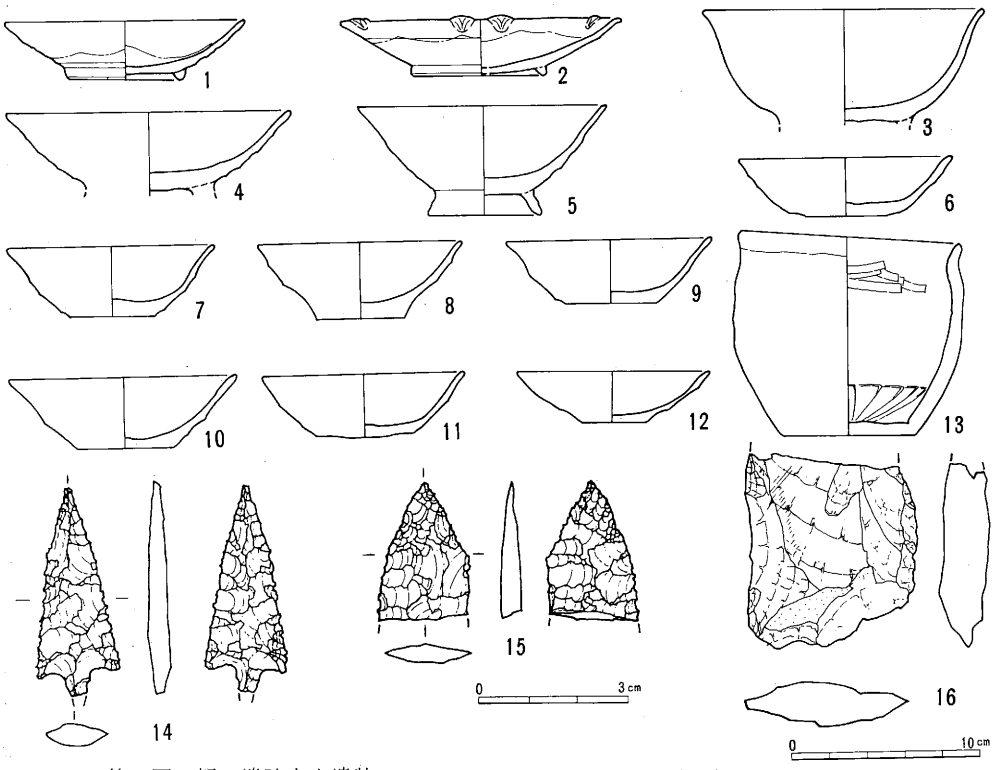
第36図　樋口遺跡地形図(１：2,000)

谷底部調査区からは当初，石鏃，打製石斧，灰釉陶器片等が表面採集されたため，縄文，平安両期にわたる遺構の存在が予想された。しかし，調査の結果多数の土師器片，灰釉陶器片がⅠ層，Ⅱ層から出土したものの，該期の明確な遺構は検出されず，前述の土壙のほか，わずかな焼土塊が確認されたのみであった。栗木沢遺跡の南側調査区の例を考えれば，遺構は表土直下に浅く存在していたため，耕作等によって既に破壊されたとも考えられよう。また尾根部の住居址は栗木沢遺跡，ヨケ遺跡などの近接する山麓の遺跡とは異なった高燥な地にあり，どのような性格の住居か興味のあるところである。いずれにせよ類例の収集を行いながら考察していきたい。

（小林至，田中正治郎）



第37図　樋口遺跡 1号住居址（1：40）



第38図　樋口遺跡出土遺物（1～13 1号住居址〈1：4〉，14～16 遺構外〈1：1.5，1：4〉）

21. 吉田川西遺跡（よしだかわにし）

本遺跡は，塩尻市広丘吉田地区にあり，25,100m² を対象に昭和59年８月初旬より11月下旬まで調査を行った。本年度調査は対象面積のほぼ⅓程度である。遺跡は奈良井川の形成する最も低い段丘上に位置しており，この遺跡をのせる段丘面の東側は，田川によって削られている。今年度の調査区域は，ほとんどが水田として利用されていた。

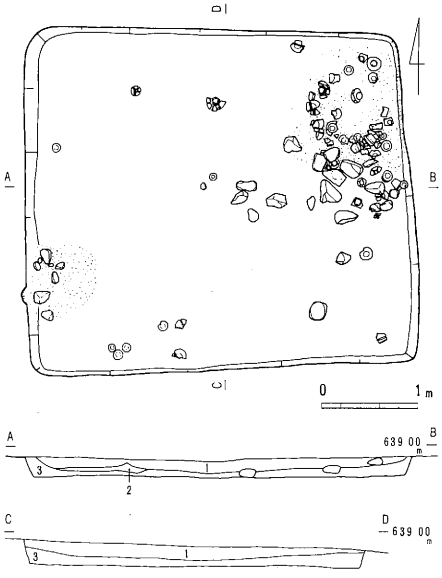
調査は，層位確認のためのトレンチをいれることから始めた。その結果，上層よりⅠ層耕作土，Ⅱ層黒褐色土，Ⅲ層砂礫層と分けることができた。なお，Ⅰ層の耕作土は２枚から３枚の水田の痕跡が確認されたことにより，細分も可能である。またⅢ層の砂礫層は５m以上にもおよぶ層厚をもち，奈良井川の段丘礫と思われる。Ⅰ層中からは平安時代から現代にわたる遺物が混在して出土し，Ⅱ層が平安時代の包含層と確認できた。またⅢ層からの遺物の出土はなかった。最も西に入れたトレンチではⅠ層下がすぐにⅢ層となり，遺物の出土もなく遺跡の中心は東側部分と考えられた。トレンチ調査終了後，Ⅱ層が確認された調査区東側部分より調査を始めた。東側の部分では，西端に平安時代の住居址がⅠ軒検出されたのみで，遺物の出土量も少なく，居住空間ではなかったと推定される。調査区中央部分の南側で，平安時代の住居址21軒，土壙５基，中世と思われる土壙６基を検出調査した（第39図）。遺構はすべてⅡ層及びⅢ層に掘り込んでいる。平安時代の住居址はすべて竪穴で，１辺３mから７mの正方形のプランを持っており，大きさにバラツキがみられる。ほぼすべての住居址でカマドが検出されたが，はっきりしたものは少なく，カマドの位置は東西のどちらかに限られている。また貯蔵穴や柱穴がみつからない住居址が多い。遺物としては，須恵器の杯・甕，土師器の杯・椀・皿・鉢・甕・鍔釜，灰釉陶器の椀・皿・段皿・水注，緑釉陶器の皿，鉄製刀子，鎌，鉄鏃，金銅製の刀装具などが

第39図　吉田川西遺跡全体図（上）（１：6,000）と発掘区域図（下）（１：720）

出土している。これらをみると，だいぶ年代幅が感じられる。このほか遺構外からではあるが，II層からは，灰釉陶器の双耳椀片，佐波利椀などが出土している。またI層中よりは，中世陶器（14世紀から16世紀の瀬戸美濃系の皿・おろし皿・鉢・仏花器・瓶子，常滑焼の甕片），かわらけ，内耳土器，中国製の青磁，白磁片などが多数出土しており，その他近世陶器も多数出土している。この中でも特に青磁と白磁は184点を数え，11世紀代の白磁から，12世紀から14世紀代と思われるものまでみられる。これら中世から近世にかけての遺物の量から，この時期の遺構の存在が予想されたが，今年度の調査区域ではすでに水田化のために削平されてしまった可能性が強く，検出できなかった。なお，ここが水田化された時期は，一番古いと思われる水田の耕土から出土した遺物より，近世以降の可能性が強い。

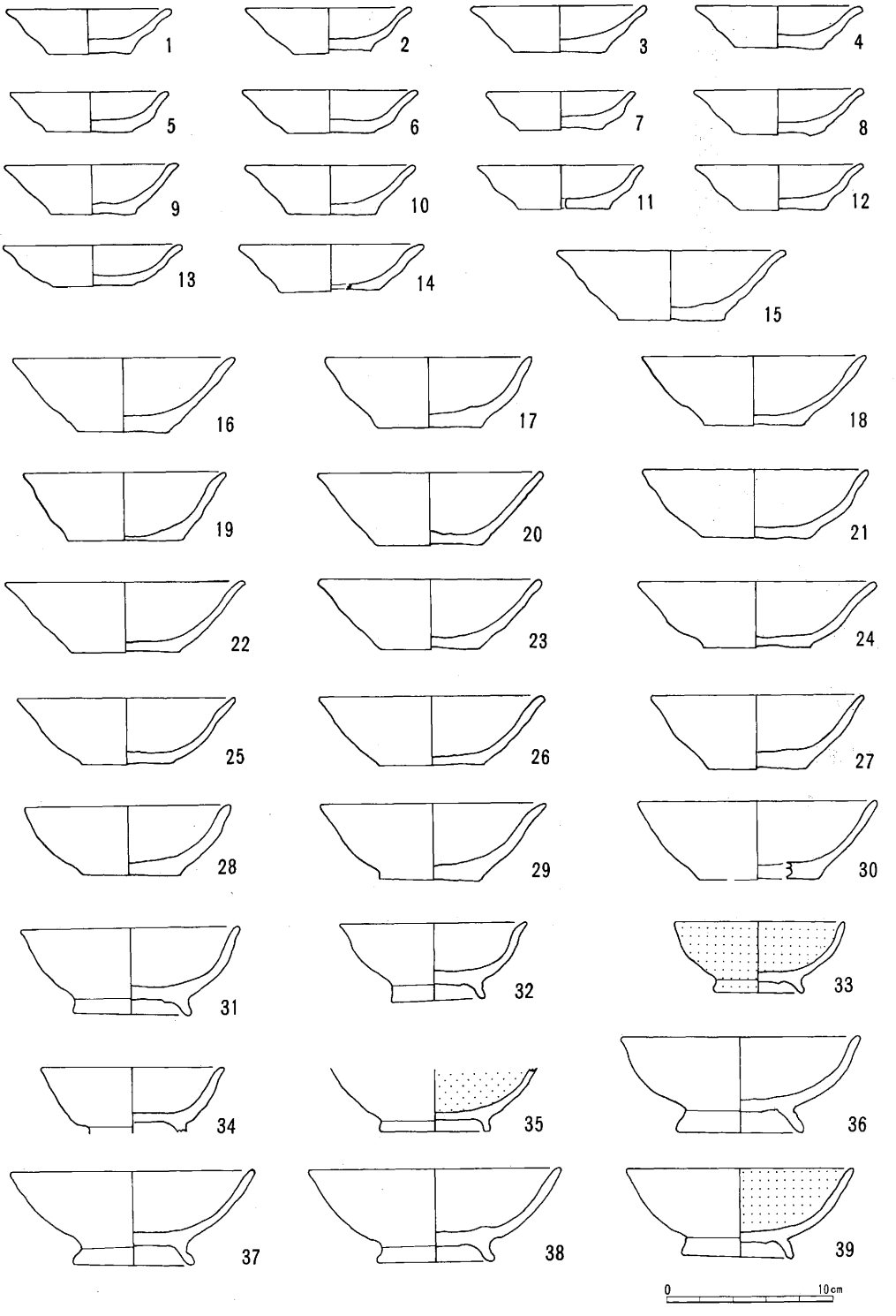
ここでは遺物が特異な状態で多数出土した，第5号住居址を詳しく取り上げてみたい。第5号住居址（第40図）は3.6m×4.0mの方形にちかいプランをもつ。壁高は20cm程度であり床面は中央部分のみ堅くしまっている。カマドは西壁の南西のコーナー近くにつくられており，本来は石組みのカマドであったと思われるが，袖石らしい石が残っていたのみで，周辺に焼土や炭が厚く分布している。煙り出しの施設としてはわずかに斜めに壁を掘りこみ，半円状の突出部を設けており，内面は焼けている。柱穴，貯蔵穴，周溝等は発見することができなかった。遺物や石は東側部分に集中しており，下面には炭の混じった層が広がっている。出土した土器は大部分が椀や杯であり，完形またはそれに近いものが大部分である。出土状況は口縁を上または下にむけたものがほとんどで，置かれたような状態での出土である。中には杯が重なった状態のものもみられた。石はこれらの土器群の上に投げこまれた状態で検出され，下には杯が潰れていた。これらの遺物が集中して出土した部分はやや床面が盛りあがっている。このように完形またはそれに近い土器が，置かれたような状態で多数発見されたことが，住居の廃棄の際の人間行動を考えた場合，どのような意味を持つのか興味深い。遺物（第41図，第42図）は，ロクロ調整の土師器の杯（第41図1～30），椀（31～39），皿（第42図1～4），鉢（7）や，甕（8），鍔釜（9・10），灰釉陶器の椀（5），段皿（6）などがみられる。

この他，図に示さなかったが，土師器や灰釉陶器の破片が400点ほどみられ，また鉄製品の破片も2点みられた。土師器の杯は法量によって大小の2種に分けることができる。1～14が小型のもので口径10cm前後，器高3cm前後である。底部はすべて糸切で，その上に板状圧痕がみられるものもある。しか

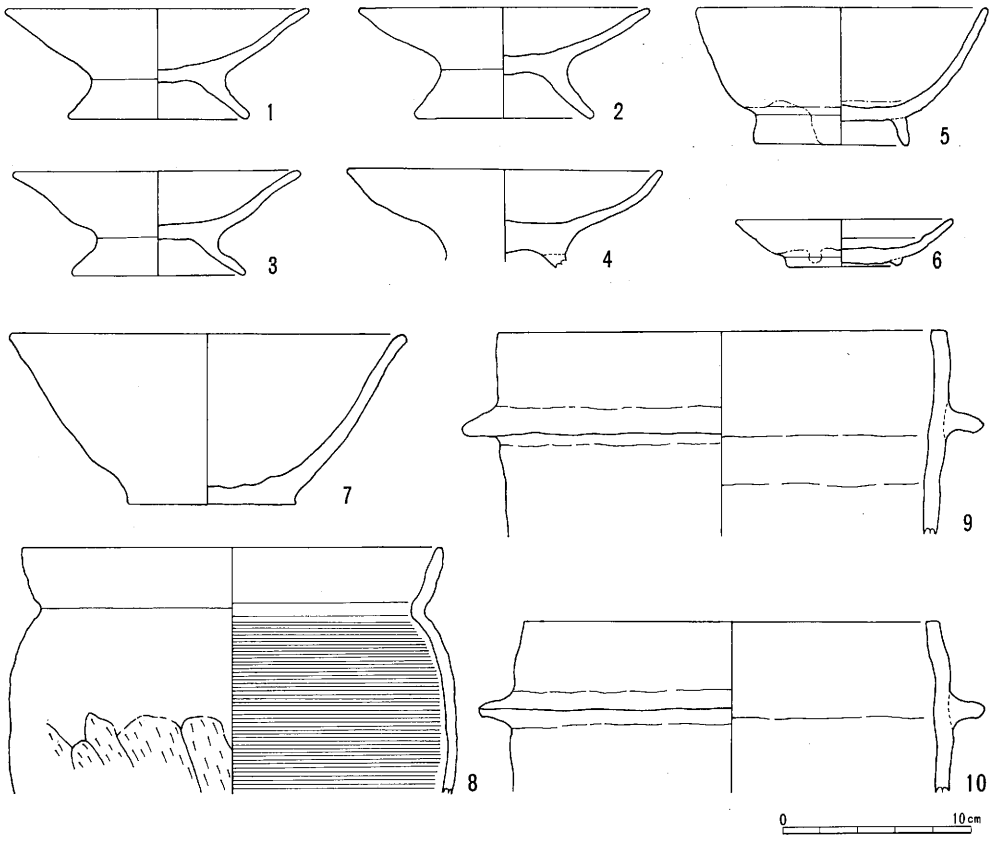


1　黒褐色土層（II層）　2　砂層
3　黒褐色土層（砂まじり）

第40図　吉田川西遺跡5号住居址（1：80）



第41図　吉田川西遺跡５号住居址出土土器（１：４）



第42図　吉田川西遺跡５号住居址出土土器（１：４）

し11は焼成以前に底部中央に穴があけられており，杯に分類するには問題がある。16～30が大型で，口径14cm前後，器高４cm前後である。椀はいずれも高台付で，杯と同様に法量によって大小の２種に分けることができる。小型は口径12cm以下，器高５cm以下のもので，内面または両面が黒色処理される類例もある。大型は，口径14cm以上，器高６cm前後で，小型と同様に内面が黒色処理されたものがいくつかある。これらの杯や椀の中には，ロクロ水挽き後，内面のみ調整が施されている一群もみられる。皿はいずれもいわゆる足高高台付きで，口径16cm前後，器高８cm前後の大きさである。鉢は口径21cm，器高９cmで大型である。甕，鍔釜はいずれも破片であり，甕はロクロで調整をした後，縦方向のヘラケズリが施されている。灰釉陶器はいずれも東濃産で11世紀後半の所産と思われる。以上の点からこれらの土器群も11世紀後半のものと考えられ，この時期の編年を考えるうえで，また当時の食器のありかたを考えるうえでも好資料となると思われる。

59年度に調査を終了した住居址は21軒であるが，来年度，更に多数の住居址の発見が予想され，平安時代の「ムラ」の解明の手がかりになるであろう。特にこの地域は，和名類聚抄にみられる「良田郷」と考えられている地域で，それとの関連が注目される。　　（原　明芳）

22. 神戸（ごうど）遺跡

本遺跡は，松本市笹賀神戸地籍にあり，現神戸集落一帯の広範囲にわたっている。遺跡は，現奈良井川河床面との比高差３～４m程の段丘上に立地しているが，現在その段丘崖は構造改善事業等により必ずしも明確ではない。調査対象地区は，遺跡の東端に当たり，神戸橋の西側，県道をはさんで南北に伸びる地域である。調査面積は40,400m² であり，そのほとんどが水田として利用されていた。調査は昭和59年10月下旬から11月末日までと短期間であり，来年度継続調査となるため，本年度は，遺跡の地形形成過程，層序，遺物包含層の有無を明らかにすることを主たる目的とした。なお，昭和55年度に，松本市教育委員会によって，今回発掘区の西側微高地の調査がなされ，平安時代の住居址２軒と墓址20基程，縄文時代の打製石斧少量が検出されている。

トレンチの設定にあたっては，近接する牛の川・くまの川両遺跡の報告を参考に，奈良井川の堆積方向をN20°Wと予測し，その方向のトレンチ２本とそれに直交する約50m間隔のトレンチ４本を設定し調査した（第43図）。

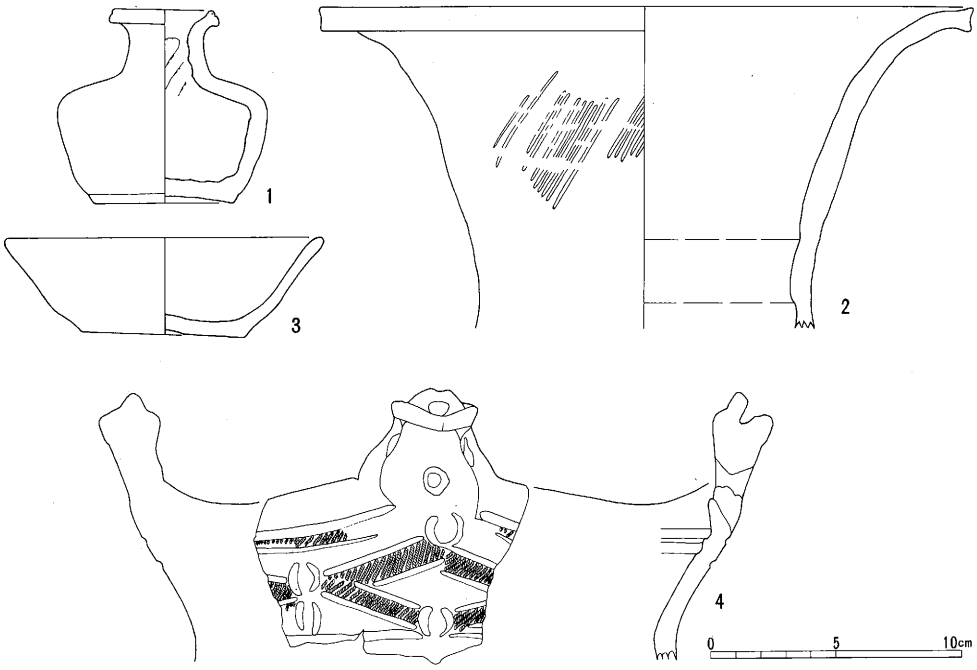
この結果，調査地点での土層は，砂と礫とが互層を成し，河川堆積物の様相を呈していた。層序は，上から，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層砂層１，Ⅲ層砂層2′，Ⅳ層礫層１，Ⅴ層砂層２，Ⅵ層礫層２，Ⅶ層砂層３，Ⅷ層礫層３の８層がとらえられた。Ⅷ層は人頭大の礫の堆積層で，一応基盤と考えたが，部分的に深掘りしてみる必要があろう。また，このⅧ層は凹凸を成しており，それに応じてⅦ層も厚薄の差を生じている。Ⅵ層は，県道南，01トレンチに沿って溝状に存在する礫層で，幅約2.5m，深さ約20cmの小規模なものであるが，最も多くの遺物を出土した。Ⅴ層はほぼ全域にみられ，非常に緻密で固い。中世陶器片，須恵器片等をわずかに含んでいる。Ⅳ層は，02・04トレンチの面側にみられる溝状の礫層で，一過性の堆積物である。Ⅲ層は，県道北，06・03・08トレンチを横切ってほぼ南北方向に溝状に堆積している。この層の下部は，粗い砂と指先大の礫が多く，Ⅵ層と同様に遺物も多い。Ⅱ層は，ほぼ全域に分布し，指先大の風化礫を含むのが特徴である。

第43図　神戸遺跡全体図（１：6,000）

これらの土層把握から，発掘区の地形形成過程を以下のように考察した。奈良井川供給と考えられるⅧ層の礫が北西方向へ傾斜しながら凹凸を持って堆積し基盤を成す。この凹部に厚く，凸部に薄くⅦ層の砂が堆積する。Ⅶ層は砂・シルト・粘土の交互堆積であることから，ゆっくりとした流れの中での堆積と考えられる。このⅦ層を切ってⅥ層が溝状に堆積し，ほぼ時を同じくしてⅤ層が全面に堆積する。時期的には，平安初期以後，灰釉陶器出現以前と考えられる。次にⅤ・Ⅶ層を切ってⅣ層の礫が北西方向に堆積し，その前後にⅢ層が南から北方向へ溝状に堆積する。時期は，おそらく灰釉陶器出現以後であろう。そして中世以後，Ⅱ層がほぼ全域に堆積し，耕作が行われて今日の地形が形成されたと思われる。

遺物が検出された層は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層である。中でもⅥ層は最も多く，第44図１～３など平安時代のものが出土した。１は須恵器の完形小壺，２は須恵器の甕片，３は土師器の杯である。なお，１・３は底部に糸切り痕を持っている。４はⅦ層中にて出土した縄文時代後期加曽利Ｂ式の土器片である。これらの層に含まれる遺物は，出土層位の状況からみて偶発的に取り込まれたものであり，遺物包含層とは言い難い。しかし，土器片の摩耗度の弱さからみて，発掘区に近い，南ないし南西の方向に包含層が存在すると予想される。

以上の調査結果により，今年度の発掘区は奈良井川の影響の強い氾濫原であり，居住空間とは考えられない。そこで来年度は，更に，発掘区域を広げて，確かな包含層の存在を確認する方向での調査を行い，遺跡の性格付けをする必要がある。また，今年度一部手がけてきた小字調査等から，歴史的環境との関連についても考察していきたいと考えている。　（小林俊一）



第44図　神戸遺跡01トレンチ出土遺物（1～3 Ⅵ層，4 Ⅶ層）（1：3）

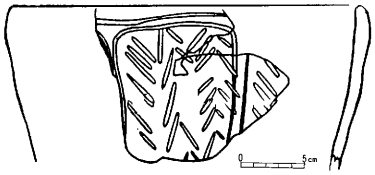
23. 上二子（かみふたご）遺跡

本遺跡は，松本市笹賀上二子地籍にあり，奈良井川河床面との比高差５～６ｍの段丘上に立地し，現上二子集落一帯が遺跡範囲である。調査区は，遺跡の西端にあたり，調査対象面積は8,800m² で，昭和59年11月下旬にその一部分の調査を行った。今年度は短期間のため，地形形成過程の状況・層序・遺物包含層の有無を明らかにする点に主眼をおいた。

トレンチ設定にあたり，地形を観察したところ，南西から北東へ緩やかな傾斜が確認されたので，これに直交するトレンチ１本を，N40° W方向に設定し発掘した（第44図）。

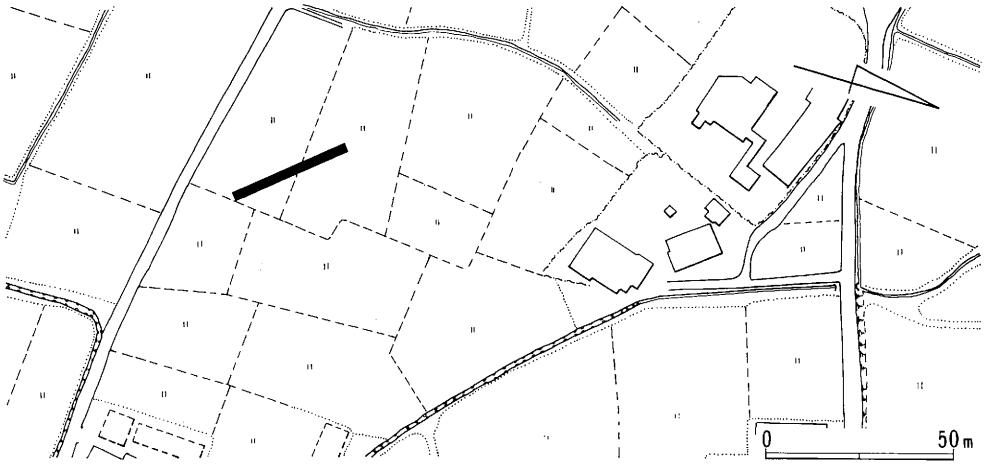
この結果確認された層序は，Ⅰ層耕作土，Ⅱ層砂層１，Ⅲ層砂層２，Ⅳ層砂層３，Ⅴ層礫層１，Ⅵ層粘土層，Ⅶ層礫層２であり，砂層と礫層が複雑に重なりあっていた。１本のトレンチでは土層の広がりが確認できないため，地形形成過程を把握することはできなかったが，Ⅴ層の礫は小さく，酸化鉄の付着から考えて鎖川の影響をうけていることが推測される。遺物は，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層から出土し，Ⅱ・Ⅲ層からは土師器，須恵器，灰釉陶器片が，Ⅳ層からは縄文時代中期後半の曽利Ⅴ式の深鉢型土器の破片（第45図）が出土している。全体の遺物量は多くなく，また小さい破片ばかりであった。出土層位の状況からみて，いずれもⅡ・Ⅲ・Ⅳ層にとり込まれた遺物と考えられ，遺物包含層とはとらえにくいものである。

本遺跡は，奈良井川や鎖川の堆積物によって形成された地に立地していることがうかがえたが，本年度の調査からは確実な遺物包含層を確認できなかった。本遺跡の詳細は，来年度の調査を待つところであるが，隣接するくまの川遺跡との関連の追究，遺跡の性格の解明等，大きな課題が残されている。



第45図　上二子遺跡Ⅳ層出土土器（１：６）

（春日雅博）



第46図　上二子遺跡トレンチ配置図（１：2,000）

発掘調査概関係引用・参考文献

和田博秋　1980「大久保B遺跡」（『長野県史』主要遺跡―南信）

黒崎　直　1980「近畿における８・９世紀の墳墓」（『研究論集』Ⅵ　奈良国立文化財研究所）

戸沢充則　1950「岡谷市下り林遺跡の早期縄文式土器」（『信濃』第２巻７号）

〃　1952「岡谷市下り林遺跡調査報告」（『諏訪考古学』８）

〃　1973『岡谷市史』上

長崎元広　1984「長野県岡谷市下り林遺跡の早期縄文土器」（『長野県考古学会誌』48号）

斉藤　忠　1976「奈良時代前後における墳墓地の選定」（『日本古代遺跡の研究　論考編』）

水野正好　1984「奈良朝貴紳の墳墓の占地」（『郵政考古紀要』Ⅸ）

東郷正美他　1984「糸静線活断層系のトレンチ調査」（『地震予知連絡会報』32）

今村啓爾　1973『霧ケ丘』

この他、各遺跡の概要については、長野県埋蔵文化財ニュースNo. １～12に報告されている。

「長野県埋蔵文化財ニュース」収録の県内主要遺跡概報（センター調査分は除く）末尾数字は号数

○北信地方

上水内郡豊野町浅野（縄文前期集石址）	1
更埴市森将軍塚（保存整備に伴う成果）	2・3
中野市栗林（弥生中期の土壙墓など）	5
下高井郡野沢温泉村岡ノ峯（縄文中期末土壙群と後期石棺状遺構群）	7・9
長野市小島境（弥生～古墳時代住居址）	〃
上水内郡小川村筏（縄文中期・平安住居址）	8
長野市旭町（縄文・古墳・平安住居址）	10
飯山市長者清水（中世掘立柱建物址）	10
長野市・更埴市土口将軍塚（古墳内部主体）	10

●東信地方

佐久市北西久保（弥生～平安大集落址）	4
小諸市久保田（縄文後期礫堤敷石住居址）	6
佐久市西八日町（弥生～平安大集落址）	6
小県郡長門町中道（縄文前期・玉作工房）	7
南佐久郡八千穂村池ノ平（先土器）	7
小県郡東部町戍立（縄文後期住居址）	8
佐久市鋳師屋（奈良～平安住居址）	10
北佐久郡御代田町野火付（奈良～平安住居址と埋葬馬土壙など）	11
北佐久郡浅科村矢嶋城跡（中世城館址）	11
佐久市戸坂（縄文～中世住居址）	12

●中信地方

大町市五十畑（奈良～平安大集落址）	5
松本市下神（平安前半の集落址）	5
南安曇郡三郷村黒沢川右岸（縄文～弥生）	7
塩尻市柿沢（縄文中期集落址）	8
松本市南栗・北栗（奈良～中世集落址）	10
塩尻市堂の前（縄文早期住居址など）	10
東筑摩郡山形村殿村（縄文～平安住居址）	11

●南信地方

諏訪市一時坂（縄文～平安住居址，隈丸方形墳と前方後方形周溝墓など）	2・3 5
岡谷市上屋敷（縄文早期末住居址など）	6
下伊那郡鼎町高松原（縄文～弥生集落）	
上伊那郡辰野町半平蔵（古墳～平安の住居址群と掘立柱建物址など）	7 8
下伊那郡松川町前田（縄文後期配石址）	10
茅野市高風呂（縄文前期住居址など）	11
下伊那郡根羽村信玄塚（縄文後・晩期）	12
駒ケ根市小山（中世建物址・池泉址など）	12

Ⅱ．普及・研究活動の概要

１．説明会

中島Ｂ遺跡：昭和57年８月29日(日)，現地説明会を２回に分けて行う。併せて出土遺物を現場に展示する。パンフレットも作成し配布。参加者80名余。

昭和59年７月22日(日)・29日(日)，現地プレハブに出土遺物，パネルなどを使った展示を行う。両日とも午前１回，午後１回の現地説明。パンフレット配布。参加者120名。

栗木沢遺跡：昭和59年８月18日(土)，埋文センターにおいて，作業員・地元住民を対象にした説明会を『栗木沢の大昔』と題して行う。スライド映写を中心にして調査成果の説明をし，出土遺物も展示した。参加者17名。

吉田川西遺跡：昭和59年12月９日(日)，現地プレハブに出土遺物，年表などの展示をする。地元住民の関心は極めて高く，参加者263名，午前２回，午後１回の３回に分けて現場説明を行う。パンフレット『掘り出された昔の吉田』を見学者に配布する。

２．展示会

埋文センターと市立岡谷美術考古館との共催で，昭和59年11月30日(金)～12月２日(日)まで，市立岡谷美術考古館二階において「中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展―埋れていた世界―」を開催した。時間は午前９時から午後４時。展示品の中心は昭和57年度から59年度まで過去３年間にわたって岡谷市内10遺跡の発掘で出土した土器，石器類であり，先土器時代から奈良・平安時代までを時代順にケース内に説明パネル・模型などとともに展示した。また，自然遺物，石器製作過程のコーナーも設け，調査研究員が見学者に説明した。また，出土品の展示に合わせ，資料集やパンフレットを作成し，発掘に協力していただいた方を中心に配布した。

展示品のほかでは「土器パズル」・「火起し」・「石器作り」のコーナーを設けたり，スライド映写を行ったりした。

３日間で，30日―292人，１日―283人，２日―537人，合計1112人の見学者があり，盛況のうちに終わることができた。

３．研究会

昭和59年２月15日，センターにおいて神奈川県教育委員会文化財保護課主任主事山本暉久氏を指導者にお願いし，「塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐって」と題して研究会を行った。出席者は神村・河西部長以下センター職員14名と樋口昇一・会田進・宮下健司・花岡弘・高見俊樹・平林彰の各氏であった。翌16日にも，山本氏とセンター職員とで，長野県の敷石住居址一覧表をもとに研究会を行った。以下，そのまとめである。

山本氏の話：敷石住居の研究にあたって，分布の特性・その性格・歴史的な変遷の中での意味づけの３つの柱をすえ，敷石住居風習を縄文文化の中にどう位置付けるかを考えた。敷石住

居は，石が敷かれた住居であるが，基本的には柄鏡形住居であるという認識が必要で，その上に敷石を施す風習が地域的に異なっているととらえるべきである。すなわち，柄鏡形敷石住居とし，柄鏡形の変遷を第一義にし敷石を論ずべきである。

柄鏡形敷石住居は，中期後半の石柱・石壇の敷石風習の面的拡大と出入口部埋甕を中心とした小張り出し部の面的拡大という２現象の結合によって成立したと考えられ，神奈川県では加曽利Ｅ３期に完成した柄鏡形住居が見られ，多摩などでは加曽利Ｅ４古期で柄鏡形敷石住居が成立している。このことから，柄鏡形敷石住居は中期末から後期初頭にかけて西関東の山寄りの集落の中で成立したことが推定できる。また，柄鏡形住居は地域的な分布範囲を示し，この中で敷石の施され方にかなりの地域差があり，柄鏡形と敷石風習の地域的分布と時間的な関係を考える必要がある。その後，後期前半段階で発展し，出入口の埋甕風習がすたれたり，張り出し部の形態や炉の位置が変化する。そして後期後半までその系譜は追える。

敷石住居は特異な遺構とされ，その性格についても特別視されてきたが，中期後半から後期にかけて柄鏡形住居が一般住居形態となり，一般住居と考えなければ理解できない。一方，これらの敷石なり張り出しなりを形成した要因については，生産手段の限界という内的矛盾に環境変化という外的矛盾が加わり，石壇・石柱という祭祀空間の面的拡大と出入口部分の埋甕祭祀の場の拡大を極度に発達させた中で成立したと考える。

御堂垣外・久保田遺跡の敷石住居：御堂垣外３号住は柄鏡の変形ととらえられ，５号住が本来の姿で，１軒の流れの中でずらして建てていったもので，３号住は廃絶時の姿と考えられる。小諸市久保田１号住は大形で礫堤をめぐらしており初めての発見であろう。普通の大きさの柄鏡形敷石住居も発見されており，集落分析に役立つ好資料といえる。

長野県の敷石住居のあり方：敷石住居は柄鏡形住居であることが基本との山本氏の見解に対して，長野県の敷石住居は必ずしも柄鏡形の形態のものばかりではない。このことが長野県の敷石住居の本来的な姿なのか，それとも調査上の問題なのか，この点についての議論がなされておらず課題である。長野県において敷石住居の古い時期のものとして，巾田特殊遺構，曽利Ⅳ併行期の下吹上１号住・湯の上１号住，曽利Ⅴ併行期の穴場12号住・柿沢東４号住等が挙げられた。そして，古い時期の敷石住居は千曲川水系に多く見られる傾向があり，土器型式において加曽利Ｅ式の影響の強い地域であることが指摘され，群馬・埼玉方面との関連でとらえる必要がありそうである。一方，長野県で柄鏡形敷石住居が盛行するのは堀之内式期になってからで関東とはずれている。このことは，長野県が敷石住居の中心地ではなく，受容した地域であることを指しており，その受容，変遷過程を追って見る必要がある。更に天竜川流域では敷石住居がきわめて少ない点をどう考えるか今後の課題である等の意見が出された。

研究会を終えて：県内において敷石住居の発見は，中期の住居址のような多数の検出ではないものの点々とあり，更に最近の開発に伴う緊急発掘によって資料数は増加している。しかし，県内の敷石住居については本格的に論じられていない。今回御堂垣外遺跡での敷石住居の発見

を契機としてこのような研究会を持ち，更にその資料として北・東・中・南信別に敷石住居一覧表を作成したことで，敷石住居を研究する上でいくつかの視点を持つことができた。

第１点は敷石住居の出現についてである。山本氏は敷石住居の初現期の姿を中部山地の中期後半の石柱・石壇を持つ家に求められている。県下において敷石住居は曽利Ⅳ・Ⅴ式併行期には存在しており，盛行するのは堀之内式期である。県下の敷石住居のあり方と，山本氏の初現期とをどうとらえたら良いのか，資料集成・周辺地域との関連から明らかにする必要がある。第２点は敷石住居の形態についてである。山本氏は敷石住居は柄鏡形を基本としている。県内の敷石住居でプランがとらえられたのは資料作成時で74例を数えた。円形30，柄鏡形20，方形11，多角形10，隅丸方形３であり，柄鏡形が卓越してはいない。これが調査上の問題や斜面立地の状況から来るものか，また，関東より一時期おくれて盛行するという周辺部の様相を持ったものなのか解明する必要がある。第３点は分布についてである。敷石住居は千曲川水系・諏訪地方に多く見られ，天竜川流域にはほとんど見られない。こうした差が何に起因するものなのか，中期後半におけるそれぞれの地での文化様相の違い，外部からの文化の入り込み方の違いなのか等重要な課題である。第４点はその性格である。敷石住居内から漁網錘がまとまって出土した例が２例報告された，いずれも諏訪地方である。一般住居としての色彩が強いように思われるが，更に集落としてのまとまりといった点からも追究する必要がある。このほか部分敷石での敷石の施され方，廃絶の問題等，県内における敷石住居のありようとその特質を明らかにする中で，不明瞭な時期とされる縄文時代中期末から後期にかけての県下の様相が明確になると考える。そういった意味で敷石住居は大きな鍵の一つをにぎっていることを再確認した研究会であった。

4　調査技術指導

昭和57年度	上水内郡豊野町	１名派遣	更埴市	１名派遣
昭和58年度	松本市	１名派遣	飯田市	１名派遣
	北佐久郡望月町	１名派遣	木曽郡木曽福島町	１名派遣
昭和59年度	小県郡長門町	２名派遣	松本市	１名派遣

5　遺跡研究発表会

昭和57年度	大久保Ｂ遺跡について	岡谷市公民館	１名派遣
	中島Ｂ・大久保Ｂ遺跡について	諏訪考古学研究所	２名派遣
昭和58年度	膳棚Ｂ遺跡について	諏訪考古学研究所	１名派遣
昭和59年度	大洞遺跡・中島Ｂ遺跡について	諏訪考古学研究所	２名派遣

6　刊行物

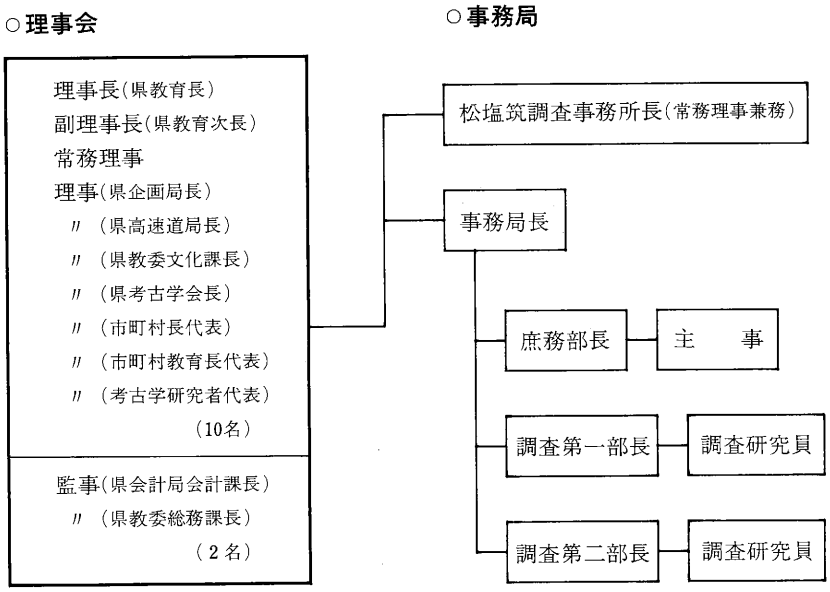
長野県埋蔵文化財ニュース（年４回）　　図書目録Ⅰ

中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展資料　　長野県埋蔵文化財センター年報１　1982～1984

III. 事業概要

1. 機構

(1) 組　織



(2) 事務所

本　　部　長野市大字南長野字幅下692の2　長野県教育委員会　文化課内

松塩筑調査事務所　塩尻市大字広丘高出字西原1977

2　事業概要

(1) 理事会及び会計監査

昭和57年度

第1回理事会　　昭和57年3月29日　　会場　長野国際会館

第1号議案　従たる事務所の設置について　　第3号議案　昭和57年度事業計画書（案）について

第2号議案　基本財産の預託管理について　　第4号議案　昭和57年度収支予算書（案）について

第2回理事会　　昭和58年3月15日　　会場　長野国際会館

第1号議案　昭和58年度事業計画書（案）について　　第3号議案　昭和57年度収支補正予算書（案）について

第2号議案　昭和58年度収支予算書（案）について　　第4号議案　寄附行為の一部変更について

昭和58年度

第３回理事会　　昭和58年６月１日　　会場　長野国際会館

第１号議案　昭和57年度事業報告について　　第２号議案　昭和57年度決算報告について

第４回理事会　　昭和59年３月17日　　会場　長野国際会館

第１号議案　昭和59年度事業計画書（案）について　　第４号議案　寄附行為の一部変更について

第２号議案　昭和59年度収支予算書（案）について　　第５号議案　監事の委嘱について

第３号議案　昭和58年度収支補正予算書（案）について

昭和59年度

第５回理事会　　昭和59年５月30日　　会場　長野国際会館

第１号議案　昭和58年度事業報告について　　第２号議案　昭和58年度決算報告について

会計監査

昭和58年度　昭和58年５月18日実施　昭和57年度事業報告書及び収支計算書について

昭和59年度　昭和59年５月17日実施　昭和58年度事業報告書及び収支計算書について

(2) 職員研修

昭和57年度

奈良国立文化財研究所研修関係（年間）　６名

一般課程・遺跡測量課程・環境考古課程・墳墓調査課程・遺跡保存整備課程・写真測量課程（各１名）

昭和57年６月	埋蔵文化財市町村担当者会議（長野市）	７名
昭和57年９月	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（岩手県）	３名
年　間	埋蔵文化財関係機関研究会等	10名

昭和58年度〕

奈良国立文化財研究所研修関係（年間）　７名

一般課程・基礎課程・保存科学課程・発掘調査関連技術課程・遺跡測量課程・集落遺跡調査課程・環境考古課程

（各１名）

昭和58年６月	埋蔵文化財市町村担当者会議（長野市）	６名
昭和58年９月	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（埼玉県皆野町）	２名
年　間	埋蔵文化財関係機関研究会等	９名

昭和59年度

奈良国立文化財研究所研修関係（年間）　７名

一般課程・環境考古課程・石器調査課程・遺跡測量課程・中近世遺跡調査課程・遺跡保存整備課程・情報課程

（各１名）

昭和59年５月	埋蔵文化財市町村担当者会議（長野市）	２名
昭和59年９月	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（栃木県藤岡町）	２名
年　間	埋蔵文化財関係機関研究会等	13名

(3) 普及活動

〔刊行物〕

昭和57年度　「長野県埋蔵文化財ニュース」　No. 1．2・3．4

昭和58年度　「長野県埋蔵文化財ニュース」　No.5．6．7．8　「図書目録Ⅰ」

昭和59年度　「長野県埋蔵文化財ニュース」　No.9．10．11．12

「中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展資料」

「長野県埋蔵文化財センター年報1984」

〔現地説明会〕

昭和57年度　8月　中島B遺跡

昭和59年度　7月　中島B遺跡　　12月　吉田川西遺跡

〔展　示　会〕

昭和59年度　中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展　―埋れていた世界―

11月30～12月2日　市立岡谷美術考古館　見学者　1,112名

(4)　調査事業（中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査・長野県教育委員会からの委託）

昭和57年度	①	中島A	(岡谷市)	2,900m²	②	中島B	(岡谷市)	2,100m²
	③	西林A	(〃)	4,000m²	④	柳海途	(〃)	500m²
	⑤	大久保B	(〃)	2,820m²	⑥	下り林	(〃)	350m²
	⑦	膳棚A	(〃)	300m²				
						調査面積合計		12,970m²
昭和58年度	①	中島A	(岡谷市)	4,300m²	②	膳棚B	(岡谷市)	7,250m²
	③	西林A	(〃)	1,720m²	④	柳海途	(〃)	14,530m²
	⑤	北山	(塩尻市)	520m²	⑥	御堂垣外	(塩尻市)	860m²
						調査面積合計		29,180m²
昭和59年度	①	中島A	(岡谷市)	2,680m²	②	中島B	(岡谷市)	1,590m²
	③	大洞	(〃)	2,910m²	④	膳棚B(白山)	(〃)	1,280m²
	⑤	青木沢	(塩尻市)	380m²	⑥	青木沢東	(塩尻市)	84m²
	⑦	八窪	(〃)	5,060m²	⑧	大原	(〃)	25,800m²
	⑨	栗木沢	(〃)	3,710m²	⑩	ヨケ	(〃)	1,490m²
	⑪	樋口	(〃)	2,900m²	⑫	高山	(〃)	4,180m²
	⑬	吉田川西	(〃)	15,400m²	⑭	神戸	(松本市)	560m²
	⑮	上二子	(松本市)	70m²				
						調査面積合計		68,094m²

(5)　事業費　発掘調査費予算

昭和57年度　102,982千円（人件費　35,513千円　物件費　67,469千円）

昭和58年度　141,603千円（人件費　63,223千円　物件費　78,280千円）

役員及び職員

職　名	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度
理事長	市村　勲（県教育長）	市村　勲（県教育長）	市村　勲（県教育長）
副理事長	大友　博幸（県教育次長）	木鋪　巌（県教育次長）	酒井　盛夫（県教育次長）
常務理事	三村　忠幸（県教委参事）	三村　忠幸（県教委参事　局付）	三村　忠幸
理事	塩谷　博夫（県企画局長） 山口　勉（県高速道局長） 樋口　太郎（県教委文化課長） 大澤　和夫（県考古学会長） 林　泰章（岡谷市長　市町村代表） 中村　博二（長野市教育長　市町村教育長代表） 林　茂樹（考古学研究者）	前田　豊彦（県企画局長） 太田　勝巳（県高速道局長） 牧田　哲夫（県教委文化課長） 大澤　和夫（県考古学会長） 林　泰章（岡谷市長・市町村代表） 中村　博二（長野市教育長　市町村教育長代表） 林　茂樹（考古学研究者）	前田　豊彦（県企画局長） 太田　勝巳（県高速道局長） 牧内　哲夫（県教委文化課長　12月辞任） 宮下　哲（　〃　12月就任） 大澤　和夫（県考古学会長） 小野　光洪（塩尻市長　市町村代表） 中村　博二（長野市教育長　2月辞任） 奥村　秀雄（　〃　2月就任） 林　茂樹（考古学研究者）
監事	三井　潔（県会計局会計課長） 西川　哲雄（県教委総務課長）	青木　了（県会計局会計課長） 西川　哲雄（県教委総務課長）	青木　了（県会計局会計課長　12月辞任） 神野　久雄（　〃　12月就任） 福沢　汪（県教委総務課長）
事務局長	三村　忠幸（常務理事兼任）	三村　忠幸（常務理事兼任） 山崎　昭三（58年10月着任）	山崎　昭三
庶務部長	丹羽　長雄	丹羽　長雄（58年10月転出） 堀内　計人（58年10月着任）	堀内　計人
主事		熊谷由紀子	熊谷由紀子
調査第1部長	神村　透	神村　透	河西　清光
調査第2部長	樋口　昇一（10月転出）	河西　清光	春原　正毅
調査研究員	小林　至　小柳　義男 土屋　積　百瀬　長秀 和田　博秋　井口　慶久 百瀬　久雄　関　賢司	小菅　敏男　小林　至 唐木　孝雄　小柳　義男 市沢　英利　百瀬　長秀 小松　宏昭　三上　徹也 原　明芳　井口　慶久 百瀬　久雄　関　賢司 田中正治郎　鈴木　道穂	小菅　敏男　小松　望 小林　至　遠山　芳彦 唐木　孝雄　小柳　義男 市沢　英利　小松　宏昭 青柳　英利　小平　和夫 小口　徹　金原　正 小林　俊一　三上　徹也 原　明芳　百瀬　久雄 関　賢司　井口　慶久 田中正治郎　春日　雅博 鈴木　道穂

長野県埋蔵文化財センター年報　1　1982～1984

発 行 日　昭和60年３月31日

編集発行　㈶長野県埋蔵文化財センター

〒399-07　長野県塩尻市広丘高出1977

TEL　0263－54－2150

印　　刷　中信凸版印刷株式会社